九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

太宰治と中国 ： 作品における中国的モチーフについての考察

劉, 金宝

https://doi.org/10.15017/1500470

出版情報：九州大学, 2014, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

太宰治と中国

―作品における中国的モチーフについての考察―

九州大学大学院　比較社会文化学府

劉　金宝

平成 27 年 2 月

論　文　の　要　旨

従来、太宰治と中国との関わりは主に「股をくぐる」、「清貧譚」、「竹青」と「惜別」に限られている。先行研究のほとんどは太宰治の翻案物とそれぞれの中国原典との比較に留まる。一方、「服装について」における寒山拾得や「惜別」における魯迅を取り巻く中国の歴史背景に関する描写などのような、中国的なモチーフも太宰治作品に散見するが、これらについては従来あまり論じられていない。本稿では、従来の先行研究において論じられていない太宰作品におけるこのような中国的なモチーフを対象として、論を展開し、太宰と中国の説話や歴史や人物などとの関わりを中心に考察した。

太宰治と中国といえば、中国人に読んでもらうために書いた「竹青」と「惜別」は注意すべき作品であろう。第一章では、「竹青」と「惜別」における中国古典と中国地理の知識をまとめた上で、太宰治がなぜ、この二作に中国古典や中国地理を多く取り入れたのか、という問題を解明した。

第二章では、先行研究に基づいて、「惜別」の執筆に際して、太宰治の参照した資料を整理した上で、補足を加えた。「惜別」における「康有為が、日本の維新に則り、旧弊を打破し大いに世界の新知識を採り、以て国力回復の策を立てよと叫び」と『世界歴史大系』第 9 巻『東洋近世史（二)』における「日本の明治維新に則つて、旧弊を打破し世界の新知識を採り、以て国力回復の策を立てよと叫び」との表現はまったく同じなので、「惜別」における中国同盟会の成立や日清戦争以降の列強の中国への進出や康有為・梁啓超などによる戊戌変法などの中国に関する描写の典拠は『東洋近世史（二)』にあることを検討した。一方、既に指摘されている太宰治の参照した資料にも、『東洋近世史（二)』にも載っていないが、「惜別」に現れる孫文と康有為との対立などに関わる描写の典拠は可能性として吉野作造『対支問題』や周佛海著・犬養健訳『三民主義解説』などを述べた。

第三章では、「思い出」における「赤い糸」と中国の赤縄説話との関わりを考察した。中国と日本における赤縄説話を概観し、身分の格差または、それによる家族の反対を表現する箇所の有無、赤い糸の結ばれる時期は「生まれた時」であるかどうか、を根拠として、太宰治の「赤い糸」の典拠を『故事成語考』、「定婚店」と沖縄に伝わる赤縄説話のいずれかに絞った上で、ヒロインは赤ん坊であるかそれとも少女であるかを決め手として、結局、太宰治の「赤い糸」の典拠は中国の「定婚店」と「灌園嬰女」が融合して成立した沖縄の

赤縄説話にあると論証した。

第四章では、太宰治の「服装について」におけると寒山拾得像を考察した。太宰治の読んだ「寒山詩」は太田悌蔵訳注の『寒山詩』であることを確認し、寒山拾得を主題とする絵画や文学作品を概説した上で、「服装について」における「非凡な格好をして人の神経を混乱させ圧倒する」という表現や太宰治と芥川龍之介・井伏鱒二、また絵画との密接な関係を根拠として論を展開し、太宰治の寒山拾得像は直接的に、或いは井伏や芥川の作品が介在して間接的に、曽我蕭白の「寒山拾得図」に基づいて造形したグロテスクなものであると分析した。

第五章では、「惜別」における表現や関連随筆に基づいて、大酒を飲みながら貧しい生活を送っているという竹林七賢観を太宰が持っていたことを確認した上で、そうした竹林七賢観を「晋書」や「世説新語」における竹林七賢に関する記載と対照させて、太宰の竹林七賢観が一面的なものであったことを論じた。

以上のように、第二章から第五章までは、中国の歴史、中国の説話、中国の人物を、素材にして考察した。第六章では、視点を変えて、太宰治作品がいつ、誰によって中国に紹介され始めたのかということについて検討した。「幻の漢訳」と呼ばれる「竹青」と「惜別」の掲載（予定）雑誌であった『大東亜文学』の性格について説明した上で、訳者の人物像や翻訳の経緯を考慮した結果、昭和 17 年の章克標による「きりぎりす」の中国語訳である「蟋蟀」が太宰治作品の漢訳の嚆矢であることを解明した。

本論文の考察を通じて、太宰治と中国との関わりは中国の文学作品以外に、中国歴史、中国地理、中国人物（寒山拾得や竹林の七賢人など）、中国説話（赤縄説話や蕉鹿説話など）など、中国文化のいろんな面に渉っていることが明らかになった。このような研究を通して、次のような学術成果が期待できると思われる。

◇太宰治と中国文学との関連について、従来の研究は翻案物にのみ注目してきた。本論文では特に、太宰治作品に散見する中国的なモチーフに照明を当て、従来の研究で欠落した部分を補う。

◇今後の太宰治の創作方法や世界観に関する研究に論拠を提供する。

◇今後の太宰治研究に役立つと思われる中国の文献を資料として提供する。

目次

序論・・1 頁

第一章、太宰治と大東亜共同宣言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7 頁

はじめに

第一節、「竹青」と「惜別」における中国古典

一、「竹青」における中国古典

二、「惜別」における中国古典

第二節、「竹青」と「惜別」における中国地理に関わる叙述

一、「竹青」における中国地理についての叙述

二、「惜別」における中国地理についての叙述

第三節、太宰治における時局性

一、大東亜五大宣言の理念

二、戦時下の太宰治

まとめ

第二章、太宰治「惜別」の成立について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26 頁

はじめに

第一節、『世界歴史大系』第 9 巻『東洋近世史（二)』

一、中国革命同盟会の成立

二、戊戌政変

三、列強の進出

四、義和団の乱

五、三回の革命

六、支那の独立保全

第二節、その他の資料

一、三民主義

二、興漢会の成立及び孫文と康有為との対立

三、日本の義士

まとめ

第三章、「思い出」における「赤い糸」と中国の赤縄説話・・・・・・・・・・・・・53 頁

はじめに

第一節、中国の赤縄説話及び日本におけるその受容

一、中国の赤縄説話

二、日本における赤縄説話の受容

第二節、橋本誠一の話

第三節、上田秋成の「吉備津の釜」

まとめ

第四章、太宰治と寒山拾得・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77 頁

はじめに

第一節、寒山詩

第二節、絵画―寒山拾得図

第三節、日本の文学作品における寒山拾得像

一、坪内逍遥の「寒山拾得」

二、森鴎外の「寒山拾得」

三、芥川龍之介の「寒山拾得」

四、芥川龍之介の「東洋の秋」

五、井伏鱒二の「寒山拾得」

第四節、太宰治の寒山拾得像

一、太宰治と井伏鱒二や芥川龍之介

二、太宰治と絵画

まとめ

第五章、太宰治の竹林七賢観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103 頁

はじめに

第一節、太宰治の竹林七賢観

第二節、太宰治の竹林七賢観の一面性

第三節、太宰治の中国隠者観

一、太宰治の日本隠者観－貧
二、太宰治の中国隠者観－貧
まとめ

第六章、太宰治作品の漢訳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117 頁
はじめに
第一節、幻の漢訳
一、『大東亜文学』の成立
二、『大東亜文学』の内容
第二節、実際の漢訳
一、雑誌『訳叢』
二、訳者の章克標
三、『訳叢』における翻訳作品の選択
四、「きりぎりす」の選択について
五、太宰治作品の中国における翻訳
まとめ

結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・138 頁

参考文献一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・162 頁

序論

太宰治の同時代評は彼が文壇にデビューした翌年の昭和９年まで遡ることができる。太宰治の「葉」（『鷭』第１輯　昭和９年４月）について、「澄んでゐるところと濁つたところがある。要するに自我の高揚と陥没との交錯である」[1]と指摘した尾崎一雄は太宰治作品を高く的確に評価した最初の文学者だと見られている。それ以来太宰治に関する同時代評や先行研究は枚挙にいとまないほど多い。紙幅及び本論文との関係で、奥野健男と相馬正一の論考を特筆することにする。

昭和 31 年１月、近代生活社より刊行された奥野健男の『太宰治論』では、「下降指向」[2]という概念で、太宰治の人と作品を規定しており、太宰治の全作品を前期・中期・後期という三つの時期[3]に区分している。太宰治の人間像と作品をはじめて全面的に論じたもので、太宰治研究史上最も優れた業績と考えられている。以降の研究の基盤となり、継承され否定されながら影響を与えている[4]。

また、青森県の雑誌『郷土作家研究』の第 3 号（昭和 37 年７月）、第 4 号（昭和 39 年６月）、第５号（昭和 41 年６月）に連載された「太宰治と「家」の問題」や、審美社刊行の雑誌『太宰治研究』の第２号（昭和 37 年 12 月）、第３号（昭和 38 年４月）、第５号（昭和 38 年 12 月）に上・中・下に分載された「高校時代の太宰治」や、『日本近代文学』第１巻（昭和 39 年 11 月）に発表された「太宰治とコミュニズム」など、相馬正一の一連

---

[1] 三好行雄『太宰治必携』　学燈社　1980 年９月　207 頁。

[2] 不完全なものから完全なものへ、劣者から優者へ、混乱から調和へ、人間から神へ、と言った方向へ、自己の欠如感覚を、自己完成、あるいは立身出世などの心理的優越乃至社会的優越感により埋めようとする、長い支配秩序により馴致され形成された人間の精神の「上昇指向」の定型に対する反逆の倫理としての「下降指向」である。それはたえず自己を破壊し、自己の欠如感覚を決してごまかさず、かえつて深化させていく。そうすることにより既成の社会の一切の秩序に反逆し、その秩序を内側から崩壊させる。既成秩序に調和的な倫理である「上昇指向」に対し、反逆としての「下降指向」の倫理を考えたのである。（奥野健男『太宰治論』　近代生活社　1956 年２月　15 頁。）

[3] 前期は、昭和 1932 年の「晩年」から 1935 年の「HUMAN・LOST」までの４年間。中期は、1937 年の「満願」より 1945 年の「お伽草紙」までの９年間。後期は、1945 年の「パンドラの匣」より昭和 48 年の「グッド・バイ」までの３年間。

[4] 三好行雄『太宰治必携』　学燈社　1980 年９月　209 頁。

の素晴らしい考察がある。後にこれらを改稿増補して『若き日の太宰治』(筑摩書房　1968年3月）と『増補若き日の太宰治』（津軽書房　1991年5月）を刊行した。家との関係、コミュニズムとの関係、罪の意識の問題などに照明を当て、作家以前の太宰治の人間像を追究しようとした、太宰治研究史上、画期的な業績として、以降の研究に決定的な影響を与えている。

一方、九頭見和夫の『太宰治と外国文学―翻案小説の「原典」へのアプローチ』（和泉書院　2004年3月）も看過できないものである。太宰治と、シラー、カフカやホフマンを初めとする西洋文学との関わりが比較文学的な視点から詳しく論じられているが、中国文学との関連については、言及されていない。

従来、太宰治と中国文学との関わりは主に「股をくぐる」、「清貧譚」、「竹青」と「惜別」に限られている。

「股をくぐる」は昭和3年7月1日発行の「細胞文芸」7月号、第1巻第3号の「創作」欄に、「辻島衆二」の署名で発表され、いわば太宰治の習作時代の作品である。中国の秦末漢初に、策謀にたけた将軍として有名な韓信の少年時代の逸話に材を取ったものである。「股をくぐる」の典拠本文については、鈴木二三雄が「太宰治と中国文学(二)―『清貧譚』と『竹青』」において、「太宰の「股をくぐる」のストーリーの構成や描写の様子からみると、たぶん「十八史略」を素材として書かれたものと思われるのである。」[5]と指摘している。

「清貧譚」は昭和16年1月1日発行の「新潮」に発表されたもので、「聊斎志異」中の「黄英」の翻案小説である。太宰治の参照した典拠本文が田中貢太郎訳・公田連太郎注『聊斎志異』（北隆堂、1929年11月）であるのは定説である。また、「竹青」は、昭和20年4月発行の『文藝』に発表されたもので、「清貧譚」と同じように「竹青」も「聊斎志異」中の「竹青」の翻案である。参照した典拠本文も「清貧譚」と同じく、田中貢太郎訳・公田連太郎注『聊斎志異』である。

「惜別」は、昭和20年9月5日、書き下ろし長編として朝日新聞社より刊行されたもので、魯迅の「藤野先生」の翻案として有名である。創作に際して、太宰治が複数の資料を参照した。

---

[5]「立正大学国語国文」第7号　1969年3月　43頁。

上記の四作と中国文学との関わりに関する先行研究は次の通りである。

①大塚繁樹「薛偉と太宰治」(『比較文学)』　第 6 巻　1963 年 11 月)

論点：太宰治の「魚服記」と「古今説海」の「魚服記」との比較

②大塚繁樹「太宰治の「竹青」と中国の文献との関連」(『愛媛大学紀要（人文科学)』　第 9 巻　1963 年 12 月)

論点：⑴太宰治の「竹青」と「聊斎志異」の「竹青」との比較

⑵太宰治の「竹青」と「論語」、「中庸」などとの関連

③大塚繁樹「太宰治作「惜別」と中国古典」(『愛媛大学紀要（人文科学)』　第 10 巻　1964 年 12 月)

論点：⑴「惜別」と『大魯迅全集』との関連

⑵「惜別」と「論語」、「中庸」、「墨子」などの中国古典との関連

④村松定孝「太宰治と中国文学―「清貧譚」と「竹青」について」(『比較文学年誌』　第 5 号　1969 年 3 月)

論点：⑴太宰治の「清貧譚」と「聊斎志異」の「黄英」との比較

⑵太宰治の「竹青」と「聊斎志異」の「竹青」との比較

⑤鈴木二三雄「太宰治と中国文学（一）―「魚服記」について―」(『フェリス女学院大学紀要』　第 4 巻　1969 年 3 月)

論点：太宰治の「魚服記」と「古今説海」の「魚服記」との比較

⑥鈴木二三雄「太宰治と中国文学(二)―「清貧譚」と「竹青」」(『立正大学国語国文』第 7 号　1969 年 3 月)

論点：⑴太宰治の「股をくぐる」と「十八史略」との比較

⑵太宰治の「清貧譚」と「聊斎志異」の「黄英」との比較

⑶太宰治の「竹青」と「聊斎志異」の「竹青」との比較

⑦大野正博「聊斎志異「黄英」の研究―太宰治「清貧譚」との比較による作意の考察」(『東洋学』　第 25 巻　1971 年 5 月)

論点：太宰治の「清貧譚」と「聊斎志異」の「黄英」との比較

⑧大野正博「聊斎志異「竹青」について―太宰治「竹青」との比較」(『東洋学』　第 29 巻　1973 年 6 月)

論点：太宰治の「竹青」と「聊斎志異」の「竹青」との比較

⑨松木道子「太宰治『惜別』における魯迅受容のあり方」(『国語国文研究と教育』　第9号　1981年1月)

論点：⑴太宰治の「惜別」と魯迅の「藤野先生」との比較

⑵「惜別」の出典

⑩千葉正昭「太宰治と魯迅―『惜別』を中心として」(『国文学解釈と鑑賞』　第48巻第9号　1983年6月)

論点：太宰治の「惜別」における魯迅像

⑪榎本重男「太宰治の『清貧譚』考―『聊斎志異』の『黄英』と比較して」(『人文社会科学研究』　第40号　2000年3月)

論点：太宰治の「清貧譚」と「聊斎志異」の「黄英」との比較

⑫藤原耕作「太宰治文学と中国―「清貧譚」と「黄英」」(『叙説Ⅱ』　第10号　2006年1月)

論点：太宰治の「清貧譚」と「聊斎志異」の「黄英」との比較

⑬王浄華「『清貧譚』と『竹青』について」(『国語の研究』　第32巻　2006年11月)

論点：⑴太宰治の「清貧譚」と「聊斎志異」の「黄英」との比較

⑵太宰治の「竹青」と「聊斎志異」の「竹青」との比較

上記の先行研究を参照して見るとわかるように、上記の論文の主旨は、ほとんど太宰治の翻案物とそれぞれの中国原典との比較に留まる。一方、「服装について」における寒山拾得や「惜別」における魯迅を取り巻く中国の歴史背景に関する描写などのような、中国的なモチーフも太宰治作品に散見するが、これらについては従来あまり論じられていない。

従って、本論文では、従来の先行研究において論じられていない太宰作品におけるこのような中国的なモチーフを対象として、論を展開し、中国の説話や歴史や人物などとの関わりを中心に考察していきたい。

太宰治と中国といえば、中国人に読んでもらうために書いた「竹青」と「惜別」[6]は注

[6] 「竹青」の本文末尾には、「自注。これは、創作である。支那のひとたちに読んでもらひたくて書いた。漢訳せられる筈である。」(『太宰治全集』第7巻　筑摩書房　1998年10月　401頁)とある。また、太宰治が内閣情報局と文学報国会に提出した執筆計画書であった「「惜別」の意図」に「中国の人をいやしめず、また、決して軽薄におだてる事もなく、所謂潔白の独立親和の態度で、若い周樹人を正しくいつ

意すべき作品であろう。第一章では、「竹青」と「惜別」における中国古典と中国地理についての叙述を確認した上で、太宰治がなぜ、この二作に中国古典や中国地理を多く取り入れたのか、という問題の解明を試みておく。第一節と第二節では、それぞれ二作における中国古典と中国地理についての叙述をまとめる。第三節では、二作の国策小説としての性格を手がかりとして、古典や地理などの中国的モチーフを取り入れた原因を究明する。

第二章では、「惜別」における日清戦争以降の列強の中国への進出や康有為・梁啓超などによる戊戌変法や義和団運動や孫文による民主革命など、魯迅の生きた時代の中国に関する描写の典拠について考察する。第一節では、中国革命同盟会の成立や戊戌変法や列強の中国への進出などに関する描写の典拠を究明する。第二節では、「惜別」に出てくる、孫文の三民主義や孫文と康有為との対立などに関する表現の典拠については、確実な証拠はないが、太宰が参照したと推測される資料を示す。

第三章では、太宰治の「思い出」における「赤い糸」と中国の赤縄説話との関わりを考察する。第一節では、中国と日本における赤縄説話を概説する。第二節では、太宰治がはじめて触れた、中学校の国語教師であった橋本誠一の生徒らに言い聞かせた「赤い糸」の話の典拠を解明する。第三節では、橋本誠一の話の次に「赤い糸」の話に太宰が再び接した可能性を考える。

第四章では、太宰治と寒山拾得との関わりを考察する。第一節では、太宰治の読んだ「寒山詩」の典拠本文を確認する。第二節では、中国と日本における寒山拾得を画題とする絵画（寒山拾得図）を概観する。第三節では、芥川龍之介や井伏鱒二などの作品における寒山拾得像を分析する。第四節では、太宰治の「服装について」に出てくる寒山拾得像は一体どのようなものだったのかを検討する。

第五章では、太宰が中国の竹林七賢に対して、どのような認識を持ったのか、及びその認識の由来について考察する。第一節では、随筆や書簡における太宰の言及を根拠として、彼の竹林七賢観をまとめる。第二節では、太宰の竹林七賢観が真実の竹林七賢像に符合するかどうかを確認する。第三節では、太宰の竹林七賢観がどのように形成したのかを考察する。

くしんで書くつもりであります。現代の中国の若い知識人に読ませて、日本にわれらの理解者ありの感懐を抱かしめ、百発の弾丸以上に日支全面平和に効力あらしめんとの意図を存してゐます。」（『太宰治全集』第 11 巻　筑摩書房　1999 年 3 月　288 頁）と書いている。

以上のように、第二章から第五章までは、中国の歴史、中国の説話、中国の人物を対象として考察する。

第六章では、視点を変えて、太宰治作品がいつ、誰によって中国に紹介され始めたのかということについて検討する。第一節では、中国語に翻訳される予定であったが、実際に翻訳されたかどうかが現在不明のままの、「竹青」と「惜別」が掲載される予定であった雑誌の『大東亜文学』を中心に、考察を展開する。第二節では、太宰治作品の漢訳の第一人者であると思われる章克標という人物を中心に、翻訳作品の選択などの面から「きりぎりす」の漢訳について検討する。第六章は、太宰作品における中国的なモチーフについて考察する第五章までとは考察対象が異なるが、太宰と中国の関係を考える上で是非とも検討しておきたい論点であるので、本論の末尾に章を割っておきたいと考える。

このような研究を通して、次のような学術成果が期待できると思われる。

◇太宰治と外国文学とのかかわりに関する従来の研究の不備を補う。

◇太宰治と中国との関連について、従来の研究は翻案物にのみ注目してきた。本論文では特に、太宰治作品に散見する中国的なモチーフに照明を当て、従来の研究で欠落した部分を補う。

◇今後の太宰治の創作方法や世界観に関する研究に論拠を提供する。

◇今後の太宰治研究に役立つと思われる中国の文献を資料として提供する。

第一章、太宰治と大東亜共同宣言

はじめに

前述したように、太宰治が中国の作品を下敷きに書いた翻案物には「清貧譚」、「竹青」、「惜別」が数えられる。「清貧譚」は昭和 16 年 1 月、「新潮」に発表された、「聊斎志異」中の「黄英」の翻案小説である。「竹青」は、昭和 20 年 4 月発行の「文藝」第 2 巻第 4 号に発表された。「清貧譚」と同じように「竹青」も「聊斎志異」中の「竹青」の翻案である。太宰治の参照した典拠本文は田中貢太郎訳・公田連太郎注「聊斎志異」である。「惜別」は、昭和 20 年 9 月 5 日、書き下ろし長編として朝日新聞社より刊行された。魯迅の「藤野先生」の内容を軸として書かれてある。三作とそれぞれの中国原典との比較が先行研究のほとんどを占めている。

三作を対照してみると、次のような顕著な相違点が見える。「竹青」においては、舞台が中国の湖南省に設定されているため、湖南省に関する地理知識が多く言及される一方、「論語」などの中国古典からの引用も見られる。それに対して、同じく「聊斎志異」を典拠本文として翻案した「清貧譚」においては、舞台は日本の江戸の向島に据えられている。中国古典からの引用は一例もない。また、「惜別」では、中国古典からの引用が多く、主人公の「周さん」（モデルは魯迅）の故郷である浙江省に関する地理知識が取り入れられている。つまり、「竹青」と「惜別」には中国古典と中国地理についての叙述が見えるのに対して、「清貧譚」にはまったくないということである。本論文では、なぜ三作において、このような違いが出てくるかについて、論じて見たい。

まず、「竹青」と「惜別」にどんな中国古典が見えるか、及び中国地理をどのように自作に取り入れたかについて、検討したい。

第一節、「竹青」と「惜別」における中国古典

まず、両作に出てくる中国古典（成語や詩句など）を出典とする表現を一覧表に示しておく。

一、「竹青」における中国古典[7]

「竹青」における表現	原典の中国古典
書を好むこと色を好むが如し	子曰、吾未見好德如好色者也。(「論語」子罕)
乃公もそろそろ三十、而立の秋 天命を知る	子曰、吾十有五而志于学、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十耳順、七十而従心所欲、不踰矩。(「論語」為政)
君子蕩々然	子曰、君子坦蕩蕩、小人長戚戚。(「論語」述而)
貧して怨無きは難し	子曰、貧而無怨難、富而無驕易。(「論語」憲問)
朝に竹青の声を聞かば夕に死するも可なり矣	子曰、朝聞道、夕死可矣。(「論語」里仁)
伯夷叔斉は旧悪を念わず、怨是を用いて希なり	子曰、伯夷叔齊、不念舊悪、怨是用希。(「論語」公冶長)
父母在せば遠く遊ばず、遊ぶに必ず方有り	子曰、父母在、不遠遊、遊必有方。(「論語」里仁)
郷原は徳の賊なり	郷原德之賊也。(「論語」陽貨)
逝者は斯の如き夫、昼夜を舎てず	子在川上曰、逝者如斯夫。不舎昼夜。(「論語」子罕)
大学の道は至善に止るに在り	大學之道、在明明德、在親民、在止於至善。(「大学」)
君子之道闇然たり	詩曰、衣錦尚絅。悪其文之著也、故君子之道、闇然而日章。小人之道、的然而日亡。(「中庸」)
隠に素ひて怪を行ふ	子曰、素隠行怪、後世有述焉、吾弗為之矣。(「中庸」)
其の独りを慎んで	故君子必慎其獨也。(「大学」)
学んで而して時に之を習っても、遠方から福音の訪れ来る	子曰、学而時習之、不亦説乎、有朋自遠方来、不亦楽乎。(「論語」学而)
馬嘶て白日暮れ、剣鳴て秋気来る 心は渺として空しく河上を徘徊	馬嘶白日暮、劍鳴秋氣来。我心渺無際、河上空徘徊。(呂温「鞏路感懐」)

[7] 中国古典を出典とする表現には日本においても熟語として使われているものがある(例えば「青雲の志」など)が、ここで、太宰治は出典が中国古典であることを知った上で、意識的に用いたと思われるため、表に入れることにする。

する	
人情は飜覆して洞庭湖の波瀾に似たり	酌酒與君君自寛、人情翻覆似波瀾。白首相知猶按劍、朱門先達笑弾冠。（王維「酌酒與裴迪」）
明眸皓歯	明眸皓歯今何在、血汚遊魂歸不得。（杜甫「哀江頭」）
晴川歴々たり漢陽の樹、芳草萋々たり鸚鵡の洲 わが郷関何れの処ぞ是なる、煙波江上、人をして愁えしむ	昔人已乗黄鶴去、此地空餘黄鶴楼。黄鶴一去不復返、白雲千里空悠悠。晴川歴歴漢陽樹、芳艸萋萋鸚鵡洲。日暮郷関何処是、煙波江上使人愁。（崔顥「黄鶴楼」）
憂えず惑わず懼れず	司馬牛問君子、子曰、君子不憂不懼、曰不憂不懼、斯謂之君子矣乎、子曰、内省不疚、夫何憂何懼。（「論語」顔淵）
衆人皆酔い、我独り醒めたり	屈原曰、挙世皆濁、我独清。衆人皆酔、我独醒。是以見放。（屈原「漁父」）
人間萬事塞翁の馬	人間萬事塞翁馬、推枕軒中聴雨眠。（熙晦機）
青雲の志	窮且益堅、不墜青雲之志。（王勃「騰王閣序」）
惻隠の心	無惻隠之心、非人也。（「孟子」公孫丑上）
影の形に添う如く	臣之事主也、如影之従形也。（「管子」任法）
秋風翻す黄金浪花千片	風翻白浪花千片、雁点青天字一行。（白居易「江楼晩眺」）

二、「惜別」における中国古典

「惜別」における表現	原典の中国古典
辞ハ達スル而已矣	子曰、辞達而已矣。（「論語」衛霊公）
爾ノ知ラザル所ハ、人ソレ諸ヲ舎テンヤ	子曰、挙爾所知、爾所不知、人其舎諸。（「論語」子路）
沐猴而冠	人言楚人沐猴而冠。果然。（「史記」項羽本紀）

支那の『墨子』という本にも、公輸という発明家が、竹で作った鵲を墨子に示して、この玩具は空へ放つと三日も飛びまわります、と自慢したところが、墨子は、にがい顔をして、でもやっぱり大工が車輪を作る事には及ばない、と言ってその危険な玩具を捨てさせたと書いてあります。	公輸子削竹木以為鵲。鵲成而飛之、三日不下。公輸子自以為至巧。子墨子謂公輸子曰、子之為鵲也、不如匠之為車轄。須臾劉三寸之木、而任五十石之重。故所為巧、利於人謂之巧、不利於人謂之拙。(「墨子」魯問)
彼の虎穴に敢然と飛び込んで	超曰、不入虎穴、不得虎子。(「後漢書」班超伝)
発して皆、節に中る、之を和と謂う	喜怒哀楽之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和。(「中庸」)
鬼神の徳たる其れ盛なり矣	子曰、鬼神之為徳、其盛矣乎。(「中庸」)

これらの中国古典からの引用は「気取り・洒落・詩趣・愚弄・茶化の面白さなどを出し、往々太宰一流の饒舌に堕している」と大塚繁樹が考えている[8]。

第二節、「竹青」と「惜別」における中国地理に関わる叙述

大野正博は「聊斎志異「竹青」について－太宰治「竹青」との比較－」において、菊田義孝の「「竹青」についての思い出」における「昭和十九年の秋ごろ……訪問すると、その机辺に、出版社の名を忘れたが、『世界地理大系』といったものの一冊で、『支那の部』にあたるものが開いたままで置いてあるのが目に付いた。そのページの中の、一つの写真をちょっと指さして、「これが洞庭湖だよ」と言ったのをかすかに記憶している。『竹青』の中で……あの描写をするために、あの人はそんな印刷不鮮明の、見ばえもしない写真をながめながら、イメージをつくりつつあったのかもしれない」[9]という一節を引用して、この書物は『世界地理風俗大系』の第3巻『支那篇下』[10]（新光社刊、昭和5年7月）で

[8] 「太宰治の「竹青」と中国の文献との関連」　『愛媛大学紀要（人文科学)』第9巻　1963年12月　55頁。

[9] 『太宰治研究』第1巻　審美社　1962年10月　64頁。

[10] 全書が25巻からなる。第2巻『支那篇上』においては、主に中国の北部地方が述べられている。そ

ある[11]と考えている。また、山内祥史は「「竹青」解題」において、大野正博の説に賛成する[12]一方、「「惜別」解題」において、「「西湖」および「銭塘の大潮」に関する記述は、『世界地理風俗大系第三巻』（新光社、昭和五年七月十七日発行）の「西湖と呉山」「銭塘の大潮」などの項を参考にしているようだ」[13]と述べている。

つまり、「竹青」と「惜別」における中国地理についての叙述は何れも『世界地理風俗大系』の第 3 巻『支那篇下』に基づいているようである。しかし先行研究では、『世界地理風俗大系』を参照したという指摘に留まり、太宰治がこの『世界地理風俗大系』の第 3 巻『支那篇下』から、どのように中国地理の知識を自作に取り入れたかということについては、述べられていないため、ここで考察して見たい。

一、「竹青」における中国地理についての叙述

「竹青」において「さらに眼を転ずれば、君山、玉鏡に可憐一点の翠黛を描いて湘君の俤をしのばしめ」（389 頁）[14]という表現が見える。それに対して『世界地理風俗大系』第 28 章「湖南地方」の「大湖洞庭」の項では、君山の写真の下に「洞庭の口明湖玉鏡を開くところ可憐一点の緑黛を描く。昔舜南巡して還らず娥皇女英追ふて尽きぬ恨みを嘆き湘江に沈んだ。君山の下祠を建てて祭る。李白の詩「洞庭西に望めば楚江分る水尽きて南天雲を見ず日落て長沙秋色深し知らず何れの時にか湘君を弔はん」」（224 頁）という説明がある。大野正博の指摘したように、「君山、玉鏡に可憐一点の翠黛を描いて」という表現は『世界地理風俗大系』における「玉鏡を開くところ可憐一点の緑黛を描く」という部分に、直後の「湘君の俤をしのばしめ」という表現は『世界地理風俗大系』における、「昔

れに対して、第 3 巻『支那篇下』は、その続きとして、南部地方がメインで、第 18 章から第 37 章まで、20 章からなる。第 18 章は、中国南部地方の地勢、地質、交通、古代民族などの概説である。第 19 章から第 33 章までは、浙江、湖南をはじめとする十四ヶ省の産業、交通、市街、歴史、名所旧跡などが紹介されている。第 34 章から第 37 章までは、それぞれ中国の文芸、家族制度、貨幣制度、日本との関係の概説である。

[11] 『東洋学』第 29 巻　1973 年 6 月　173 頁。

[12] 『太宰治全集』第 7 巻　筑摩書房　1990 年 6 月　451 頁。

[13] 『太宰治全集』第 7 巻　筑摩書房　1990 年 6 月　445 頁。

[14] 本論文では、「竹青」に関する引用は『太宰治全集』（第 7 巻　筑摩書房　1998 年 10 月）により、頁数だけ示す。

舜南巡して還らず娥皇女英追ふて尽きぬ恨みを嘆き湘江に沈んだ。君山の下祠を建てて祭る」という昔話と「知らず何れの時にか湘君を弔はん」という李白の詩に基づいたのであろう。

「竹青」に「やがて日が暮れると洞庭秋月皎々たるを賞しながら飄然と塒に帰り、互に羽をすり寄せて眠り」（390 頁）という表現がある。それに対して、『世界地理風俗大系』第 28 章「湖南地方」の「省城岳陽」の項目において、「岳陽はまた洞庭の秋月をもつて聞こえ岳陽楼は白楽天、杜甫の巨筆によつて世に知られる」（223 頁）という記述が見える一方、「瀟湘八景」の項目で、「総じて洞庭を中心とした瀟湘八景の景趣は、大体この大自然の間に掴み得た平遠の山水から選んだもので、一、平沙落雁、二、遠浦帰帆、三、山市晴嵐、四、江天暮雪、五、洞庭秋月、六、瀟湘夜雨、七、煙寺晩鐘、八、漁村夕照となされる。」（224 頁）と述べている。「洞庭秋月」が二回も出てくる。「竹青」における「洞庭秋月」はこれらの記述に拠ったのであろう。

また、「疲れると帰帆の檣上にならんで止って翼を休め」（390 頁）における「帰帆」、および「岸の平沙は昼のやうに明るく柳の枝は湖水の靄を含んで重く垂れ」（393 頁）と「すでに二人は雌雄の烏、月光を受けて漆黒の翼は美しく輝き、ちよんちよん平沙を歩いて、唖々と二羽、声をそろへて叫んで、ぱつと飛び立つ」（396 頁）における「平沙」はそれぞれ瀟湘八景の「遠浦帰帆」と「平沙落雁」にヒントを得た可能性が高いであろう。

「竹青」には「むかし春秋戦国の世にかの屈原も衆人皆酔ひ、我独り醒めたり、と叫んでこの湖に身を投げて死んだとかいふ話を聞いてゐる」（393 頁）という表現がある。「衆人皆酔い、我独り醒めたり」という文句は屈原の「漁父」から引用したのはほぼ間違いないが、「この湖に身を投げて死んだ」という話は、『世界地理風俗大系』の「瀟湘八景」の項における「岳陽より、湖の東岸に近く南に向へば、石城山の孤島、柴蜂湖の沙嘴を過ぎて湘江の口に入り、暫くにして名邑湘陰につく。湖の右岸に位し、人口二萬、米その他農産物の集散地である。その江の入口には、厭世家屈原が投死した汨羅があるといふ。」（226 頁）という記述に拠って知ったのではないか。一方、屈原は洞庭湖ではなく汨羅江に身を投じたのが事実であるのに対して、太宰治は洞庭湖に身を投げたというように書いている。おそらく、太宰治は『世界地理風俗大系』における「湘江の口に入り、（中略）その江の入口には、厭世家屈原が投死した」という記述に基づいて、屈原が湘江の洞庭湖へ流れ込む入口に投身したから、それを洞庭湖と書いても大差がないと早合点したのであろう。ここから、太宰の中国的モチーフを自由に使うという態度が読めるのであろう。

「竹青」に「月下白光三千里の長江、洋々と東北方に流れて、魚容は酔へるが如く、流れにしたがつておよそ二ときばかり飛翔して、やうやう夜も明けはなれて遥か前方に水の都、漢陽の家々の甍が朝靄の底に静かに沈んで眠つてゐるのが見えて来た。近づくにつれて、晴川歴々たり漢陽の樹、芳草萋々たり鸚鵡の洲、対岸には黄鶴楼の聳えるあり、長江をへだてて晴川閣と何事か昔を語り合ひ、帆影点々といそがしげに江上を往来し、更にすすめば大別山の高峰眼下にあり、麓には水漫々の月湖ひろがり、更に北方には漢水蜿蜒と天際に流れ、東洋のヴエニス一眸の中に収り、「わが郷関何れの処ぞ是なる、煙波江上、人をして愁へしむ」と魚容は、うつとり呟いた時、竹青は振りかへつて」（396 頁）という描写が見られる。魚容と竹青が烏に変身して、洞庭湖から竹青の家のある漢水へ飛んでいく場面である。

一方、『世界地理風俗大系』第 27 章「湖北地方」の「黄鶴楼」の項目で「かかる古都であるから、名所、旧跡に見るべきものが少なくない。殊に黄鶴楼はまづ訪れるべきである。蛇山が蜿蜒として東より西に向ひ、武昌の中心を横ぎり大江にのぞむところ、その江頭に今も昔の俤をのこす。「昔人已に白雲に乗つて去る。この地空しく余す黄鶴楼。黄鶴一たび去つて復た還らず、白雲千載空しく悠々たり。晴川歴々、漢陽の樹。芳草萋々、鸚鵡の洲。日暮れて郷関何の処ぞ是れなる。煙波江上、人を使て愁へしむ」とは、伝説とこの地の景観とを、二つながらあらはし得て充分である。」（207 頁）と述べている。

「竹青」における「晴川歴々たり漢陽の樹、芳草萋々たり鸚鵡の洲」と「わが郷関何れの処ぞ是なる、煙波江上、人をして愁へしむ」という詩句は『世界地理風俗大系』における崔顥の「昔人已に白雲に乗つて去る。この地空しく余す黄鶴楼。黄鶴一たび去つて復た還らず、白雲千載空しく悠々たり。晴川歴々、漢陽の樹。芳草萋々、鸚鵡の洲。日暮れて郷関何の処ぞ是れなる。煙波江上、人を使て愁へしむ」という詩の後半から引用したという大野正博の指摘は間違いないと思われる。

また、先に述べたように、この場面は魚容と竹青は烏になって漢水へ飛んでいく途中で俯瞰した景物を述べている所である。景物の所在位置から、太宰治は関連項目を参照すると同時に、『世界地理風俗大系』第 27 章「湖北地方」に載っている「漢口・武昌・漢陽附近」（206 頁）という地図を重要な資料として参考にしたと思われる。その根拠を、「竹青」における表現と同地図（附図、本論文 25 頁）を対照しながら、説明したい。

「竹青」に「月下白光三千里の長江、洋々と東北方に流れて」という描写があり、長江（揚子江または大江）の流れる方向を「東北方」と書いている。この地図で、長江は両端

がそれぞれ左下（南西）と右上（東北）に向いて、斜めに横たわっている。東北または南西へ流れているように見える。中国の地勢が西は高く、東は低いので、黄河、長江などの主要河流は西から東へ流れ、海に注ぎ込むのは常識であるから、太宰治はこの常識と地図を考え合わせて、東北へ流れていると判断したのであろう。

次に「遥か前方に水の都、漢陽の家々の甍が朝靄の底に静かに沈んで眠っているのが見えて来た」という漢陽の市街地を見下ろす場面がある。地図を参照して見ると、漢陽の中心である A 地区に家屋の印が多く描かれている。また、「芳草萋々たり鸚鵡の洲」という表現と対応して、地図の B 地区に草の印が広範囲に書かれている。

次の「対岸には黄鶴楼の聳えるあり、長江をへだてて晴川閣と何事か昔を語り合ひ」という描写における「黄鶴楼」と「晴川閣」は地図に載っていない。しかし『世界地理風俗大系』第 27 章「湖北地方」で、黄鶴楼の写真の下に「黄鶴楼は武昌城漢陽門内に屹立する駝山一名黄頡山脈の端が江岸に尽きるところの山頂にある。」（204 頁）という説明文があるので、黄鶴楼は地図に載っている「漢陽門」と「黄頡磯」の附近にあることが推知しやすいであろう。黄鶴楼は漢陽上空を飛んでいる二人と、長江を隔てて相対している。また「漢口市街」の項で大別山について述べるところに「山の東腹に晴川閣がある。黄鶴楼と相対峙し」という記述がある。晴川閣は黄鶴楼と相対峙しているので、逆に黄鶴楼は「長江をへだてて晴川閣と何事か昔を語り合ひ」と書いても矛盾は無いであろう。

次の「更にすすめば大別山の高峰眼下にあり、麓には水漫々の月湖ひろがり、更に北方には漢水蜿蜒と天際に流れ、東洋のヴエニス一眸の中に収り」というのは二人が漢陽の市街地を過ぎてから俯瞰した景物である。地図に戻って見ると、市街地（A 地区）の北に大別山が横たわっている。大別山の西に東月湖と西月湖がある。東月湖は狭いのに対して、西月湖は広く延びている。更に北へ進めば漢水が流れている。また、太宰のそうした表現は、『世界地理風俗大系』第 27 章「湖北地方」の「漢口市街」の項における、大別山を述べる「山上に禹王廟があり、また呉の魯粛の廟があつたので魯山とも称する。武漢附近第一の高峰で、漢水の咽喉を扼し、漢陽をして重きをなさしめる。今、要塞地帯である。山の東腹に晴川閣がある。黄鶴楼と相対峙し、有名な鸚鵡洲はその脚下にあつて、長江の大観を一眸の中に収める。」（212 頁）という部分を参照したのであろう。「竹青」における「大別山の高峰」という表現は『世界地理風俗大系』における、大別山が武漢附近第一の高峰であるという記述に拠ったであろう。一方、「東洋のヴエニス一眸の中に収り」という表現は『世界地理風俗大系』における「長江の大観を一眸の中に収める」という所に基

づいたと思われる。ただし、「長江の大観」は「東洋のヴエニス」に変えられている。

太宰治は地図を参照しなければ、これらの景物の所在位置はこれほど正確に把握できなかったであろう。洞庭湖と漢水との間にある一連の景物描写は「漢口・武昌・漢陽附近」という地図と関連項目を、両方とも参照したと思われる。

つまり、「竹青」における上記の中国地理についての叙述は『世界地理風俗大系』第 3 巻『支那篇下』の第 27 章「湖北地方」と第 28 章「湖南地方」に拠ったと思われる。

二、「惜別」における中国地理についての叙述

「惜別」に「僕は浙江省の紹興に生れ、あの辺は東洋のヴェニスと呼ばれて、近くには有名な西湖もあり、外国の人がたいへん多くやつて来て、口々に絶讃するのですが、僕たちから見ると、あの風景には、生活の粉飾が多すぎて感心しません。人間の歴史の粉飾、と言つたらいいでせうか。西湖などは、清国政府の庭園です。西湖十景だの三十六名蹟だの、七十二勝だのと、人間の手垢をベタベタ附けて得意がつてゐます。松島には、それがありません。人間の歴史と隔絶されてゐます。文人、墨客も之を犯す事が出来ません。」（190 頁）[15]という描写が見える。

「あの辺は東洋のヴェニスと呼ばれて」という表現は『世界地理風俗大系』第 21 章「浙江地方」における「紹興の朝」という写真の下の「紹興は越の国の古い都である。その昔はここを會稽とよんだ。現存する府城は勾践を助けて覇業を完成した范蠡の築いたものであるといふ。現在の人口は約二十萬。富裕な都会である。町を貫いて水路が蜘蛛の巣のやうに堀りめぐらされてゐる。どこに行くにも運河によらなければならぬ水の都である。人よんでここを江南のヴェニスといふ。」（81 頁）という説明に拠ったであろう。

また、『世界地理風俗大系』第 21 章「浙江地方」における「前清の行宮」という写真の下に「支那人は西湖を世界最勝の地であると自負してゐる。その景は繊細精緻に過ぎ壮大豪宕の風こそないが水清く樹木美しい水境である。前清はこの景勝の地をえらんで一大行宮を築造した。」（84 頁）という記述がある。行宮は皇帝の行楽地に過ぎないので、景勝の地の西湖が行宮に選ばれたら皇帝の庭園になるであろう。「惜別」における「西湖などは、清国政府の庭園です」という所は『世界地理風俗大系』における上記の記述に拠った

---

[15] 「惜別」は、初版（朝日新聞社　1945 年 9 月）と改版（講談社　1947 年 4 月）では、大幅な内容の変更があるが、本論文では、初版を底本とした『太宰治全集』第 8 巻（筑摩書房　1998 年 11 月）に拠った。引用は頁数だけ示す。

であろう。

一方、「西湖十景だの三十六名蹟だの、七十二勝だの」という部分は山内祥史[16]の指摘したように、『世界地理風俗大系』の「西湖と呉山」の項における「文人、墨客は古来、或は十景を賦し、三十六名跡を挙げ、或は七十二勝を数へて、その勝景を賞した。十景は即ち蘇堤春暁、双峰挿雲、柳浪聞鶯、花港観魚、曲院荷風、平湖秋月、南屏晩鐘、三潭印月、雷峯夕照、断橋残雪である。」（86 頁）という記述を参照したのであろう。「文人、墨客も之を犯す事が出来ません」における「文人、墨客」という言葉もこういう記述に拠った可能性が高い。

「惜別」に「僕は所謂西湖十景よりは、浙江の田舎の平凡な運河の風景を、ずつと愛してゐます。僕には、わが国の文人墨客たちの騒ぐ名所が、一つとしていいと思はれないのです。銭塘の大潮は、さすがに少し興奮しますが、あとは、だめです。」（191 頁）という表現が現れる。浙江周辺の名勝としての「運河の風景」と「銭塘の大潮」が出てくる。

それに対して、『世界地理風俗大系』第 21 章「浙江地方」における「運河風俗」の項目で、「浙江の運河で、風俗上面白く眺められるものに二つある。その一つは、低い運河の水とか、或はそのわきに導かれた小水路の水とかを、高い田畑の方へ引くとき、龍骨車なるものを用ゐること、今一つは、低い方の水郷から高い方の水路へ、民船を引つぱり上げようとする場合には、址壩なるものを作つて、轆轤仕掛けでこれを助けてゐることである。（中略）運河風俗としては、そこに小舟を曳く曳子の情趣も見逃せぬものの一つである。運河をゆく蓬船は、順風に帆をあげるほかに、帆柱に長い綱をつけ、それによつて江岸の曳子に引かれながら進む。…」（90～92 頁）というように、運河の景色を詳しく述べている一方、龍骨車や曳子などの写真が載っている。

また、山内祥史の指摘した「銭塘の大潮」（「浙江地方」）の項目で、「浙江の名勝としては以上のほかに、銭塘の呼び物になつてゐる旧暦八月十六日の大潮がある。これは極めて顕著な現象であるが、海寧まで出て行かなければ、その壮絶な大景は目撃できない。当日になると上海、杭州あたりから、内外の紳士淑女が、雲のごとくに蝟集する。舟山列島方面の水平線上から押寄せきたる大潮の波浪は萬馬奔騰、百雷のとどろき一時に到るかの大音響とともに、真に人心を動乱させる。その壮観はいふばかりでないが、波の高さは年によつて一様でない。しかしかなりに高く、津波のやうに押寄せ、上流は巌州あたりまでも

[16] 『太宰治全集』第 7 巻　筑摩書房　1990 年 6 月　445 頁。

遡るらしい。」（87 頁）と書いてある一方、「銭塘の大潮」の写真の下に「浙江名物に銭塘の大潮がある。旧暦八月十六日の夜の大潮には舟山列島方面から寄せて来る大潮の波浪は百雷が一時にとどろき亘るやうな大音響を発する。」（87 頁）という説明が見える。

「惜別」における「運河の風景」と「銭塘の大潮」は何れも『世界地理風俗大系』における上記の詳しい記述に基づいたであろう。

つまり、「惜別」における中国地理の知識は『世界地理風俗大系』の第 3 巻『支那篇下』の第 21 章「浙江地方」に拠ったと考えられる。

これらの地理知識について、大野正博は「地理概念を把握すると同時に描写の重要資料として『世界地理風俗大系』を使用した」[17]と指摘している。

一方、同じく中国作品からの翻案物である「清貧譚」には中国古典からの引用や中国地理についての叙述はまったくない。なぜ三作において、このような違いが出てくるかという命題に戻って、「惜別」と「竹青」の性格から論じて見たい。

第三節、太宰治における時局性

一、大東亜五大宣言の理念

「惜別」が大東亜五大宣言の作品化の要請に応じて書かれたのは周知のことである。山内祥史の「「惜別」解題」[18]に基づくと、「惜別」の執筆までの経緯を次のように纏められる。

①昭和 18 年 11 月 5、6 日、大東亜会議が開催された。日本、中華民国、タイ、満州国、フィリピン、ミャンマの六カ国代表が出席し、次のような「大東亜共同宣言」を採択した。

抑〻世界各国が各其の所を得相倚り相扶けて万邦共栄の楽を偕にする世界平和確立の根本要義なり

然るに米英は自国の繁栄の為には他国他民族を抑圧し特に大東亜に対しては飽くなき侵略搾取を行ひ大東亜隷属化の野望を逞うし遂には大東亜の安定を根底より覆さんとせり大東亜戦争の原因茲に存す

---

[17] 「聊斎志異「竹青」について－太宰治「竹青」との比較－」　『東洋学』第 29 巻　1973 年 6 月　173 頁。

[18] 『太宰治全集』第 7 巻　筑摩書房　1990 年 6 月　419 頁～446 頁。

大東亜各国は相提携して大東亜戦争を完遂し大東亜を米英の桎梏より解放して其の自存自衛を全うし左の綱領に基づき大東亜を建設し以て世界平和の確立に寄与せんことを期す

大東亜各国は協同して大東亜の安定を確保し、道義に基づく共存共栄の秩序を建設す

大東亜各国は相互に自主独立を尊重し互助敦睦の実を挙げ大東亜の親和を確立す

大東亜各国は相互に其の伝統を尊重し各民族の創造性を伸暢し大東亜の文化を昂揚す

大東亜各国は互恵の下緊密に提携しその経済発展を図り大東亜の繁栄を増進す

大東亜各国は万邦との交誼を篤うし人種的差別を撤廃し普く文化を交流し進んで資源を開発し以て世界の進運に貢献す

②日本文学報国会は大東亜共同宣言への協力案として、各部会実施要項を内定した。小部部会の実施要項は次のようである。

大東亜建設要綱の五項目を主題とせる規模雄大なる構想の小説を創作刊行し、大東亜各国民に皇国の伝統と理想とを宣布し共同宣言の大精神を滲透せしむる。

③昭和 18 年 11 月 15 日、日本文学報国会小説部会常例幹事会が開かれ、大東亜五大宣言に対する小説部会の対策として、五大宣言をテーマとする小説（1 宣言 1 冊、計 5 冊）を、作家を使命し、執筆させると決定した。

④昭和 19 年 2 月 3 日、日本文学報国会小説部会の大東亜五大宣言小説執筆希望者による協議会が開催され、太宰をはじめ、26 名の作家が出席した。執筆希望者多数のため、全執筆希望者に小説の梗概並に意図を執筆提出させ、審査の上で、最大限十名に委嘱すると決定した。同月、太宰は「「惜別」の意図」を内閣情報局第五部第三課と日本文学報国会小説部会幹事会に提出した。原稿の欄外に「（第二項、独立親和）（付、三項、文化昂揚）」と記入している。

⑤昭和 19 年 7 月 18 日、日本文学報国会小説部会幹事会が開催され、「大東亜五大宣言小説家に関する件」について討議したが、その時の内容は不明である。

⑥昭和 19 年 12 月上旬から中旬まで、大東亜五大宣言作品化の依嘱作家が決定され、太宰は「独立親和」の原則を割り当てられている。

⑦昭和 19 年 12 月 19 日、日本文学報国会が言論報国会側の小野清一郎、大串兎代夫の二人に出席を求めて、「大東亜共同宣言五原則の理念について講話を聴く会」を開催した。太宰がこの会に出席した。

⑧昭和 19 年 12 月 20 日－25 日、魯迅が留学した時の仙台の世相、風俗、市井雑事、新聞記事などを調べるため、仙台へ旅した。
⑨昭和 20 年 1 月初め、「惜別」を起稿し、2 月 20 日頃脱稿した。

昭和 20 年 1 月 10 日発行の『文学報国』第 44 号に、「大東亜共同宣言五原則の理念について講話を聴く会」の見出しで、太宰治の「東亜諸国がどんな政体で独立してもこれに何も言はないのだらうか。」という発言が掲載されている一方、小野清一郎の五大宣言の理念に関する次のような講話要旨が載っている。

共存共栄と自主独立といふ言葉などは英訳すれば向ふのものと同じで表面的には似てる点がないでもないが、起草者が意識しなかつたところにもちやんと日本的、東洋的原理が存してゐる連盟思想のやうな個々のものが出来合つた組合、加入、脱退の自由なさういふ組合的なものではない。債権債務の観念による財産法的なそんな水臭いものではない。従つて自ら秩序あり、加入、不加入の問題はない。運命的であるため（家的）脱退出来ない。大東亜は人種的に一つとは言へぬが血が近い。東洋の文化は我々を結びつけてゐる。文化的、歴史的連関があるのだ。

岡倉天心の『亜細亜は一つ』といふ言葉も文化的なものを見てゐる。五原則は文化を重視してゐる。東洋の古い伝統、東洋精神を生かし、夫々の民族を生かし、素材として西欧的なものを取り入れてもいゝ。排他的であつてはならぬ。法的秩序としては、家的、親族的な従つて因縁のつながりに結ばれた秩序である。国際法的な契約関係に存する彼等の原理は野望を包んだ平和主義である。奴隷的平和に満足出来ぬが故に日本は現に在在るのだ。比島、支那などは大きなお世話といふかもしれぬが、兄弟の一人が奴隷となつてゐるのは見済まし得ない。[19]

ここで、大東亜共栄圏内の諸国の関係について、各国が共同文化によって結ばれた、血の近い親族または兄弟であると解釈されている。太宰がこういう解釈を聞いたのは事実である。一方、「惜別」に次のような表現が見える。

[19] 復刻版『文学報国』不二出版　1990 年 12 月　109 頁。

先生は、ひとりごとのように低く言って、しばらく黙って居られた。やがて窓の方を見ながら、「私の知っている家で、兄は百姓、次男は司法官、末弟は、これは変り者で、役者をしている、そんな家があるのです。はじめは、どうも、やはり兄弟喧嘩なんかしていたようですが、しかし、いまでは、お互い非常に尊敬し合っているようです。理窟でないんです。何と言ったらいいのかなあ、各人各様にぱっとひらいたつもりでも、それが一つの大きい花なんですね。家、というものは不思議なものです。その家は、地方の名門、と言えば大袈裟だが、まあ、その地方で古くから続いている家です。そうして、いまでも、やっぱりその地方の人たちから、相変らず信頼されているようです。私は東洋全部が一つの家だと思っている。各人各様にひらいてよい。（229～230 頁）

日本人として中国の革命をどう対処すべきのか、という学生の質問に対する藤野先生の答えである。ここにおいても、日中関係または東亜各国の関係を「一つの家」や「兄弟」と表現されている。太宰は小野清一郎の上記の講話から影響を受けたのは明らかであろう。太宰はなぜ「惜別」に中国の古典や地理知識を取り入れたのか、という命題に戻ってみると、太宰の本意であるかどうかはともかく、大東亜五大宣言の理念に従って日本人が確かに親族のように、中国文化（古典や地理など）をよく知っている兄弟であることを根拠付けるためであろう。逆に言えば、日本が中国文化をよく知っている兄弟であるという共同宣言の理念を立証するため、太宰は中国の地理知識や歴史などを出来るだけ正確に詳しく書かなければならなかったであろう。

一方、昭和 19 年 8 月 29 日付堤重久宛書簡に「二、三ケ月中に、「津軽」と「雲雀の声」が小山書店から、「新釈諸国噺」が生活社から出る。そろそろ魯迅に取りかかる。いまは小手調べに支那の怪談など試作している。」[20]とある。「魯迅」と「支那の怪談」はそれぞれ「惜別」と「竹青」を指しているのはいうまでもない。「竹青」は「惜別」に先行する試作であることがわかる。また、太宰治自筆の「創作年表」の昭和 20 年の正月の項に「小説（漢文／竹青）大東亜文学　30」、4 月の項に「小説（和文／竹青）文芸　30」[21]とある。中国語訳「竹青」の発表（予定）雑誌は日本文学報国会発行の中国向華文文芸雑誌『大東亜文学』（後述、第六章）である。つまり、「竹青」も時局の要請に応じて書いた

[20] 『太宰治全集』第 12 巻　筑摩書房　1999 年 4 月　303 頁～304 頁。

[21] 『太宰治全集』別巻　筑摩書房　1992 年 4 月　169 頁。

ものであろう。「竹青」に中国の古典や地理を取り入れた原因も「惜別」の場合と同じく、時局に応じて、日本が中国文化を詳しく知っている中国の兄弟であることを根拠付けるためであろう。

二、戦時下の太宰治

時局に応えて、中国人に読んでもらうために書いた「竹青」と「惜別」に中国の古典や地理知識を取り入れたのは太宰の本意であるかどうかについて、先行研究を踏まえて述べてみたい。

先に述べたように、太宰文学は前期、中期、後期の三つの時期に分けられるのは通例で、中期は昭和 13 年から昭和 20 年までである。「竹青」と「惜別」は何れも中期作品に属する。一方、この時期は日中戦争と太平洋戦争と重なっているので、中期または戦時下、太宰はどのような姿勢を示したのかについては、金京淑が「太宰治における時代と文学―中期を中心に」（博士論文　東京外国語大学　2010 年）で、一連の中期の小説と随筆を取り上げつつ、執筆時の時代背景を調査した上で、戦時下の太宰治は藝術の純粋さ（時局または政治への拒否）または自分の表現の自由を守るため、ずっと反時局的な立場に立ったというように指摘している。例えば、昭和 14 年 11 月『文学界』に発表された「皮膚と心」の場合、当時人口増加を図るため、早婚（19 歳）が当局から呼びかけられているのに対して、主人公の「私」は二十八歳で結婚したと設定している。また、当時、国家の富強は家庭の円満に基づくので、円満な家庭を守ることが女性の使命として当局から求められているのに対して、「私」が結婚してもなお青春の美しさに憧れ、結婚を後悔する。一方、国民共同体意識の強化のために、時局に唱えられているラジオ体操は「私」が元気を装ってみたが、ふっとたまらなくいじらしくなってきて、続けられず、泣きそうになる。このほかにも、主人公には時局に排除されるべきな言動が多く見られる。

この時期は当局による言論思想統制が厳しくなりつつある時期でもある。このような反時局的な言動がどのように検閲を潜り抜けたのかについては、金京淑は次のように述べている。

> 実際に戦時下の作品には、戦時体制への批判を表出する際、「道化」や「嘘」あるいは「嘘」の告白や懺悔、反省を巧みに組み込み、表現することによって検閲の眼を逸らしている。[22]

---

[22]「太宰治における時代と文学―中期を中心に」　博士論文　東京外国語大学　2010 年　60 頁。

太宰は当局やメディアによる二重の検閲を意識し、道化や嘘の反省などを作品に組み込んで創作を続けていたことがわかる。例えば、「皮膚と心」の最後の場面で「私は間違つてゐたのでございます。（中略）私は、結局はおろかな、頭もわるい女ですのね」[23]という反省と懺悔の言葉を主人公の「私」に語らせている。この懺悔によってそれまでの反時局的な言動が許されることになる。しかし、このような反省や懺悔は作品に繰り返されているのはそれがただ嘘の懺悔であることがわかる。

一方、「惜別」には「国体の盛徳、とでも申したらよいか、私は戦争の時にひとしお深くそれを感じます」とか「日本には国体の実力というものがある」とか「周さんの発見した神の国の清潔直截の一元哲学を教えて啓発してやるのだと意気込んでいた」とか「日本の忠義の一元論のような、明確直截の哲学が体得できたら、それでもう救われるのですからね」とか言う時局的な表現があるため、国策小説と見られている。しかし、「惜別」の冒頭で「日支親善の美談」という記事を書くために、魯迅のことを取材に来た新聞社の記者に対して「私」が「不安を感じ」たり、談話が「終始あまり愉快でなかった」りする一方、その直後に「ことしの正月にはその地方の新聞に、「日支親和の先駆」という題で私の懐古談の形式になっている読物が五、六日間連載された。さすがに商売柄、私のあんな不得要領の答弁をたくみに取捨して、かなり面白い読物にまとめている手腕には感心した」[24]とある。不得要領の答弁を面白い読物に纏めるという記者の捏造への嘲笑が読めるのではないか。つまり、「日支親和の先駆」という時局的な読物は捏造されたものに過ぎない。そのために、冒頭で「私」が違和感を抱いたのは記者ではなく、日支親善の美談という時局的な題材であろう。

また、「あとがき」の最後に「なお、最後に、どうしても附け加えさせていただきたいのは、この仕事はあくまでも太宰という日本の一作家の責任に於いて、自由に書きしたためられたもので、情報局も報国会も、私の執筆を拘束するようなややこしい注意など一言もおっしゃらなかったという一事である。しかも、私がこれを書き上げて、お役所に提出して、それがそのまま、一字半句の訂正も無く通過した。朝野一心、とでも言うべきであろうか、これは、私だけの幸福ではあるまい。」[25]と書いてある。本当に何の拘束も受け

---

[23]『太宰治全集』第 3 巻　筑摩書房　1988 年 10 月　104 頁。

[24] 『太宰治全集』第 8 巻　筑摩書房　1998 年 11 月　172 頁。

[25] 『太宰治全集』第 8 巻　筑摩書房　1998 年 11 月　294 頁。

なかったら、わざわざ断わるこの一文の意味はないであろう。内閣情報局と文学報国会との依嘱に応じて、書いたのは周知のことなので、「情報局も報国会も、私の執筆を拘束するようなややこしい注意など一言もおっしゃらなかった」と断わったのは、反語として、作品における時局的な要素が作家の本意でなく、情報局と文学報国会の拘束や注意があるので、こう書かざるを得ないと暗示しているのであろう。

敗戦の直前に際して、当局による検閲がさらに厳しくなりつつあると同時に、戦争文学の隆盛による純文学（私小説）の低迷、紙不足による発表の場の雑誌の廃刊や、物資不足による生活の困難などに臨んで、原稿生活者としての作家の生活の苦難が想像に難くないであろう。藝術の純粋や表現の自由より、生存のほうを優先したのは人情であろう。津島美知子の『回想の太宰治』における「執筆希望者が多数あったのは、資料蒐めや調査について、紹介状、切符の入手等で便宜が与えられる上に、印税支払、要紙割当等でも、当時としては大変好条件を約束されたからであろう。」[26]という記述は当時の状況を物語っているのではないか。執筆希望者が多数あったことから、あのような特殊な時期にあたって、生存のため、それまで堅持してきた藝術や自由を棚上げにし、一時に時局に協力しようとする作家が太宰だけではなかったと覗えるであろう。執筆希望者同士の競争に勝つためにも、その後の執筆を続けるためにも、時局に協力する姿勢を示す必要があったので、太宰は国体賛美など時局的な要素を「惜別」に取り入れたのであろう。

まとめ

太宰治が「「惜別」の意図」において述べたように、「惜別」は明治 35 年から 39 年にかけて日本に留学していた魯迅を取り上げた作品である。舞台が日本に設定されているので、「銭塘の大潮」や「西湖」など魯迅の故郷である浙江周辺の景物の描写の必要性が疑われるであろう。一方、物語の時間が魯迅の日本に留学していた期間（明治 35 年から 39 年まで）に設定されているのに、日清戦争以降の列強の中国への進出や康有為・梁啓超などによる戊戌変法など、留学以前の魯迅を取り巻く歴史環境が詳しく述べられている。このような書く必要の無い地理や歴史などを意識的に取り入れたのは東亜各国が親族または兄弟であるという大東亜五大宣言の理念に従って、日本人が確かに親族のように、中国文化

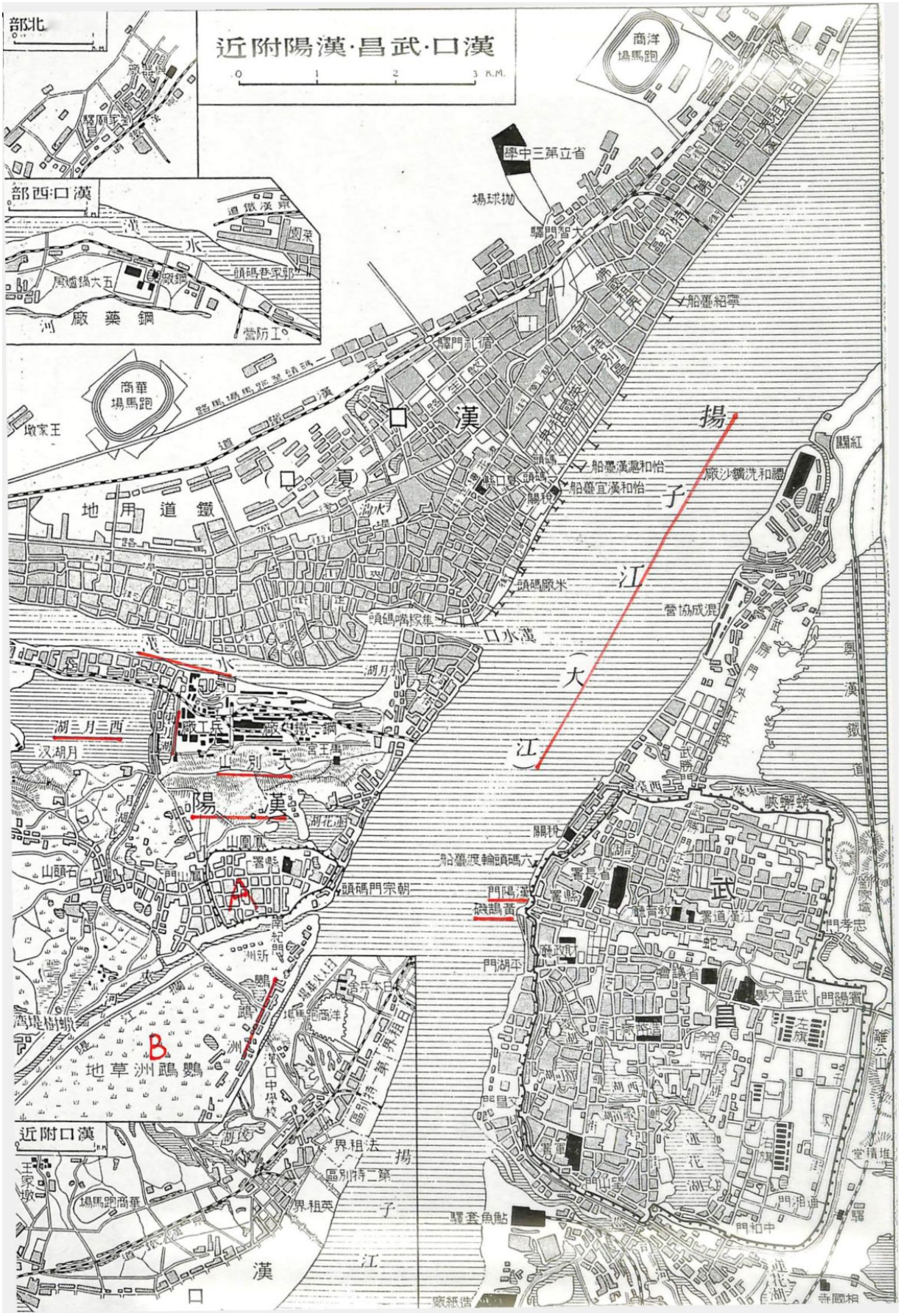
[26] 津島美知子『回想の太宰治』　人文書院　1997 年 8 月　199 頁。

（古典や地理など）をよく知っている兄弟であることを根拠付けるためであろう。

大塚繁樹の指摘しているような、中国古典を引用しているのは「太宰一流の饒舌に」由来するといった理由や、大野正博の指摘しているような、中国地理の知識を取り入れたのは「地理概念を把握すると同時に描写の重要資料と」するためという理由は、何れも中国古典や中国地理の知識を取り入れた表面上の理由に過ぎず、本当の理由は日本が中国の兄弟という大東亜五大宣言の理念に迎合するためだったと考えられる。

一方、藝術の純粋を求めるため、時局への協力を拒否し続けてきたが、敗戦直前という特殊時期にあたり、時局への協力を余儀なくされたという太宰の葛藤に配慮して、「惜別」を読むべきであろう。また、今まで「聊斎志異」の翻案として読まれてきた「竹青」も時局小説として読み直す必要があるのではないか。

附図


近附陽漢·昌武·口漢
0 1 2 3 K.M.
北部
漢口西部
商洋場馬跑
學中三第立省
場球拋
驛門智大
船舶紹寧
商華場馬跑
墩家王
路馬場馬跑
道鐵口漢
地用道鐵
口夏
口漢
揚子江
大江
船舶漢滬和怡
船舶宜漢和怡
關稅
米廠頭碼
頭碼嘴探集
口水漢
湖月
湖三月西
汉湖月
山別大
陽漢
山鳳鳳
署縣
頭碼門宗朝
關稅
船舶渡輪頭碼六
門陽漢
碼頭黃
門湖平
署長省
署道漢江
學大昌武
門陽寶
門孝忠
武昌
蛇一
議省
巡花湖
堂
寺國相
驛登魚鮎
門柏中
門湖通
界租法
界租英
區別特二第
區別特一第
洲草地
鸚鵡洲
漢口中學校
商洋場馬跑
近附口漢
場馬跑商華
漢口
揚子江
廠紙造
廠沙鐵洗和禮
紅關
營協成滬
武勝門
峽關蟒
A
B

第二章、太宰治「惜別」の成立について

はじめに

「惜別」は魯迅の仙台医専時代の友人であった老医師の手記の形で書かれている。これは内閣情報局と文学報国会との委託で書き進めた小説である。大東亜共同宣言の文学作品化の要請に応える実作として企画された、いわば太宰治にとって、当局の要請に応える国策小説と言われている。

「惜別」の成立に関する先行研究は、松木道子の「太宰治『惜別』における魯迅受容のあり方」を始め、幾つか存在するが、今まで、もっとも全面的な考察は、ほとんどの先行研究を網羅した山内祥史の「惜別」解題[27]だと思われる。次は山内祥史の指摘に基づいて、「惜別」の執筆に際して、太宰治の参照した資料をまとめてみたい。

小田嶽夫の『魯迅伝』　筑摩書房　昭和 16 年 3 月

小田嶽夫の「「惜別」準備の頃」において、「昭和十六年に私が『魯迅伝』を出したときのことだが、友人その他への寄贈をすませた二三日後亀井君を訪ねたら、「さっき太宰君が来たが、もう『魯迅伝』を全部読んだそうだ」と亀井君が語ったところから見て、太宰君はもうその頃魯迅についてはいくばくかの関心を持っていたものと想像される。」[28]という一節が見える。

改造社版『大魯迅全集』全 7 巻　昭和 12 年

小田嶽夫の「「惜別」の準備の頃」において、「太宰君は私のところから改造社版の『大魯迅全集』七巻を借りて行った」[29]という一節がある。

『東亜文化圏』に連載されている実藤恵秀の「留日学生史談」

昭和 19 年の小田嶽夫宛太宰治書簡に

「先日は失礼いたしました。今日はまた、雑誌をわざわざお送り下さて、大助かりいたし

---

[27] 『太宰治全集』第 7 巻　筑摩書房　1990 年 6 月　419 頁～446 頁。

[28] 『太宰治全集』第 8 巻　筑摩書房　1998 年 11 月　424 頁。

[29] 『太宰治全集』第 8 巻　筑摩書房　1998 年 11 月　424 頁。

ました。このごろ毎日、魯迅を読んで居ります。」[30]（2 月 28 日付）及び「わざわざお便りありがたう存じます。今月号が無いとは残念でした。来月号にまた出てゐたら、おねがひします。」[31]（4 月 20 日付）が見られる。

一方、小田嶽夫の「「惜別」の準備の頃」において、「葉書のなかにある「雑誌」というのは、或る中国関係の雑誌で、それに実藤恵秀氏が中国学生の日本留学史というようなものを連載していたので、それが送られて来る度に太宰君に送っていたのであった。」[32]とある。

五十嵐康夫は「太宰治『惜別』成立論―さねとう・けいしゅう氏の著作を中心に―」[33]において、太宰が「楽しみに待っていた」雑誌は『東亜文化圏』（昭和 17・月未詳創刊～19・3 廃刊）であり、雑誌「東亜文化圏」に、さねとう氏の「留日学生史談」が、昭和 18 年 10 月号から廃刊になるまで六回連載されていると指摘している。

「河北新報」

太宰は「惜別」取材のため、仙台に行って、「河北新報」の明治 37、38 年の綴込からメモを取った。津島美知子『回想の太宰治』において、

「河北新報」の綴込から太宰がとったメモ（二百字詰原稿用紙十五枚）は「周さん」が留学していた当時の主要な報道を拾う一方、仙台の世相、風俗、市井雑事など、小説の背景となり、雰囲気を出す記事を蒐めたのであって、まず目につくのが、日露戦争の戦況、とくに仙台第二師団の出征、活躍、戦況祝賀の催し、ロシア捕虜のことなど。仙台医専に関する記事は、明治三十七年九月十二日入学式挙行、運動会、音楽会、解剖祭の催し、学年試験、卒業試問の報道などがメモに散見している。

新聞の広告や社会記事からは、劇場や寄席の名と、だしもの、流行のリボンや履物、そば屋、洋食屋、教会の名などを丹念に拾っている。

「昨年中はあまりに御無沙汰致し候処―」に始まる慰問文は、そのまま新聞記事から

---

[30] 『太宰治全集』第 12 巻　筑摩書房　1999 年 4 月　297 頁。

[31] 『太宰治全集』第 12 巻　筑摩書房　1999 年 4 月　298 頁。

[32] 『太宰治全集』第 8 巻　筑摩書房　1998 年 11 月　424 頁。

[33] 『日本近代文学会会報』第 51 号　1980 年 3 月。

とっている。[34]

と書いてある。

竹内好の『魯迅』（日本評論社　昭和 19 年 12 月）

「惜別」の「あとがき」に「いよいよ私がこの小説を書き始めた、その直前に、竹内好氏から同氏の最近出版されたばかりの、これはまた秋の霜の如くきびしい名著「魯迅」が、まったく思ひがけなく私に恵送せられてきたのである。」（293 頁）[35]とある。

一方、竹内好の「太宰治のこと」[36]において、「『魯迅』を書きあげて間もなく召集がきたとき、跋を武田にたのみ、あわせて、寄贈者名簿に太宰治の名を加えた。（中略）しかし、太宰治がそれをよんでくれたかどうかは、昭和二十一年の夏に復員するまで知らなかった。太宰治は私の留守宅あてにはがきの礼状をよこしていた。そこに彼らしいきちょうめんな一面が感じられた。のみならず、彼に『惜別』という作品がありそこで私の『魯迅』が利用されていることをはじめて知つた。」とある。

また、『小学唱歌集第三編』（明治 17 年）や芭蕉の「おくのほそ道」と橘南渓の『東遊記後編』巻の四の「松島」および『世界地理風俗大系』第 3 巻（新光社　昭和 5 年 7 月）も数えられる。

先行研究への補足

①魯迅の成績

「惜別」に「先生は案外にのんきな笑顔で、「周君の解剖学は落第点や。他の学科の点数がよかつたから、まあ、あれだけの成績を収めたのです。周君は、あれは、何番だつたかしら。」「さあ、六十番くらゐだつたでしようか。」」（260 頁）とある。「解剖学は落第点」とか「六十番くらゐ」とか、細かく描写されている。この成績の出典について、太宰治は

---

[34]　津島美知子『回想の太宰治』　人文書院　1997 年 8 月　201 頁。

[35] 本論文で「惜別」からの引用は『太宰治全集』第 8 巻（筑摩書房　1998 年 11 月）に依り、頁数だけ示す。

[36] 『太宰治全集月報』第 3 号　筑摩書房　1957 年 12 月。

飯野太郎「仙台医学専門学校時代の魯迅について」[37]に依拠したとする浅田高明の指摘[38]に対し、山内祥史は『大魯迅全集』第七巻に挿入された「大魯迅全集月報」第 5 号に掲載されている、小林茂雄の「魯迅と仙台医専時代」に依拠したと主張している。小林茂雄の「魯迅と仙台医専時代」には、魯迅の成績について

解　剖　　五九・三
組　織　　七二・七
生　理　　六三・三
倫　理　　八三
独逸語　　六〇
物　理　　六〇
化　学　　六〇
平　均　　六五・五
で一四二番中六八番であつた。

と詳しく述べている。しかし、昭和 12 年に刊行された『大魯迅全集』が小田嶽夫を経由して、昭和 19 年に太宰治の手に入る時、「大魯迅全集月報」第 5 号はまだ挟まれていたかどうかは疑問であろう。筆者の調査したところ、小田嶽夫の『魯迅伝』の 59 頁にも、前記とおなじ成績が載っている。太宰治が小田嶽夫の『魯迅伝』を読んだのは事実であるので、「惜別」における「周さん」の成績は小田嶽夫の『魯迅伝』に依った可能性が最も高いと思われる。

②支那料理店

「惜別」に「僕は東京へ来て、八丁堀の偕楽園や、神田の会芳楼などで、先輩から、所謂支那料理を饗応された事がありますが、僕は生れてはじめて、あんなおいしいごちそうを食べました。僕は日本へ来て、料理がまずいなどと思つた事は一度もありません。」(236 頁）というような支那料理店に関する描写が見える。店の名前と位置が詳しく述べられて

[37] 『艮陵』第 39 号　東北帝国大学医学部艮陵会　1937 年 2 月。

[38] 「『惜別』小論（下)」　『日本医事新報』第 2928 号　1980 年 6 月。

いる。

一方、昭和 18 年 10 月 1 日に発行された『東亜文化圏』第 2 巻第 10 号に、掲載された実藤恵秀の「日本留学のはじめ－留日学生ものがたり、（一）－」において、

ところで、十三名のうち、韓寿南・李清澄・王某・趙某の四人は、日本について二、三週間のち、帰国してしまった。

「どうして帰国してしまったのですか？」私は、数年まえ、唐宝鍔氏にあったとき、そういってたずねてみた。

「日本のこどもからチャンチャン坊主といってひやかされたのと、日本食が口にあわぬため、弱って、帰国したのです。」

ここでおもいだすのは、神田の中国料理店、会芳楼の開業である。それは明治三一年。（11 頁）[39]

とある。神田の会芳楼が出てくる。

また、昭和 19 年 2 月 1 日に発行された『東亜文化圏』第 3 巻第 2 号に、掲載された実藤恵秀の「日華学堂の教育－留日学生史談、（五）－」には、

この偕楽園は東京における中国料理の原祖で、明治十年代の創業。（中略）明治二四年発行の『奇術〇〇、東京料理屋案内』という小冊子に、偕楽園のことが、つぎのように紹介されている。

「者是ヨリ案内致スハ、自慢程ノ事モアラズ、支那料理東京で並ブモノナキ八丁堀ノ偕楽園（京橋区亀島町一丁目廿四番地）」（62 頁）。

とある。八丁堀の偕楽園が見えるから、「惜別」における支那料理店に関する描写は雑誌『東亜文化圏』に連載された実藤恵秀の「留日学生史談」に依拠したと思われる。

第一節、『世界歴史大系』第 9 巻『東洋近世史（二）』

---

[39] 本論文で「留日学生史談」に関する引用は、のちの昭和 56 年 5 月に、第一書房から刊行された『中国留学生史談』に依り、頁数だけ示す。

「惜別」において、日清戦争以降の列強の中国への進出や康有為・梁啓超などによる戊戌変法や義和団運動や孫文による民主革命などが、魯迅の生きた時代の背景として登場する。一方、「惜別」の本文に現れていないが、「惜別」の「構想メモ」に「第一、第二、第三革命、死に臨んで叫ぶ、革命なほ未だ成功せず」[40]や「五年目、辛亥革命、民国二年、第二革命、民国四年、第三革命やつてみるのですね、民国十四年、孫文歿」[41]などの魯迅が日本を離れてからの中国の情況も見られる。

このような魯迅を取り巻く環境に関する描写の出典については、松木道子の纏めた、42項目からなる〈惜別における出典〉[42]という一覧表の 38 項目で、二十歳前後の魯迅をとりまく情況は小田嶽夫の『魯迅伝』に依ったという指摘は今まで唯一のものである。

小田嶽夫の『魯迅伝』に目を向けて見ると、

> 魯迅は十八歳の年の春南京の江南水師学堂に入らうとした。水師学堂とは海軍の学校であり、学資が要らなかつたからでもあらうが、当時の西洋科学に依る富国強兵主義に影響されてもゐたのである。この前後の彼をとり巻く環境を簡単に述べると、支那が日清戦争に惨敗したのがその前年の彼が十七歳の時、義和団事件で北京が八国連合軍に蹂躙されたのが翌々年の彼が二十歳の時のことであつた。また若き光緒帝が広東南海の儒康有為の説を受け容れ西太后を押しのけ秘密裏に政治の大改革を決行しようとして未前に太后に知られるところとなり、禁苑内南海の瀛台に幽閉された戊戌政変の悲劇は彼の南京へ出た年のことであつた。すでに旅順、大連、威海衛、膠州湾、広州湾はそれぞれ露、英、独、佛の各国に租借せられてゐ、かういふ状態の支那国家の危急を救はうとしてかの満洲朝の皇帝が起ち上りかけた時にはもう孫文は米英日諸国の間を奔馳し、その同胞の間に倒満興漢の宣伝につとめることしきりで、政治綱領「三民主義」も完成されてゐた。こんな状態であり、しかも支那には早く一八六〇年代から李鴻章等を主とした「洋務」運動（西洋の科学を研究する運動）が着々進行を見てゐた時だつたので、彼のさういふ志は当時のいくらか気鋭の青年であつたなら誰しも抱く種類のものであつ

---

[40] 『太宰治全集』第 13 巻　筑摩書房　1999 年 5 月　374 頁。

[41] 『太宰治全集』第 13 巻　筑摩書房　1999 年 5 月　378 頁。

[42] 「太宰治『惜別』における魯迅受容のあり方」　「国語国文研究と教育」第 9 号　1981 年 1 月　65 頁。

た。(51 頁)

というような、魯迅二十歳前後の中国の情況は確かに簡単に述べられているが、孫文の死については言及されていない。「惜別」の「構想メモ」における「民国十四年、孫文歿」という表現はどこから取り入れたかは疑問であろう。

また、「惜別」の「構想メモ」における「死に臨んで叫ぶ、革命なほ未だ成功せず」というのは明らかに有名な孫文の遺嘱である。小田嶽夫の『魯迅伝』には「「革命尚未成功同志仍須努力」といふ言葉は外形的な政治について言はれたものではあるにせよ、孫文に依つて唱へられ、爾来常に政治当局者の標語とされてゐる。孫文の政治革命さへもが実際には尚未だ成功してゐなかつたのである。」(24 頁) とあり、「革命尚未成功」は孫文の遺嘱であることは明言していない。では、孫文の遺嘱をどこから知ったかと言えば、太宰治は中国民主革命を紹介する書籍または歴史書を参照したのではないかと推測される。いろいろ調査した結果、『世界歴史大系』第 9 巻『東洋近世史 (二)』が有力な出典ではないかと思われる。具体的に述べて見たい。

『世界歴史大系』は平凡社から刊行されたもので、下記のように 25 巻からなる。

巻数	内容	著者	発行期日
第 1 巻	史前史	大島正満、池上啓介、大山柏、甲野勇、樋口清之、山口隆一	昭和 9 年 8 月
第 2 巻	東洋考古学	駒井和愛、江上波夫、後藤守一	昭和 9 年 5 月
第 3 巻	東洋古代史	橋本増吉	昭和 8 年 10 月
第 4 巻	東洋中世史 (一)	志田不動麿	昭和 9 年 3 月
第 5 巻	東洋中世史 (二)	三島一、鈴木俊	昭和 9 年 5 月
第 6 巻	東洋中世史 (三)	日野開三郎	昭和 9 年 10 月
第 7 巻	東洋中世史 (四)	有高巌、清水泰次、和田清	昭和 10 年 5 月
第 8 巻	東洋近世史 (一)	浦廉一	昭和 11 年 3 月
第 9 巻	東洋近世史 (二)	松井等	昭和 9 年 7 月
第 10 巻	中央アジア史・印度史	松田寿男、小林元、木村日紀	昭和 10 年 10 月
第 11 巻	朝鮮・満洲史	稲葉岩吉、矢田仁一	昭和 10 年 7 月

第 12 巻	日本史（一）	西岡虎之助	昭和 11 年 1 月
第 13 巻（A）	日本史（二）	秋山謙蔵	昭和 10 年 8 月
第 13 巻（B）	日本史（三）	井野邊茂雄、阿部真琴、藤井甚太郎	昭和 10 年 3 月
第 14 巻	西洋古代史（一）	杉勇、石橋智信、大畠清	昭和 8 年 12 月
第 15 巻	西洋古代史（二）	岡島誠太郎、浜田耕作、石橋智信	昭和 9 年 11 月
第 16 巻	西洋古代史（三）	原随園、林武雄	昭和 9 年 6 月
第 17 巻	西洋中世史	高市慶雄	昭和 10 年 1 月
第 18 巻	西洋近世史（一）	大類伸、佐藤堅司、渡邊鼎	昭和 9 年 9 月
第 19 巻	西洋近世史（二）	阿武實、佐藤堅司	昭和 8 年 11 月
第 20 巻	西洋近世史（三）	長寿吉	昭和 9 年 2 月
第 21 巻	西洋近世史（四）	長寿吉	昭和 10 年 6 月
第 22 巻	西洋最近世史	山脇重雄	昭和 9 年 12 月
第 23 巻	現代史	村川堅固	昭和 10 年 12 月
第 24 巻	年表	鈴木俊	昭和 11 年 9 月
第 25 巻	史籍解題	下中弥三郎	昭和 11 年 5 月

西洋古代史、東洋近世史などのように地域と時代を基に 25 巻に分かれている。それぞれ歴史学の各分野の専門家によって著わされ、権威のあるものと思われる。太宰治の参照したと思われる第 9 巻『東洋近世史（二）』の著者には松井等[43]、佐藤正志、吉田金一、野原四郎、佐野利一、百瀬弘、鈴木朝英が挙げられている一方、その構成は次のようである。

近世史概要（松井等）

第一章　阿片戦争と英国の対支活動

第二章　露国の太平洋進出

第三章　米国の太平洋進出

第四章　太平軍動乱

第五章　同治中興並に光緒初世

[43] 松井等は東洋歴史学者。大正九年九月、国学院大学の専任教授となり、昭和四年五月、国史研究室第二分科主任を兼ねた。昭和一二年五月、病没す。著書には『東洋近代史』、『東洋近世政治思潮』、『最近支那政界の趨勢』、『支那現代史』、『東洋史概説』、『東洋史要釈』など多数ある。

第六章　明治以後の日鮮支三国関係

第七章　列強の対支利権争奪

第八章　日露戦後の東亜変局

第九章　支那の革新運動と革命動乱

第十章　中華民国

第十一章　最近支那情勢並に満州事変

第十二章　革命行程の印度

十九世紀中葉に於ける英支の関係（佐藤正志）

太平天国の乱（野原四郎）

支那革命の発展（一）（佐野利一）

支那革命の発展（二）（佐野利一）

鉄道利権と外国借款（百瀬弘）

近世支那朝鮮を繞る日露関係（野原四郎）

蒙古及び西蔵問題（吉田金一）

直轄後の英領印度と革命行程の動向（鈴木朝英）

後印度問題（鈴木朝英）

「近世史概要」では 12 章に分かれ、19 世紀半ばから本書の刊行された昭和 9 年までの中国歴史を主軸に、列強の東アジアへの進出やそれによる国際関係の変化及び印度の革命などが概説されている。例えば、第七章「列強の対支利権争奪」では、日清戦後、租借地、勢力範囲、鉄道などの利権を巡って争奪を展開した列強の圧迫を背景に、相次いで発生した戊戌政変や義和団の乱や北清事変及び日露戦争の背景としてのロシアの満洲と朝鮮への進出などについて述べられている。また、第九章「支那の革新運動と革命動乱」においては、張之洞らによる変法会奏（意見書）を発端とする、清朝政府による憲政実施など一連の革新運動や、辛亥革命による清朝の滅亡の経緯について概観されている。「近世史概要」の後に「十九世紀中葉に於ける英支の関係」や「近世支那朝鮮を繞る日露関係」など九つの項目を設け、詳しく述べられている。例えば、「近世支那朝鮮を繞る日露関係」の項目で、琉球問題や朝鮮市場進出における中国と日本との対立などの日清戦争の背景や、日清戦争の中国と朝鮮への影響や、朝鮮における利権の日本とロシアとの対立を初めとする日露戦争の背景などについて詳しく叙述されている。

一、中国革命同盟会の成立

1905 年、日露戦争の日本の勝利とロシア革命の刺激を受けて、それまでの華興会・光復会・興中会という三大革命団体が東京で会合して、孫文を会長とする中国革命同盟会を結成した。これについて、「惜別」で「いまは黄興の一派と孫文の一派の握手もいよいよ実現せられて、中国革命同盟会が成立し、留学生の大半はこの同盟会の党員で、あの人たちの話を聞くと、支那の革命がいまにも達成せられそうな様子なのですが」（268 頁）と書いている。

小田嶽夫の『魯迅伝』に「是より先一九〇五年には滅満興漢の革命団体たる革興会（湖南の黄興主宰）光復会（浙江の章炳麟主宰）及び興中会（広東の孫文主宰）が、孫文が三年にわたる世界各地遊説を終へて再び東京へ帰つたのを機会に、大同団結して中国同盟会が結成せられ。」（72 頁）とある。太宰治が『魯迅伝』を読んだのは事実であるので、「惜別」における同盟会の成立に関する描写が『魯迅伝』に依ったとしたら、「惜別」に、黄興と彼の主宰した革興会、章炳麟と彼の主宰した光復会、孫文と彼の主宰した興中会がいずれも出てくるはずであろう。しかし、「惜別」には孫文と黄興は出てくるが、章炳麟は見られないのは、太宰治が別の資料を参照したことを傍証しているのではないか。また、『東洋近世史（二）』における「支那革命の発展（一）」の項目で同盟会の成立に関する叙述は次のようである。

> 革命運動の主動勢力としては孫文の率ゐる興中会の外に華興会と光復会があつた。（中略）華興会は黄興、陳大華、宋教仁、劉揆一などが中心となつて（中略）光復会は支那学の大家章炳麟を中心とした秘密結社で、伝統的支那学を基礎とする革命を唱へて居た。従つてこの思想は孫文や黄興等の主張とは全く出発点を異にし、支那本来の革命を光復すると云ふにあつたが、当面の目的は同じく清朝を打倒することにあつた。（217 頁）

> 孫文は恵州事変失敗後、二度目の欧州の旅に上つて居たが、日露戦争発生の報を聞いて東京に帰り、革命戦線の統一と調整を図るために、興中会と前記二結社（華興会と光復会、筆者注）との大同団結の画策を進め、「中国革命同盟会」の成立を見るに至つた。（219 頁）

小田嶽夫の『魯迅伝』と同様に、孫文と彼の主宰した興中会、黄興と彼の主宰した華興会、章炳麟と彼の主宰した光復会はいずれも現れるので、太宰治がこの記述に依拠したとしたら、章炳麟と彼の主宰した光復会は見逃さないはずであろう。

一方、『東洋近世史（二)』における「近世史概要」第九章「支那の革新運動と革命動乱」で、次のような記述がある。

> 明治三十八年、孫文の一派と黄興の一派とが東京に於いて団結を遂げ、中国同盟会を組織したが、この団結に因つて革命運動の規模は次第に拡大されて来た。（六〇頁）

「惜別」における描写と対照してみると、幾つかの共通点が見える。まず、「近世史概要」第九章「支那の革新運動と革命動乱」では、中国同盟会を成す三大革命団体の一つである光復会および主宰者の章炳麟については述べられていない。「惜別」にも光復会および主宰者の章炳麟について触れないのは偶然ではないであろう。また、黄興の名前が見られるが、彼の主宰した華興会が出てこない所も「惜別」と「近世史概要」に共通する。一方、「惜別」における「黄興の一派と孫文の一派」と「近世史概要」における「孫文の一派と黄興の一派」とは表現において似ていると言えるだろう。つまり、「惜別」における中国同盟会に関する描写は『東洋近世史（二)』における「近世史概要」第九章「支那の革新運動と革命動乱」に拠ったのではないか。

二、戊戌政変

「惜別」に「ちやうどその頃だ。かの康有為が、日本の維新に則り、旧弊を打破し大いに世界の新知識を採り、以て国力回復の策を立てよと叫び、所謂「変法自強の説」を帝にすすめ、いれられて国政の大改革に着手したが、アイテルカイトの Dame ならびにその周囲の旧勢力の権変に遭ひ、新政は百日にして破れ、帝は幽閉され、康有為は同志の梁啓超らと共に危く殺害からのがれて、日本に亡命した。」（198 頁）という中国の戊戌変法に関する描写が見られる。

小田嶽夫の『魯迅伝』では「若き光緒帝が広東南海の儒康有為の説を受け容れ西太后を押しのけ秘密裏に政治の大改革を決行しようとして未前に西太后に知られるところとなり、禁苑内南海の瀛台に幽閉された戊戌政変の悲劇は彼の南京へ出た年のことであつた。」

としか書かれていない。同志の梁啓超や二人の海外への逃亡についての記述は見られない。

それに対して、『東洋近世史（二)』における「近世史概要」第七章「列強の対支利権争奪」において、次のように述べられている。

広東省南海県の人康有為は光緒帝を動かして政治改革の企図を決行したが、目的を果たし得ずして失敗に帰した。これが戊戌政変である。光緒帝の代となつては、西洋文化が次第に支那の識者に了解され、西洋の新知識を吸収しようとする希望が稍々弘まつて来た。康有為も西洋文化の長所を採つて革新の一助とすべきを唱へた一人である。彼は、日本の明治維新に則つて、旧弊を打破し世界の新知識を採り、以て国力回復の策を立てよと叫び、当年二十八歳の光緒帝は大に心を動かし、光緒二十四年四月（明治三十一年六月）に至つて、康有為及び譚嗣同・梁啓超等を特別に登用する事となつた。改革の新政を喜ばざる西太后及びその一派は、新政が一般の恨みを招いて帝の人望が堕ちるのを待つて、最後の一撃を加へようと待ちかまへて居た。光緒帝二十四年八月五日（明治三十一年九月二十一日)、西太后は自分が政治を預る旨を布告し、光緒帝を宮中に幽閉して了つた。康有為と梁啓超とは、危く免れて海外へ脱走した。(43 頁)

『魯迅伝』より詳しく述べている一方、同志の梁啓超や二人の海外への逃亡も見られる。そして、「惜別」における「康有為が、日本の維新に則り、旧弊を打破し大いに世界の新知識を採り、以て国力回復の策を立てよと叫び」と『東洋近世史（二)』における「日本の明治維新に則つて、旧弊を打破し世界の新知識を採り、以て国力回復の策を立てよと叫び」を対照してみると、両者の表現はまったく同じなので、前述した中国同盟会の成立における共通点を併せて考えると、太宰治はこの『東洋近世史（二)』を参照したのはほぼ間違いないと思われる。

ただ、「惜別」において、「康有為は同志の梁啓超らと共に危く殺害からのがれて、日本に亡命した」とあるのに対して、『東洋近世史』では、逃亡先を日本に限定せず「海外」としか書かれていない。また、「惜別」における「変法自強の説」というスローガンや「新政は百日にして破れ」という表現は『東洋近世史（二)』には見えない。一方、昭和 18 年 11 月 1 日に発行された『東亜文化圏』第 2 巻第 11 号に、掲載された実藤恵秀の「少数良質の時代－留日学生史談、（二）－」には次のように述べられている。

広東のひと康有為は「変法自強」の策を上奏した。（中略）康有為・梁啓超の運動は、やがて功を奏し、光緒帝から召しだされて、実際政治をきりもりするようになった。

しかし、その改革があまりに急激にすぎたため、西太后一派守旧派にうらまれ、いわゆる「戊戌政変」となり、新政百日にして、康有為たちは日本に亡命せざるをえなかった。（22 頁～23 頁）

「変法自強」のスローガンや「新政百日」や「日本に亡命する」というような叙述が見られるので、太宰治はこれも参照したのではないか。つまり、「惜別」における戊戌政変に関する表現は『東洋近世史（二)』における「近世史概要」と実藤恵秀の「少数良質の時代－留日学生史談、（二）－」を混ぜて成立したものであろう。

また、「惜別」に「アイテルカイトの Dame ならびにその周囲の旧勢力の権変に遭ひ」という表現が見える。「アイテルカイト」はドイツ語で、「虚栄」という意味である。「 Dame」はドイツ語で「貴婦人」という意味である。中国の戊戌政変について述べる時、「アイテルカイトの Dame」というような、ドイツ語を取り入れた書籍はないであろう。「アイテルカイトの Dame」（虚栄の貴婦人）という表現は本に依ったのではなく、西太后を揶揄するために、太宰の案出した表現ではないか。一方、「惜別」においては、主人公の「周さん」（モデルは魯迅）が戊戌政変を述べているという設定である。前記の魯迅の成績表を参照すると、分かるように、魯迅がドイツ語を学んでいたから、魯迅像に近い「周さん」という人物像を作り出すため、「アイテルカイト」というようなドイツ語を付け加えたのであろう。

三、列強の進出

日清戦争以降、清国の弱味に付け入って、列強の支那に対する露骨なる圧迫が加わって来た。港湾都市を租借し、勢力範囲を敷いていた。時間の前後で述べると、1898 年 3 月にドイツは膠州湾を、同月の直後にロシアは旅順大連を、翌月の 4 月、フランスは広州湾を、6 月にイギリスは威海衛九龍を租借した。

それについて、「惜別」で「その頃すでに、独逸の膠州湾租借を始めとして、露西亜は関東州、英吉利はその対岸の威海衛、仏蘭西は南方の広州湾を各々租借し、次第にまたこれらの諸国は、支那に於いて鉄道、鉱山などに関する多くの利権を得て、亜米利加も、かねて東洋に進み出る時機をうかがっていたが、遂にその頃、布哇を得て、さらに長駆東洋

侵略の歩をすすめて西班牙と戦い比律賓を取り、そこを足がかりにしてそろそろ支那に対して無気味な干渉を開始していた。」（199 頁～200 頁）というように、列強の港湾租借について歴史的順序に沿って記述している。

小田嶽夫の『魯迅伝』に「すでに旅順、大連、威海衛、膠州湾、広州湾はそれぞれ露、英、独、佛の各国に租借せられてゐ」（51 頁）とある。旅順、大連、威海衛、膠州湾、広州湾という五つの港湾が露、英、独、佛という四つの国から租借されている。一体どの国がどの港湾を租借したか、太宰治は別の資料を参照しなければ、分かるはずはないだろう。租借の前後順序においても、『魯迅伝』における「露、英、独、佛」と「惜別」における「独逸、露西亜、英吉利、仏蘭西」とは明らかに違う。また、太宰治の参照した実藤恵秀の「少数良質の時代－留日学生史談、（二）－」にも「かかるところに、ドイツは口実をもうけて膠州湾を租借し、ロシアは旅順・大連を租借し、イギリスは威海衛を租借した」（22 頁）という記述が見える。フランスによる広州湾租借について触れないから、「惜別」の描写の拠り所になれないだろう。一方、『東洋近世史（二)』における「近世支那朝鮮を繞る日露関係」の項目で次のように述べている。

かゝる日清戦争後に於ける前述の如き自利の意志を有しない帝政ロシアを中心とする列強の支那分割過程を、その形態別に列記すれば次の如くである。

（一）　租借の名による土地割譲

一八九八年三月、ドイツ膠州湾租借。

一八九八年三月、ロシア旅順大連租借。

一八九八年四月、フランス広州湾租借。

一八九八年六月、イギリス威海衛九龍租借。

（二）　鉄道敷設権の獲得

（細目省略、筆者による）

（三）　鉱山の獲得

一八九七年九月、イギリス山西省に於ける採鉱権を得。

一八九八年六月、イギリス河南省の採鉱権を得。純粋の借款（三九四頁）

列強による港湾租借の歴史的な順序と「惜別」におけるそれは全く一致する。小田嶽夫の『魯迅伝』にも、実藤恵秀の「留日学生史談」にも見えない「支那に於いて鉄道、鉱山な

どに関する多くの利権」は前記の（二）鉄道敷設権の獲得と（三）鉱山の獲得に依ったのではないか。しかし、「惜別」と『東洋近世史（二)』との間に幾つかの相違点が存在する。

①『東洋近世史（二)』における「旅順大連」は「惜別」において「関東州」へと変わった。周知のように、関東州は日露戦争後、敗れたロシアは租借地の旅順大連を初めとする遼東半島を日本に譲った。遼東半島は日本の統治下に置かれてから、「関東州」と呼ばれるようになった。日露戦争以前、遼東半島または旅順大連と呼ばれている。先に述べたように、ロシアは旅順大連を租借したのは 1898 年 3 月で、当時「関東州」という呼び方はまだ出来ていないから、どの本にもロシアは関東州を租借するというようなことを書いているはずはないだろう。つまり、「惜別」における「関東州」は『東洋近世史（二)』に基づいた太宰治の改作でしかない。

②「惜別」における独逸・露西亜・英吉利・仏蘭西・亜米利加・布哇・西班牙・比律賓などの国名表記は『東洋近世史（二)』におけるそれと違う。太宰治は明治 30 年代という時代に合わせるために、国名表記をカタカナから漢字に改変したであろう。

③「惜別」における「亜米利加も、かねて東洋に進み出る時機をうかがっていたが、遂にその頃、布哇を得て、さらに長駆東洋侵略の歩をすすめて西班牙と戦い比律賓を取り」、「そこを足がかりにしてそろそろ支那に対して無気味な干渉を開始していた」というのはそれぞれ米西戦争とアメリカの唱えた門戸開放・機会均等主義を言っているはずである。米西戦争は 1898 年アメリカとスペインの間で行われた戦争である。戦闘はアメリカの圧倒的な勝利のうちに四ヶ月で終わり、同年 12 月パリで講和条約が結ばれた。その結果アメリカのフィリピンの獲得が実現し、またアメリカは戦争の最中にハワイを併合した。その直後、列強諸国に対して中国における門戸開放・機会均等を要請した。

「惜別」における「そろそろ支那に対して無気味な干渉を開始していた」という表現は「近世史概要」第七章「列強の対支利権争奪」にある「拳匪暴動の雲行きが次第に険しくなりつゝあつた頃、米国から列国に対して支那門戸開放の件を提議した。即ち、或る一国が他の国々に対して支那に於ける利権を閉鎖するが如き事なからしめ、機会均等主義に由つて公平の共栄に向つて進まうといふ趣旨であつた。その趣旨に本づいて、米国は、英、独、奥、露、佛、日、伊の諸国に提議し、明治三十二年六月から翌三十三年初に亙つて前掲諸国の賛同を得たのである。」（44 頁）という記述に依ったであろう。

米西戦争に関する描写は太宰治がどこから取り入れたか分からないが、一方、「そろそろ支那に対して無気味な干渉を開始していた」という表現から、米西戦争以降の門戸開放

主義はアメリカの中国への干渉の開始であると太宰治は考えていることがわかる。実際に、アメリカの中国への干渉は「望厦条約」の結ばれた 1844 年であった。また、1858 年 6 月、中国と不平等な「天津条約」を結んだ。米西戦争以降、フィリピン「を足がかりにしてそろそろ支那に対して無気味な干渉を開始していた」という太宰治の描写は史実との間に食い違いがあるため、本に依ったはずはない。「惜別」の執筆に当たって太平洋戦争中だから、敵のアメリカを醜悪化し、その侵略性を表現するため、太宰治がわざと米西戦争を付け加えたと考えられる。

つまり、「惜別」におけるヨーロッパ列強及びアメリカの中国への進出に関する描写は幾つかの改変を加えながら、『東洋近世史（二)』に依拠したと思われる。

四、義和団の乱

「惜別」において、「しかし、支那にとつて不吉の事件が相ついで起つた。戊戌の政変がその一つであり、さらに、その二年後に起つた北清事変は、いよいよ支那の無能を全世界に暴露した致命的な乱であつた。（中略）義和団の乱に依つて清朝の無力が、列国だけでなく、支那の民衆にも看破せられ」（200 頁）と義和団の乱を述べている。

『魯迅伝』では「義和団事件で北京が八国連合軍に蹂躙されたのが翌々年の彼が二十歳の時のことであつた」（51 頁）と凄く簡単に叙述されている。「惜別」における「北清事変」という表現は見えない。一方、たとえ太宰治はこの叙述を読んだとしても、「支那の無能を全世界に暴露した致命的な乱」という評価を下せないであろう。一方、『東洋近世史（二)』における「近世史概要」第七章「列強の対支利権争奪」では次のように述べられている。

戊戌政変の後、守旧派が全盛を占め、革新嫌ひの風潮が一歩を進めて西洋人に対する排外気分を誘発するやうになつて、北京は一般に不安の空気に包まれて来た。明治三十二年になつて、山東省に於ける義和団の排外運動が兆し、延いて北清事変を激成するに至つたのである。義和団は一に拳匪とも呼ばれ、義和拳と名づけられた一種の拳法を習ひ、これに熟する時は能く弾丸を避け刀剣を防ぎ得るものと信じて居た。彼等が排外運動を敢えてするに至つたのは全く外国宣教師たちの暴慢なる態度を憤慨した事に本づいて居る。彼等は、明治三十二年九月の頃、山東省に於て、宣教師並にキリスト教信者に対する迫害を敢えてし、次で直隷省へ進出し、明治三十三年五月に至つて、拳匪は北

京へ伸ばして来たのである。(中略) 六月下旬、北京政府は外人撃ち払ひの布告を発し、北京公使館は重囲の中に陥つた。北京救援の為め、列国合同して出兵する事となり、八月十六日遂に北京を陥れた。北京陥落の二日前、光緒帝及び西太后は脱走して西に走り、陝西省西安府に逃れた。(中略) 事変の善後処分について、明治三十四年九月七日講和の議定書が調印された。日本、英国、佛国、独逸、奥地利、洪牙利、露国、伊国、和蘭、白耳義、西班牙の諸国が之に関係したのである。その議定された条件の中に、一九四〇年までに償金四億五千万両 (我が日本の六億一千七十万円に当る。それに年四分の利子を付け加へたのであるから、本利合計約十四億円に上ぼる筈である) を支払う事。(43〜46 頁)

6 月下旬から 8 月 16 日にかけて、わずかの一ヵ月半経たないうちに、首都の北京が落とされてしまった一方、11 カ国と同時に不平等条約を締結したことは「支那の無能を全世界に暴露した」のではないか。一方、戦争弁償金を払うために、国民に重い税金を徴収するしかないだろう。そうすると、国民の反抗を招致するのは想像にかたくない。「一九四〇年までに償金四億五千万両 (我が日本の六億一千七十万円に当る。それに年四分の利子を付け加へたのであるから、本利合計約十四億円に上ぼる筈である) を支払うこと」は清朝に対しても国民に対しても二度と立ち直れないほどの「致命的」な結果であろう。つまり、「惜別」における義和団の乱に関する描写は簡略でも『東洋近世史 (二)』における叙述に基づいて、集約したものだと思われる。

五、三回の革命

「惜別」の本文に見えないが、「惜別」の「構想メモ」に「第一、第二、第三革命、死に臨んで叫ぶ、革命なほ未だ成功せず」や「五年目、辛亥革命、民国二年、第二革命、民国四年、第三革命やつてみるのですね、民国十四年、孫文歿」など中国の三回に亘る革命が現れる。『魯迅伝』における叙述は次のようである

袁が大総統になるについては、革命派は袁の将来に於ける専権を慮り、大総統の権限を狭め参議院の権限を拡大した臨時約法をつくり、正式憲法制定まで之に依らせることにしたが、参議院の大多数である国民党 (中国同盟会の後身) は常に大総統を抑へようとし、両者の間には争闘が絶えず、遂に翌民国二年七月には政府軍と国民党軍との戦争

（第二革命）にまで発展し、国民党は敗北し、孫文は台湾に逃れるにまで至つた。（小田嶽夫の『魯迅伝』　筑摩書房　昭和 16 年 3 月　104～105 頁）

袁は民国三年一月には議会の停止を命じ、次いで又代総統を中心とする修正約法を公布し、これによつて凡ての政権が委く大総統に帰属することとし、更にその専制の野望は発展して帝政運動にまでなつた。

が、この帝政運動は進行するにつれて国民党一派が猛烈に反対したのはいふまでもなく袁親近の部下さへも少からず彼のもとを去るやうになり、その上にも日、英、佛、露諸国の帝制反対の共同警告さへあり、又雲南の唐継堯が独立を宣言し討袁軍を組織した（第三革命）のに次いで貴州、四川など呼応して立つ等のことあり、袁は次第に著しく国内に蔓延して来た反袁空気の中民国五年六月悶々のうちに病死した。（小田嶽夫の『魯迅伝』　筑摩書房　昭和 16 年 3 月　105～106 頁）

ここで、第二革命は民国二年に行われたことがわかるが、第三革命の行われた年ははっきり言明せず、文脈から見ると、民国三年のはずであろう。「惜別」の「構想メモ」における「民国四年、第三革命やつてみるのですね」という表現との間に食い違いがある。また、先に述べたように、孫文の死と孫文の遺嘱についての記述は『魯迅伝』に見られない。『東洋近世史（二）』における「近世史概要」第十章「中華民国」や「支那革命の発展（二）」の項目に目を向けてみよう。

民国二年四月八日、北京に於いて国会が開かれたが、その議員の約半数は国民党員であつた。国会開会に先立ちて、国民党理事宋教仁が上海に於いて刺客に傷つけられ、傷重くして斃れ、その刺客は実に袁氏の内意を承けたものであるといふ疑が濃くなつて、袁氏に対する反感が国民党の中に高まつて来た。のみならず、袁氏が国会に謀らずして、恣に日、英、独、佛、露五国聯合銀行団から二千五百万ポンドの大借款を手に入れた事は、一層国民党の激怒を招く種となつた。同年七月中旬、李烈钧は江西省の湖口に於いて討袁軍を挙げ、これが第二革命と呼ばれて居る。（64 頁）

袁世凱は、専制統一の成功に慢心して、遂に皇帝の位に上ぼらんとする陰謀を企つるに至つた。この帝制運動の行はれつゝあつた間に、民国四年日支交渉（二十一ヶ条問題）

が起り、袁氏は、二十一ヶ条をそのまゝ承諾する代りに、日本をして帝制を承認させようと図つたといはれて居る。然るに、日本を始めとして、英、露、伊の諸国から帝制延期の勧告を受けたのみならず、国民に於いても袁氏の野心に対する強烈な反感が湧き起つて来た。

民国四年十二月二十五日、雲南将軍唐継堯を唱へて袁氏討伐の叫びを揚げた。これが所謂第三革命である。(65～66 頁)

張作霖・馮玉祥は、当時天津に閑居してゐた段祺瑞のもとに会合した結果、十一月二十四日、北京に於いて、段祺瑞が臨時執政政府を組織する事となつた。段氏は、今後の政局整理の方針について協議するために広東の孫文を招いたが、孫文も或る抱負を懐いて北上を承諾した。然るに孫文は、北京に入つた頃既に病篤く、民国十四年三月十二日六十歳を以て病歿した。(78 頁)

一月二十六日に（民国十四年、筆者による）ロックフェラー病院で手術を受けたが、その時には既に切開不能の状態になつてゐて、死期を待つばかりとの宣告を受けた。そこで同志にあたへる遺嘱、即ち汪兆銘（王精衛）の代撰になる、「予、国民革命に力を致すこと凡そ四十年。その目的は中国の自由・平等を求むるにあり。四十年の経験を積みて深く知る。この目的を達せんと欲せば、必ずや民衆を喚起し及び平等を以て我を待つ世界上の民族と聯合して、共同奮闘せざるべからざることを。現在革命未だ成功せず、凡て我が同志は務めて須らく予の著す所の建国方略、建国大綱、三民主義及び第一次全国代表大会宣言に依照して継続努力し、以て貫徹せんことを求むべく最近の主張たる国民会議開会及び不平等条約廃除は、最短期間に於て、その実現を促すべし。是れ至嘱する所なり。」の一文を残し、民国十四年三月十二日午前九時半、鉄獅子胡洞の顧維鈞宅に於て眠る如く逝いた。(278 頁)

ここにおいて、第二革命と第三革命が行われた年がそれぞれ、「民国二年」と「民国四年」とはっきり書かれている。一方、孫文の死んだ期日は「民国十四年三月十二日」と詳しく述べられている。また、孫文の遺嘱の全文が載っている。「惜別」の「構想メモ」に「第一、第二、第三革命、死に臨んで叫ぶ、革命なほ未だ成功せず」や「五年目、辛亥革命、民国二年、第二革命、民国四年、第三革命やつてみるのですね、民国十四年、孫文歿」と

いうメモがあるが、これは『東洋近世史（二)』から取ったと思われる。

六、支那の独立保全

「惜別」に「この戦争は、人に依っていろいろの見方もあるであらうが、自分はこの戦争も支那の無力が基因であると考えている。支那に自国統治の実力さえあつたなら、こんどの戦争も起らなくてすんだであらうに、これではまるで支那の独立保全のために日本に戦争してもらつているようにも見えて、考え様に依つては、支那にとつてはまことに不面目な戦争ではあるまいか。」(209 頁）というような表現がある。つまり日本が支那の独立保全のために、ロシアと戦うという日露戦争観である。ここで出てくる「支那の独立保全」という表現の出典と言えば、「近世史概要」第七章「列強の対支利権争奪」や第八章「日露戦後の東亜変局」における次の叙述に依ったのではないか。

明治三十五年一月三十日、ロンドンに於て日英同盟協約が成立した。この協約は、(一）清国・韓国（明治三十年十月朝鮮は国号を韓国と改めた）の独立を認め、この二国の領土保全を期すること。(47 頁）

明治三十八年八月十二日、第二日英同盟が成立した。第二同盟はその条件に於て第一同盟と相異る所がある。(中略）（二）最初の同盟には、清韓両国の独立及び領土保全といふことを規定してあつたが、第二のものに於ては韓国を削除してある。(50 頁）

明治四十四年七月十三日第三日英同盟が成立した。その条件として、極東及び印度に於ける平和を確保し、清国の独立及び領土保全を維持することを約したのは、第二同盟のものと同じである。(50 頁）

英国に次で、佛国も我が国に交渉して日佛協約（明治四十年六月）を結ぶ事となつた。その協約の要領は、先づ清国の独立と領土保全とを尊重し、日佛両国の勢力地に接近したる清国領土の平和を維持すべきことを互に約束したものである。(51 頁）

明治四十年（一九〇七年）七月三十日、第一日露協約が成立した。其の条件は、日露各々其の領土を保全して、支那との条約から生ずる一切の権利を相互に尊重すること、

また日露は清国の領土保全並に商工業上の機会均等主義を承認して現状を維持するといふ趣旨であつた。(51 頁)

ここにおいて、明治 35 年の第一日英同盟から明治 44 年の第三日英同盟まで、五つの同盟協約の条件には何れも「清国の独立及び領土保全を維持すること」が含まれている。つまり明治 35 年の第一日英同盟から、日本はずっと「清国の独立及び領土保全を維持する」という姿勢を見せていた。米英の植民から東亜の独立を守るという大東亜共同宣言の理念に相応しい好個の題目なので、「惜別」に取り入れたのではないか。

「惜別」の執筆に際して、魯迅の生きた時代の背景として、当時中国の民主革命を描写するため、太宰治が『世界歴史大系』第 9 巻『東洋近世史（二)』を参照した可能性は高いと言えるだろう。ちなみに、この『東洋近世史（二)』の著者の松井等が著した『東洋史概説』[44]と『東洋史要釈』[45]も看過できない本である。『東洋近世史（二)』における「近世史概要」とほぼ同じ内容が『東洋史概説』と『東洋史要釈』にも収録されているが、列強の中国における鉱山の獲得や孫文の遺嘱に関する叙述は見られない。

魯迅を取り巻く時代環境について、小田嶽夫の『魯迅伝』において、簡略でも述べている。太宰治はこの『魯迅伝』を読んだ上で、なぜ『東洋近世史（二)』目を向けたか、というと、第一章で述べたように、「惜別」に中国の古典や歴史や地理知識を取り入れたのは、大東亜五大宣言の理念に従って、日本人が親族のように、中国の文化（古典や歴史や地理など）をよく知っている兄弟であることを根拠付けるためである、逆に言えば、日本が中国文化をよく知っている兄弟であるという共同宣言の理念を立証するためには、太宰は中国の地理知識や歴史などを出来るだけ正確に詳しく書かなければならなかったであろう。そういう意味で、太宰治にとって『東洋近世史（二)』は『魯迅伝』より詳しく、必要な文献であったと考えられる。

第二節、その他の資料

---

[44] 共立社　1930 年 4 月。

[45] 共立社　1934 年 6 月。

前述したものの他に、既に指摘されている太宰治の参照した資料にも、『東洋近世史（二)』にも載っていないが、「惜別」に出ている、孫文の三民主義や孫文と康有為との対立などの中国に関わる表現が見られる。「惜別」の執筆に際して、前記以外の資料も参照したと考えられる。確実な証拠はないので、ここでは可能性として述べるに止めることにする。

一、三民主義

「惜別」において、孫文の唱えた三民主義は何回も出て来る。

> いまは孫文の所謂三民五憲の説が圧倒的に優勢になつて、その確立せられた主義綱領に基づいて、いよいよ活溌な実際行動の季節に突入した状態のように見受けられ孫文ご自身も、東京にあらわれて日本の志士の応援を得て種々画策し、このごろでは東京が支那革命運動の本拠になつてゐるやうな工合らしい。（206 頁）

> もとより自分は孫先生を尊敬し、その三民五憲の説に共感してゐる事においてもあへて人後に落ちぬつもりであるが、しかし、その三民主義の民族、民権、民生の説の中で、自分には民生の箇条が最も理解が容易であつた。（207 頁）

> 支那の革命思想に就いては、私も深くは知らないが、あの三民主義といふのも、民族の自決、いや、民族の自発、とでもいふやうなところに根柢を置いてゐるのではないかと思ふ。民族の自決といふと他人行儀でよそよそしい感じもするが、自発は家の興隆のために最もよろこぶべき現象です。各民族の歴史の開花、と私は考えたい。何も私たちのこまかいおせつかいなど要らぬ事です。（230 頁）

ここに出てくる「三民五憲」とは三民主義と五権憲法の併称であろう。孫文の革命理論の核心は民族主義・民権主義・民生主義という三民主義であるのは周知のことであろう。一方、行政権、立法権、裁判権の外、考試権と弾劾権を加え、合わせて五権憲法になる所は孫文の独創と言われている。「惜別」の執筆時点の中国で、三民主義はなお理念として唱えられているため、太宰治は何かの資料を参照せずにそれを知る可能性があるが、五権憲法は何かの資料を読まずにわかるのは不自然であろう。太宰は「あの三民主義といふのも、

民族の自決、いや、民族の自発、とでもいふやうなところに根柢を置いてゐるのではないか」というように、民族主義の根本精神について述べている。何かの資料を読まなければ、それほど詳しく知るはずはないであろう。

周佛海著・犬養健訳『三民主義解説』[46]において、三民主義と五権憲法について詳しく述べている。その内、民族主義については、「民族主義とは一切の民族の自決権を主張する主義、換言すれば民族国家の建設を主張する主義である。既に述べたやうに民族主義には三つの要素がある。第一は中国民族自身の解放要求、第二は国内民族の一律平等、第三は一切の被圧迫民族の解放、である。そしてこの要素の根本精神を成すものが民族自決である。」（82 頁）と書いている。民族主義の「根本精神を成すものが民族自決である」と主張している。「惜別」における「あの三民主義といふのも、民族の自決、いや、民族の自発、とでもいふやうなところに根柢を置いてゐるのではないか」という表現と似ているであろう。

また、「惜別」における「僕は、ただ僕の一すぢに信じてゐる孫文の三民主義を、わかり易く民衆に教へて、民族の自覚をうながしてやりたい。」(275 頁) という表現に対して、周佛海著・犬養健訳『三民主義解説』には次のような叙述が見える。

> 歴史と文明を以つてしては危亡を救ひ得ないのである。しかしながら民族的自覚があつて民族独立運動に努力するならば、たとへ他民族に圧迫され分割されてゐても必ず民族の独立、自由の地位を快復しうるのである。（21 頁）

> 即ち民族精神が消滅せず民族的自覚をもつて民族独立運動を遂行するならば、民族危しといへども挽回し得、民族滅ぶといへども快復し得ることを。（24 頁）

> 民衆を蹶起せしめるには民族精神の回復が必要である。また民族精神を回復するためには、第一に民衆に中国民族の現在の地位を明らかにしてその民族的自覚を促し。（108 頁）

民族的自覚をもって民族独立運動を遂行したら、民族の独立、民族の地位の回復が実現で

---

[46] 岩波書店　1939 年 6 月。

きる。一方、民衆を決起させるため、民族精神を回復するため、何よりも先にやらなければならないのは民族的自覚を促すことであると、民族的自覚の重要性を繰り返し強調している。「惜別」における「孫文の三民主義を、わかり易く民衆に教へて、民族の自覚をうながしてやりたい」という表現はこの叙述の延長線上にあるように見えるであろう。そしてこの表現と周佛海著・犬養健訳『三民主義解説』における「第一に民衆に中国民族の現在の地位を明らかにしてその民族的自覚を促し」という叙述と似ていると言えるであろう。

二、興漢会の成立及び孫文と康有為との対立

「惜別」において「支那の革命運動の現状に就いて、自分はまだはつきりした事はわからぬが、三合会、哥老会、興中会などの革命党の秘密結社は、孫文を盟主として、もうとっくに大同団結を遂げてゐる様子で、さきに日本に亡命して来た康有為一派の改善主義は、孫文一派の民族革命の思想と相容れず、康有為はひそかに日本を去つて欧洲に旅立つたらしく」（206 頁）というように、興漢会の成立及び孫文をはじめとする革命派と康有為をはじめとする改良派との対立を述べている。

それに対して、吉野作造『対支問題』[47]において、

> 戊戌政変後の紛雑に乗じて長江以南の会匪間に動揺を生じ、就中広東の三合会と湖南の哥老会との間に巧みな連繋が出来たと云ふ様な事が自ら革命勃発の機運を作つたと謂ふべきであらう。三合会と哥老会は孫文を頭領に戴くの便利なるを思ひ、興中会に提携を申込み来るに及び、遂に三派は合同して新に興漢会の成立を見るに至つた。是に於て孫はいよいよ革命決行の志をかため、徐ろに軍資金の募集にかゝる。（44 頁）

というように、三合会、哥老会は興中会と合同して新しい革命団体の興漢会を創立した背景と経緯を詳しく述べている一方、

> 是より先き孫文は既に日本人の同情の下に東京に安住して居る。そこへ康がやつて来たのだから、隣邦革命運動の二大巨頭が期せずして我が東京に落ち合つたわけである。是に於てこの両雄を提携せしむべきの案が、自ら我国政治家の胸中に浮ばざるを得ない。

---

[47] 日本評論社　1930 年 12 月。

（中略）併し乍らこの画策は結局成功しなかつた、この案を以て先づ第一に孫文を説いて見た。孫は軽く之を承けて何時でも康と会見すべきを言明した。次で我が有志は康に説いた。康は意外にも言を左右に託して孫との会見を避けようとする。（中略）最後に副島蒼海伯を煩し、所謂大義を説いて康に諭示する所ありしも、遂に其の心を翻さしめ得なかつたと云ふことだ。而して康は斯んな事情から日本にも居づらくなり、やがて居を新嘉坡に移すことになる。（55 頁）

というように、孫文一派と康有為一派との連携を図ろうとするが、成功しなかったことを詳しく叙述したあと、両派の対立の原因について次のように分析している。

彼れを兎も角一代の碩儒と観又一世の師表と許す限り、一時の蹉跌に躓いて直に皇室孫中心主義を棄てたと解すべきではあるまい。然らば始めから清朝転覆を唯一の目標とする孫文と彼れとを結ばしめ得べしと考へたのは、飛んでもない間違ひではなからうか。孫から云へば、康一派の勢力は出来るものなら一前衛隊として之を利用するを便としよう。康から観れば、孫の企図は実に不倶戴天の恐るべき叛逆に外ならない。（58 頁）

「惜別」における「康有為一派の改善主義は、孫文一派の民族革命の思想と相容れず」という表現は前述した史実に依ったのではないか。孫文は康有為よりずっと先に日本に来ている一方、孫文と康有為との連携が失敗したあと、康有為が新嘉坡に移住したのは史実であるが、「惜別」において、「さきに日本に亡命して来た康有為」や「康有為はひそかに日本を去つて欧洲に旅立つた」と表現されているのは太宰治の勘違いであろう。ここからも中国的モチーフを自由に利用するという太宰の態度が読める。

三、日本の義士

中国の革命運動を援助した日本の義士についても、「惜別」には述べられている。

日本の政府は、この留学生たちの革命思想に対して、いまのところは、まあ、見て見ぬ振りといふやうな形でいるらしいが、しかし、民間の日本の義侠の士は、すすんでこの運動に援助を与へてゐる。君、おどろいてはいけない。支那の革命運動の大立者、孫文といふ英雄は、もう早くから日本の侠客の宮崎なんとかいふ人の家にかくまわれてゐ

るのだぞ。孫文。この名を覚えて置いたはうがいい。凄いやつらしいんだ。ライオンのやうな風貌をしてゐるさうだ。留学生たちも、この人のいふ事なら何でも聴く。絶対の信頼だ。そのおそるべき英傑の顧問が、その宮崎なんとかいふ人をはじめ日本の民間の義士だ。(223 頁)

「日本の政府は、この留学生たちの革命思想に対して、いまのところは、まあ、見て見ぬ振りといふやうな形でいるらしいが、しかし、民間の日本の義侠の士は、すすんでこの運動に援助を与へてゐる」というように、中国の革命運動に対する態度における、政府と民間との分岐が述べている。また「宮崎なんとかいふ人」は中国の革命運動との関連が最も密接な宮崎寅蔵（滔天）であろう。これらについて、河野密『孫文の生涯と国民革命』[48]において、次のように叙述している。

伊藤博文などの文治派は、国際的に事端を起すのを恐れてあまり革命運動に関与することを喜ばなかつたのであります。(124 頁)

日本の政府が常に国際関係に気兼ねして、煮え切らない態度を採つてゐる間に、民間の先覚者達は献身的な援助を与へたのであります。これ等数ある人々の中で、特筆すべきものは犬養毅、頭山満、宮崎寅蔵（滔天）等の人々でありませう。(133 頁)

宮崎滔天は、全く友人とし同志として孫文を助けた一人であります。彼が松隈内閣の下に支那革命運動の調査を名として渡支したことは前に申し述べましたが、彼はこの行の報告書の代りに孫文を連れて外務省を訪れ、『報告書より生きた革命家を連れて来た』といつたことは有名な話であります。彼は貧窮の間にありながら孫文の面倒を見、中国革命同盟会の成立に当つては、孫黄の間を仲介して提携を計るなど、支那革命運動につくした側面の功績は大であります。孫文も海外亡命中、宮崎の窮愁を伝聞して、屢〃送金したことが、その書翰の中に見えてをります。(134 頁)

「日本の政府が常に国際関係に気兼ねして、煮え切らない態度を採つてゐる間に、民間の

[48] 日本放送出版協会　1940 年 2 月。

先覚者達は献身的な援助を与へたのであります。」という叙述から、日本政府と民間における、中国革命運動に対する態度の分岐が読めるであろう。一方、中国の革命運動を援助した日本の義士が大勢いたけれども、「貧窮の間にありながら孫文の面倒を見、中国革命同盟会の成立に当つては、孫黄の間を仲介して提携を計るなど、支那革命運動につくした側面の功績は大」であり、「孫文も海外亡命中、彼の窮愁を伝聞して、屢〃送金した」、「全く友人とし同志として孫文を助けた一人」である宮崎寅蔵（滔天）は特筆大書しなければならないであろう。また、「惜別」の「日中親和」という主題から見ても、宮崎寅蔵（滔天）は触れなければならない人物であろう。

日中親和という主題から見ると、ずっと日本の援助を受けていた孫文や中国革命は特筆大書すべきものであろう。中でも孫文の唱えた三民主義の一つである民族主義の、列強の植民から中国の独立を守るという主旨は米英の侵略から東亜の独立を守るという大東亜共同宣言の理念に一致するであろう。つまり、「惜別」に孫文や三民主義などを取り入れるために、太宰は上記のような本にも依ったのではないか。

まとめ

総じて言えば、「惜別」の執筆に際して、魯迅の生きた時代の背景として、当時中国の民主革命を描写するため、太宰治は中国の歴史に目を向け、付け加えたり、集約したりしながら、『世界歴史大系』第 9 巻『東洋近世史（二）』を参照したのはほぼ間違いないと思われる。また、日中親和の代表人物としての孫文を取り入れるために、周佛海著・犬養健訳『三民主義解説』や河野密『孫文の生涯と国民革命』などのような本も参照したのではないか。一方、大東亜五大宣言の文学作品化に応じる執筆希望者が意外に多かった原因については、津島美知子が『回想の太宰治』において、「執筆希望者が多数あったのは、資料蒐めや調査について、紹介状、切符の入手等で便宜が与えられる上に、印税支払、要紙割当等でも、当時としては大変好条件を約束されたからであろう。」[49]と述べている。内閣情報局と文学報国会の様々な斡旋があったら、上記のような本は入手し易いであろう。

一方、自身の中国歴史に関する知識の不足に配慮して、歴史書籍に依ったという、太宰と中国的モチーフとの関わり方の一面が分かってくるのであろう。

---

[49] 津島美知子『回想の太宰治』　人文書院　1997 年 8 月　199 頁。

第三章、「思い出」における「赤い糸」と中国の赤縄説話

はじめに

太宰治の「思い出」は昭和 8 年 4 月、6 月、7 月に、三回に分けて「海豹」に連載された三章からなる小説であり、4 歳から中学生最後の冬休み（18 歳）までの 15 年間の生活史を綴った太宰治の回想である。「思い出」の第二章には次のようにある。

> 秋のはじめの或る月のない夜に、私たちは港の桟橋へ出て、海峡を渡ってくるいい風にはたはたと吹かれながら赤い糸について話し合つた。それはいつか学校の国語の教師が授業中に生徒へ語つて聞かせたことであつて、私たちの右足の小指に目に見えない赤い糸がむすばれてゐて、それがするすると長く伸びて一方の端がきつと或る女の子のおなじ足指にむすびつけられてゐるのである、ふたりがどんなに離れてゐてもその糸は切れない、どんなに近づゐても、たとい往来で逢つても、その糸はこんぐらかることがない、そうして私たちはその女の子を嫁にもらふことにきまつてゐるのである。私はこの話をはじめて聞いたときには、かなり興奮して、うちへ帰つてからもすぐ弟に物語つてやつたほどであつた。（『太宰治全集』第 2 巻　筑摩書房　1998 年 5 月　50 頁。）

ほぼ 10 年後の昭和 19 年に刊行された「津軽」にも、この一節がそのまま引用された。ここに出てくる、結婚相手を結びつける目に見えない「赤い糸」というモチーフの出典について、渡部紀子は「唐代の伝奇小説集『続玄怪録』中の「定婚店」の話に見える「赤縄」の故事の由来を、アレンジして話したものか」[50]と指摘している。また、赤縄説話の日本における受容という視点から一連の考察[51]を試みた古田島洋介は、太宰治の「赤い糸」について、「私は青森中学校に入つたとき太宰治は三年生であつた。（中略）私たちの一年生

---

[50] 志村有弘・渡部芳紀編『太宰治大事典』　勉誠出版　2005 年 1 月　12 頁。

[51] 「赤い糸の伝説」（『明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化学科』　第 1 号　1993 年 3 月）、「赤い糸の伝説（続）」（『明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化学科』　第 2 号　1994 年 3 月）、「江戸時代における赤縄故事」（『明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化学科』　第 3 号　1995 年 3 月）、「明治以後の「赤い糸」」（『明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化学科』　第 4 号　1996 年 3 月）。

のとき、新任の橋本誠一先生から、結婚するもの同士をつないでいる、目に見えない赤い糸の話を聞いたが、太宰は三年生の教室でもこの話を聞いたのであろう」[52]という太宰治の中学校時代の後輩である小野正文の証言を根拠として、「橋本教諭は「定婚店」を踏まえて赤縄故事をほぼそのまま生徒たちに語り聞かせたのではなかろうか」と論じている。

太宰治の「赤い糸」の出典に関する渡部紀子の論や、橋本誠一の生徒たちに言い聞かせた話の典拠に関する古田島洋介の論はいずれも示唆に富むが、太宰治の「赤い糸」というモチーフの出典についてはさらに再考の余地が残っていると思われる。本論文ではこの問題について具体的に再検討してみたい。

第一節、中国の赤縄説話及び日本におけるその受容

一、中国の赤縄説話

①「定婚店」

赤縄説話の初出と見られる「定婚店」は唐代の李復言の作『続玄怪録』(『続幽怪録』とも言う）巻四に収められている。後ほど『太平広記』、『説郛』[53]、『五朝小説』[54]などの叢書にも収録されている。梗概を示すことにしよう。

唐の時代の韋固という人が旅の途中で、ある村に泊まった時、月光の下、冥界の書物を読んでいる不思議な老人と会った。聞くと、老人は現世の人々の婚姻を管理して、将来夫婦になるべき男女の足を、生まれるとき、こっそりと赤い縄で結びつける冥界の役人だった。この縄が結ばれると、距離や身分に関わらず、二人は必ず夫婦になるという。

以前から縁談に失敗し続けていた韋固は、自分と結ばれている人について尋ねると、まだ三歳で、野菜売りの陳氏の所にいるという。韋固は相手が自分と不釣合いだと考えて、召使にその娘を殺させたが、刀が眉間に当たっただけであった。縁談がまとまらないまま、十四年が過ぎ、相州の役人になった韋固は、上官の十七歳の美しい娘と結婚した。妻はい

---

[52] 小野正文「太宰治の思い出」　『国文学解釈と鑑賞』第 34 巻第 5 号　至文堂　1969 年 5 月　58 頁。

[53] 叢書の名。百巻。元末明初の陶宗儀の編。楊維楨の序があり、楊維楨は洪武 3 年（1370）の没であるから、それ以前の編である。経書・諸史・随筆・伝記の類を数百種収録したもので、簡録したり、類書中から分抄したりしていて、首尾完結の書を収めたものではない。

[54] 魏晋唐宋明の小説を収めている。また五朝紀事という。明の馮夢龍の編と見られる。

つも眉間に、花簪を貼っているのを不思議に思って、そのわけを尋ねると、三歳のときに悪い人に襲われたという。韋固は冥界の役人の言葉を思い出し、妻と一緒になるのは自分の定めだったことを痛感する。地元の県令はその話を聞き、韋固の泊まった村を「定婚店」と名づけた。

赤縄の現れる部分は次のようである。

因問囊中何物。曰、赤縄子耳、以繫夫妻之足。及其生、則潜相繫。雖讐敵之家、貴賤懸隔、天涯従宦、呉楚異郷、此縄一繫、終不可逭。[55]

そこで袋の中にある物は何かと尋ねると、老人は「赤い縄じゃ。これで夫婦となるものの足を結びつけるのだ。人が生まれるとこっそりと結びつけるのだが、たとえ敵同士の家に生まれても、身分が隔たっていたとしても、地の果てに赴任していたとしても、呉と楚のような遠く異郷にいようとも、この縄で一たび結ばれたら、もう逃れることはできないのだ」と答えた。[56]

ここに出てくる「赤縄子」は赤縄説話の初出と見られる。結びつける部位は明確に「足」と決まっており、結ばれる時期は「及其生、則潜相繫」（人が生まれるとこっそりと結びつける）とあるように、生まれた時に設定されている。

②「閻庚」

また、同じく唐代の戴孚の著した『広異記』[57]に次のような「閻庚」という説話が見える。

閻庚は、張仁亶の才学を慕い、父に反対されながらも、仁亶を援助していた。仁亶はそれを申し訳なく思い、庚のもとを去り、白鹿山へ行くことにするが、庚は仁亶と別れがた

---

[55] 『中国古典小説選』第 6 巻　『広異記・玄怪録・宣室志他』　明治書院　2008 年 1 月　319 頁。

[56] 『中国古典小説選』第 6 巻　『広異記・玄怪録・宣室志他』　明治書院　2008 年 1 月　318 頁～319 頁。

[57] 唐の伝記集。戴孚の著。顧況の戴氏広異記序によれば、もと 20 巻あった。作者の戴孚は至徳 2 年（757）に顧況とともに進士に及第し、57 歳で没した。日本語訳が東洋文庫の唐宋伝奇集及び中国古典文学大系の六朝唐宋小説選にある。

く思い、仁亶について行くことを決意し、二人でひそかに旅たつ。旅の途中で泊まった旅館で、仁亶は特異な雰囲気を醸し出している人がいるのをみつけ、酒を勧める。最初その人は固辞していたが、やがて二人にうちとけ、自分は人間ではなく、河北地方を管轄する土地神であり、婚姻する男女の足を結びつける役目があるのだといい、持っていた袋の中の縄を見せる。そこで二人が自分の将来について尋ねると、仁亶には輝かしい未来が持っているが、庚は運がなく、官位もなく終わると言われる。仁亶がどうすればいいのかと聞くと、良縁に恵まれれば運命を変えることができるといい、ある村の王という人の娘は、もう他の男の人と縄で結ばれているが、それをほどき、庚に結び直せば庚は運に恵まれるという。その村についた時には、大雨が降るので目印とするようにと言われ、王の家に行き着くと、王の家では、ちょうど縁談の相手の結納金が少ないことを不満に思い、破談にしようとしていた。そこで仁亶は庚との縁談を進め、後に二人とも出世する。[58]

この説話における河北地方の婚姻を管轄する「地曹」[59]と結ぶ部位である「脚」は、それぞれ「定婚店」における、人間の婚姻を管轄する「幽吏」と結ぶ部位である「足」と共通するが、「閻庚」では、夫婦となるべき男女の足を結ぶのは「赤縄子」ではなく、「細縄」[60]である。結ばれる時期は生まれた時ではなく、結婚相手を探そうとする成年後である。また、「閻庚」における「細縄」が結びかえられるという所は興味深いであろう。

③「灌園嬰女」

時代が下って、五代十国時代（907 年～979 年）の范資の『玉堂閑話』に「灌園嬰女」という話がある。粗筋はつぎのようである。

昔、一人の秀才があった。二十歳になったので、早く結婚しようと思っていた。けれども、あちこち縁談を求めたが、なかなかうまく行かず、結婚ができなかった。そこで、ある評判のいい占い師のもとを訪れた。「男女は宿縁によって結ばれて夫婦となる（伉儷之道亦繫宿縁）もので、あなたの妻になるべき女はまだ二歳になったばかりで、農家の娘だ」と、占い師に言われると、自分の家柄と才能に誇りを持っていた秀才は不釣合いだと思い、女の子の頭に針を刺し殺そうとするが、女の子は死ななかった。その後、秀才は役人にな

---

[58] 『中国古典小説選』第 6 巻　『広異記・玄怪録・宣室志他』　明治書院　2008 年 1 月　314 頁。

[59] 『太平広記』第 3 冊　上海古籍出版社　1990 年 12 月　385 頁。

[60] 『太平広記』第 3 冊　上海古籍出版社　1990 年 12 月　385 頁。

って、上官の養女と結婚した。けれども、妻は陰鬱な天気になると、頭が痛くなるという病気が何年も続いた。医者に見てもらったら、頭から針を取り出した。秀才は妻の身元をいろいろ尋ねると、例の農家の娘だった。[61]

この話において、「赤縄」は登場しないが、夫婦になるべき男女が「宿縁」によって結ばれている。古田島洋介の指摘したように、この話を「定婚店」に重ね合わせてみると、この話における「宿縁」と「定婚店」における「赤縄子」が同じ位置を占めている。

宋代以降、「定婚店」における男女が夫婦となる運命の象徴である「赤縄子」は、多くの作品で「赤縄」(「紅縄」または「紅線」)と呼ばれるようになり、また「定婚店」で、人間の婚姻を司る存在である「幽吏」(冥界の役人)が、「月下老人」(「月老」または「月下老」)、という神様として後世の文学作品に登場するようになった。古田島洋介の論に拠って、その用例を時代ごとに一例ずつ列挙してみたい。

宋代の張元幹『蘆川詞』: 有赤縄繋足、従来相門、自然媒酌。

元代の喬吉『揚州夢』: 俊雅長安美少年、風流一対好因縁。還須月老牽紅線、纏得鸞膠続断絃。

明代の馮夢龍『醒世恒言』巻七「銭秀才錯占鳳凰壽」: 不須玉杵千金聘、已許紅縄両足纏。

清代の曹雪芹『紅楼夢』第五七回 : 管因縁的有一位月下老人、予先注定、暗裏只用一根紅絲把這両個人的脚絆住…。

二、日本における赤縄説話の受容

赤縄説話の日本における受容については、古田島洋介の論に従い、それを概観してみたい。

「定婚店」を収録している『続玄怪録』は『太平広記』などの叢書に収められているが、これらの叢書が赤縄説話の受容に関与したとは考えにくい。なぜかと言うと、先の『太平広記』や『説郛』、『五朝小説』はどれも数百巻にのぼる大部の書物で、「定婚店」はただその膨大な話群の一つに過ぎないためである。それに対して 17 世紀後半 (江戸時代初期)

[61] 『太平広記』第 2 冊　上海古籍出版社　1990 年 12 月　77～78 頁を参照した。

に和版で刊行された『書言故事大全』・『故事成語考』・『円機活法』[62]などの中国の歴代の説話を集めた説話集に注目すべきであると古田島洋介は考えている

次に、この三書に収載されている赤縄説話及び刊行状況を概観してみたい。

『書言故事大全』巻一「婚姻類」

「月下老」: 略

「赤縄繫足」: 言婚姻前定曰。赤縄繫足。韋固問月下老囊中何物曰赤縄子以繫夫婦之足。雖讐敵之家。呉楚異郷富貴懸隔（懸隔、言相隔遠）此縄一繫。終不可逭。（音換。逭、逃也)。[63]

刊行年次[64]:

正保　3 年（1646 年）

寛文　無刊記（1661 年～1672 年）・10 年（1670 年）・11 年（1671 年）

延宝　3 年（1675 年）

天和　1 年（1681 年）

元禄　5 年（1692 年）・9 年（1696 年）・12 年（1699 年）

宝永　6 年（1709 年）

正徳　5 年（1715 年）

『故事成語考』巻上「婚姻類」

「韋固与月老論婚始知赤縄繫足」: 唐韋固求婚旅次宋城店客有議潘昉女且期隆興寺門固往見老人倚布囊坐階向月撿書因問何書曰天下婚牘因又問曰囊中何物曰赤縄子以繫夫婦之足雖讐敵之家呉楚異地貴賤懸隔此縄一繫終不可違固曰吾娶潘昉女可成乎曰未也君婦適三歳十七入君門固曰安在曰店北売菜陳嫗女也及明指示之老人忽不見固令奴刺女中眉後十四歳相刺史王泰妻以女容貌端麗眉間常貼花鈿歳除問之乃知為泰姪女父終宋城宰時

---

[62] 24 巻。明の王世貞の校訂。天文・時令・節序・地理などの 44 門に分け、各部門はさらに細目に分け、各項について叙事・事実・品題・大意・起句・連句・結句などの見出しをつけて、その下に故典・故語・熟字・成語などを出し、作詩者の便に供している。

[63] 『和刻本類書集成』第 3 輯　汲古書院　1977 年 2 月　20 頁。

[64] 古田島が『江戸時代書林出版書籍目録集成』に基づいて整理したものと古田島自身が発見したものを、収合したものである。

乳母陳養之後泰取以為己女嫁之[65]

刊行年次：

天和辛酉（1681 年）か天和壬戌（1682 年）

元禄　5 年（1692 年）・9 年（1696 年）・12 年（1699 年）

宝永　6 年（1709 年）

正徳　5 年（1715 年）

『円機活法』「詩学」巻八「人倫門」（婚姻附婿）

「月下老」：韋固少未娶旅次宋城遇異人倚嚢坐向月撿書曰此幽冥之書固曰然則君何主曰天下之婚尓因問嚢中赤縄子云以繋夫妻之足雖仇家異域此縄一繋終不可易君妻乃此店比売菜陳嫗女尓因逐之入菜市見嫗抱二歳女亦陋老人指示固怒磨小刀付奴曰殺彼女当賜汝万銭奴翌日刺於稠人中纏傷眉間尓後十四年以父蔭参相州軍刺史王泰女為妻女年十六歳容貌端麗眉間常貼花鈿未嘗暫去逼問之曰妾郡守之猶子也父卒于宋城任時方襁褓乳母鬻蔬以給朝夕嘗抱于市為賊所刺痕尚在因尽言宋城宰聞之名其店曰定婚店。[66]

刊行年次：

明暦　2 年（1656 年）

寛文　無刊記（1661 年～1672 年）・10 年（1670 年）・11 年（1671 年）

延宝　元年（1673 年）・3 年（1675 年）

天和　元年（1681 年）

元禄　5 年（1692 年）・9 年（1696 年）・12 年（1699 年）

宝永　6 年（1709 年）

正徳　5 年（1715 年）

上記の刊行年の頻度を見るだけでも、三書の盛行が推知できる。中でも『書言故事大全』と『円機活法』は十数回に渉って刊行されたことを明らかにしている。古田島の指摘した

[65] 三宅元信『明丘瓊山故事必読成語考集注』巻上　1791 年 9 月　35 頁。

[66] 山崎昇『鼇頭韻学圓機活法』巻 4　1882 年　41 頁。

ように、このように流行した説話集によって、赤縄説話は次第に江戸時代の人々に知られてきたのであろう。同時に、翻訳や翻案などの受容の基礎が築かれたと思われる。

また、三作において、赤縄の結ばれる部位はいずれも「足」に限定されている。結ばれる時期については、『書言故事大全』には書かれていない。『故事成語考』と『円機活法』にも明記されていないが、ヒロインはそれぞれ三歳と二歳ばかりで、すでに主人公の韋固と結ばれているので、結ばれる時期は生まれた時と見なしていいであろう。

次に日本において赤縄説話が受容された例を挙げてみたい。

①『御伽百物語』の「宿世の縁」

古田島によると、赤縄説話が現れた日本の作品中、もっとも古いのは宝永 3 年（1706 年）に成立した青木鷺水の『御伽百物語』にある「宿世の縁」である。あらすじを示すことにしよう。

花垣梅秀という書生が西冷泉のある人の元に宿をする時、近くにある大通寺へ訪れ、境内に建てられている弁天像を参拝しているところ、小さい短冊が風に吹かれてきて、梅秀の前に落ちた。梅秀はそれを拾って見ると、その短冊に恋の歌が書かれている。書きぶりから書き手は女であることが分かった梅秀は、その女に会いたくてたまらないので、学問に疎くなった上に、「この書き手に一回引き合わせていただけませんか」と弁天に祈った。すると、ある夜、弁天に招かれてきた月下の老が現れ、赤き縄を一筋出して、梅秀に向かって引き結んでいるように手真似したあと、その縄を灯火に焼き上げて、招くと、十四五歳の美人がやって来て梅秀と縁を結んできた。ある冬、旅に出る梅秀は誘われ、ある見知らぬ人の家に着くと、家の主は「私の娘と結婚してくれ」と言われた。訳を尋ねると、「私が娘に詩歌の書いた短冊を、ある寺の弁天の社に納めさせると、或る夜の夢に、弁天さまが現れ、「君の娘と宿縁のある人に引き合わせてやろう、あの人はこの冬必ず君の家に行く」と告げた」と、家の主が言った。梅秀は主の娘と会って見ると、これまでずっと自分のそばに居た女だった。驚いた梅秀は聞くと、弁天の方便でこの女の魂を毎晩梅秀の許に通わせたということである。[67]

[67] 『百物語怪談集成』　国書刊行会　1987 年 7 月　175～178 頁を参照した。

この「宿世の縁」において、「月下の老」と「赤き縄」という表現が見られる。「月下の老」は固有名詞として使われている一方、「赤き縄」も男女を引き会わせる道具として現れるから、明らかに中国の赤縄説話を受容したものだと言えるであろう。しかし、「月下老」と「赤縄子」という両要素は上記の『書言故事大全』、『故事成語考』、『円機活法』三作において、共通しているので、「宿世の縁」の作者はどの本を参照したのかを特定するのが困難である。『御伽百物語』の成立した宝永 3 年までの数十年間で、『書言故事大全』、『故事成語考』、『円機活法』はいずれも数回に渉って刊行されているので、「宿世の縁」の作者はこの三作の何れかを読んだのはほぼ間違いないと思われる。また、「月下の老」が固有名詞として使われていることから、赤縄説話は当時の人々によく知られていたと推知できるであろう。

赤縄に関する描写において、結ばれる部位は明記されておらず、結ばれる時に男が書生で、女が十四五歳だから、明らかに生まれる時ではない。

②柳沢淇園の「ひとりね」

もう一つ受容の例として柳沢淇園（1703 年～1758 年）の「ひとりね」が挙げられる。「ひとりね」は享保十年（1725 年）前後に書かれた柳沢淇園の随筆である。その中に中国の説話を翻訳して紹介した部分が多くある。その巻上に次のような話が見える。

韋固という人が旅の途中で、宋城に宿をした時、嚢をもち、月に向かって本を読んでいる翁に出会った。不思議に思った韋固は読んでいる本や彼の職種や嚢の中身について、翁に聞いた。「されば幽冥の書也」、「天下の婚礼を司る也」、「袋の中には紅の縄一筋のみ有。是にて夫婦にならんといふやくそくの男と女の、あしと足をむすび置事也。此縄一たび結びぬれば、たとへかたきどふしの家、或は国を隔て、いか成遠き人なりとても、夫婦に成こと疑ひなし」と、翁は答えた。韋固はさらに自分の未来の妻について聞くと、「ある野菜売りの老婆の娘だ」と翁は言った。すると、韋固は翁とともに、その野菜を売る店へ確認に行ってみると、汚くていやしい二歳ばかりの女の子だった。韋固は怒って家来にその老婆と女の子を殺させようとし、家来はその女の子の額を切った。十四年後、韋固は父の官を継ぎ、王泰という人の娘と結婚した。韋固は妻がいつも眉間に花簪を貼っているのを不思議に思って、そのわけを尋ねると、妻は十四年前、殺そうとしたあの二歳の女の子だったことが分かった。後に、この噂が広がって、あの野菜を売る店を「定婚店」と名づけ

た。[68]

これは柳沢淇園が明暦二年版の『円機活法』を底本として、赤縄説話を抄訳したものである[69]と古田島洋介が指摘している。また、「ひとりね」における「紅の縄」については、結ぶ部位は「あしと足」と表現している一方、結ぶ時期は明記されていないが、二歳ばかりの女の子が主人公の韋固と結ばれているという設定から、生まれた時に結ばれていると読めるであろう。これも柳沢淇園が底本の『円機活法』の「月下老」からそのまま踏襲したと考えられる。

③沖縄の赤縄説話

次に日本の昔話に目を向けてみたい。沖縄の話ではあるが、『日本昔話通観』第 26 巻「沖縄」篇[70]に次の様にある。

昔、唐の国で、「ぜひ学問をせねば、学問こそが宝であろう」ということで、自分の国から遠い中央の方に上り、(たとえば私達奥間でいえば、首里で学問をしようという事で)山道も自分一人で歩いて学問にはげんだ青年がいたということです。その青年は、三日も八日もずっと歩きつづけた後、歩きつかれたので、「ちょっと休んでから行こう」という事で、木の下に休んでいると、そこに立派な髭を生やしたおじいさんが現れ、二人して、いろいろと話しをしているうちに話のついでとして、青年が「人は妻をめとったり、旦那さまを見つけたりするのは、生まれた時から縁で結ばれているからだという事ですが、ほんとうでしょうか」という事をおじいさんに聞いたんだそうです。

そしたら、そのおじいさんは「あなたは、まだこれを分からないのですか。それは本当ですよ。生まれると指の先からの赤い糸で、男と女それぞれ結ばれるという事ですよ。ですから世の中は、いくら親兄弟が反対しても結ばれるものは結ばれるし、どんなに勧めても結ばれないものは結ばれないという事があるのは、昔からそういう伝えがあるからですよ」とおじいさんが言ったんだそうです。すると、この学問に励む青年は、「そしたら、私にも縁の結ばれている女の人がいるのでしょうか」と聞いたわけです。「あー、います

---

[68] 『日本古典文学大系』第 96 巻『近世随想集』　岩波書店　1965 年 9 月　103～104 頁を参照した。

[69] 「江戸時代における赤縄故事」　『明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化学科』　第 3 号　1995 年 3 月　45～49 頁。

[70] 同朋舎　1983 年 7 月　30～31 頁。

よ。あなたも足を赤い糸で結ばれているのですよ」とおじいさんが言うと、青年は「すると私と縁の結ばれている女の人というのはどんな人なんでしょうか」と聞いたということです。するとその時向こう側から女の人が薪をもって通ってゆくのが見えて、「ほらほら向こうから歩いてくる女の人、あなたと赤い糸で結ばれているのは向こうからくる女の人ですよ」と言ったそうです。見ると色の真っ黒なみすぼらしい着物をつけた女の人がそこに立っていたのです。

舞台は「唐の国」に設定されている一方、ここに出てくる「赤い糸」は夫婦になるべき男女を結ぶという働きにおいて、中国の赤縄とまったく同じであり、この説話は中国の赤縄説話を受容したものであることはほぼ間違いないと思われる。中国の赤縄説話はどんな経路を通して、沖縄に伝わったか、現在不明であるが、『日本昔話通観』「沖縄」篇には幾つかの類話が収録されており、この説話は沖縄でかなり流布したようである。

この沖縄の赤縄説話（類話は日本各地に散見するが、他の地方で伝わる話には「赤縄」とか「赤い糸」とかいうモチーフはまったく登場しないから、一応「沖縄の赤縄説話」と呼ぶことにする）において、「赤い糸」が結ばれる時期は「生まれる時」と明記している一方、結ばれる部位は「足の指先」に設定している点は注意すべき所である。

このほかに、古田島洋介の指摘したように、「赤縄」という語の日本における用例は多くある。具体的には附表 1 を参照していただくことにする。

附表 1：日本文学における「赤縄」という語の用例[71]

作品	年次	表現
近江・贅世子 『通俗赤縄奇縁』	宝暦 11 年（1761）	タイトルにおける「赤縄」
上田秋成 『雨月物語』巻 3 「吉備津の釜」	安永 5 年（1776）	既に聘礼を納めしうへ、かの赤縄に繋ぎては、仇ある家、異なる域なりとも易ふべからずと、聞くものを…
「人情廓の鶯」後篇（下）	天明年間（1781～1788）	心置きなくお初と赤縄の契りをむすびければ…

[71] 古田島洋介の「江戸時代における赤縄故事」（44～45 頁）と「明治以後の「赤い糸」」（79～80 頁）を参照した。

山東京伝 『錦之裏』	寛政 3 年（1791）	是なる夕霧殿に、さほどまで御執心なさるゝも、是赤縄のむすびしならん。心さへたゞしければ、遊女とてもくるしかるまじ。
滝沢馬琴 『椿説弓張月・拾遺』	文化 7 年（1810）	為朝はなほ、再三再四推辞給へども、その事脱がたければ、已ことを得ず、赤縄の繋る所に任し給ふ程に、夫婦の契浅からで、分てる鏡を合する如し。
『花街鑑』 巻上・第 2 章	文政 5 年（1822）	これ正に赤縄の奇縁をむすぶの時いたれるかな。
『俳風柳多留』66 編 24 丁	文化 11 年（1814）	やかましい姑引ッ切赤ィなわ
『俳風柳多留』71 編 17 丁	文政 2 年（1819）	しやくつても子が切させぬ赤ィ縄
『俳風柳多留』99 編 119 丁	文政 11 年（1828）	赤縄の蜘手にかゝるいゝ娘
『俳風柳多留』119 編 19 丁	天保 3 年（1832）	赤縄ハ出雲で神のこま結び
『俳風柳多留』123 編 71 丁	天保 4 年（1833）	さて解ぬのハ赤縄のこぐらかり
『俳風柳多留』133 編 5 丁	天保 5 年（1834）	枕並べて赤縄を鯛結び
『俳風柳多留』144 編 1 丁	天保 7 年（1836）	御婚礼赤縄繋ぐ鯛が来る
『新編柳多留』33 編 26 丁	不明	蛇と結ぶ赤縄蟹が挟み切り
『狂句梅柳』5 編 38 丁	天保 2 年（1831）	黄色でも切れぬ出雲の赤ひ縄
『狂句梅柳』18 編 35 丁	天保 2 年（1831）	赤縄を結ぶとツイハ解がたし
服部誠一 『東京新繁盛記』	明治 7 年～9 年 （1874～1876）	赤縄誤り結ぶ余輩の悪縁、死せずんば又何をか為さん。
木下新三郎 『仇結奇の赤縄　西洋娘	明治 20 年（1887）	如何なる悪魔があるとても、二人を繋ぐ赤縄を、断ちきることのあるべきや

節用』		
森鴎外 『北条霞亭』69	大正 6/7～9 年	霞亭の足は将に赤縄子の纏るを免れざらむとしてゐる。

第二節、橋本誠一の話

前述したように、太宰治は中学校三年（大正 14 年）の時、教師の橋本誠一から「赤い糸」の話を聞いたようである。小野正文の証言は、太宰治が「赤い糸」の話に触れたルートと時間の判断材料としては、重要な記録だと言えるが、橋本誠一が生徒たちに言い聞かせた話の内容については、「目に見えない赤い糸の話」としか述べていないので、橋本誠一の話の内容を推測するには、太宰治の作品に目を向けるしかない。次に、太宰作品における限られた手がかりによって、橋本誠一の話の内容、ひいてはその話の典拠について検討してみたい。

橋本誠一の話には身分の格差または、それによる家族の反対を表現する箇所があったと推測される。

「思い出」には、「私はこの話をはじめて聞いたときには、かなり興奮して、うちへ帰つてからもすぐ弟に物語つてやつたほどであつた」とある。一般的に、「赤縄」に関する話を聞いて、その赤い縄を不思議に思い、ロマンチックに感じるのは自然なことであろうが、「かなり興奮」し、「すぐ弟に物語つてやつた」という太宰治の反応はなにか特別な理由があることが推測される。それでは何故、太宰はこの話にここまで強くひきつけられたのか。たとえば私たちは歌を聞く時、その歌詞の内容が自分の心境または経験と一致すると、その歌に深い興味を覚える。同じように橋本誠一の話のある部分が太宰治の心境と重なって、彼の心を引き寄せたのではないだろうか。「思い出」には、冒頭の引用した部分のすぐ後につぎのような表現が現れる。

> 「私たちはその夜も、波の音や、かもめの声に耳傾けつつ、その話をした。お前のワイフは今ごろどうしてるべなあ、と弟に聞いたら、弟は桟橋のらんかんを二三度両手でゆりうごかしてから、庭あるゐてる、ときまり悪げに言つた。大きい庭下駄をはゐて、団扇をもつて、月見草を眺めてゐる少女は、いかにも弟と似つかわしく思われた。私のを語る番であつたが、私は真暗い海に眼をやつたまま、赤い帯しめての、と

だけ言つて口を噤んだ。海峡を渡つて来る連絡船が、大きい宿屋みたいにたくさんの部屋部屋へ黄色いあかりをともして、ゆらゆらと水平線から浮んで出た。

これだけ弟にもかくしてゐた。私がそのとしの夏休みに故郷へ帰つたら、浴衣に赤い帯をしめたあたらしい小柄な小間使が、乱暴な動作で私の洋服を脱がせて呉れたのだ。みよと言つた。[72]

ここに出てくる小間使の「みよ」のモデルは宮越トキという津島家の女中である。「成長するにつれ、自ら恋に目ざめていき、実家の女中宮越トキに恋情を感じ」[73]という渡部芳紀の指摘が示唆に富むと思われる。

太宰治と宮越トキとの関係について、山内祥史作成の年譜では次のように書かれている。

宮越トキは大正十四年（宮越トキは十四歳で、太宰治は十七歳）十月ごろ、行儀見習を兼ね、長兄文治夫妻の小間使いとして、津島家に住み込んだ。当時津島家には、北川トキという同名の女中がいたため、姓の一字をとって、「みや」「みやこ」と呼ばれた。丸顔で目の大きい清楚な感じのトキは、女中仲間でも特に目立つ存在であったという。トキが来てから、冬休み、夏休みなどで家に帰ると、すぐ「みやこはゐないか」と呼びつけ、勉強の間も側に居させるようなことがあったという。トキも、いつとはなしに、秀才といわれる彼に特別の関心を示すようになっていった[74]。

翌年の大正十五年の秋、週末を利用して、帰省中、宮越トキに、一緒に家出し、東京で生活しないかと、相談を持ちかけたという。だが、「身分が違いすぎる」と考えた宮越トキは、やがて長兄文治に「奉公を止めたい」と訴え、彼が冬休みで帰省する前に、津島家を去った[75]。

青森県下有数の大地主の六男でありながら、女中と恋仲になった場合、周りからの批判や、親兄弟から反対の声が出るのは想像に難くないであろう。17 歳の太宰治は女中の宮越ト

---

[72] 『太宰治全集』第 2 巻　筑摩書房　1998 年 5 月　51 頁。

[73] 渡部芳紀『太宰治　心の王者』　洋々社　1984 年 5 月　30 頁。

[74] 『太宰治全集』第 13 巻　筑摩書房　1999 年 5 月　477 頁。

[75] 『太宰治全集』第 13 巻　筑摩書房　1999 年 5 月　480 頁。

キに恋を感じた瞬間、頭をよぎったのは地主の息子と女中という身分の格差を問題視した長兄文治（父の逝去した大正 12 年から家督に継いだ）の口から出る反対意見であろう。そのような時に、「身分が違っても、家族が反対しても、赤い糸で一たび結ばれたら、必ず夫婦になる」というような話を聞いたとしたら、宮越との身分の格差を憂慮している者としては一筋の希望を感じて、興奮するに至るのではないか。つまり、橋本誠一の話に身分の格差または、それによる家族の反対を表現する箇所があったと推測される。

また、橋本誠一の話において、糸が結ばれる時期は「生まれた時」である。

太宰治の「未発表資料」として、中学校時代の日記の大正 15 年 1 月 26 日の条に、次のような一節が見える。

先生の話「生まれた時に、もはや既に足にヒモが結ばれている」。

余、誰？[76]

大正 14 年 4 月から大正 15 年 4 月までは、太宰治は青森中学校に三年生として在学していた時期である。小野正文の証言によると、橋本誠一の話を聞いたのは太宰治の三年生の時であるから、この日記は橋本誠一の話を聞いた直後のものであろう。日記における「先生」は言うまでもなく、橋本誠一である。「余、誰？」は、自分が一体誰と赤い糸で結ばれているのかという疑問である。太宰治は橋本誠一の話を借りて、自分の心境を述べているのである。

「思い出」において、「赤い糸」が結ばれる時期が描かれていないが、この日記において、ヒモが結ばれる時期は「生まれた時」に設定されているから、橋本誠一の話において、結ばれる時期は「生まれた時」と設定されていたのはほぼ間違いないと思われる。

ちなみに、「思い出」における「赤い糸」に対して、この日記に出てくるのは「ヒモ」である。おそらく、橋本誠一の話には「赤い糸」が出てきたのであろう。太宰治は「思い出」において、そのまま踏襲したが、日記において、「赤い」を省略し、「糸」を意味合いの近い「ヒモ」に改変したと推測される。

以上のことをまとめると、橋本誠一の話に、身分の格差または、それを問題視する家族の反対を表現する箇所があったと推測され、結ばれる時期は「生まれた時」と設定されて

---

[76] 『太宰治全集』第 1 巻　筑摩書房　1999 年 2 月　485 頁。

いたと考えられる。この二つの条件を手がかりとして、橋本誠一の話の典拠を探ってみよう。

前記の附表 1（本論文 63～65 頁）を参照すると分かるように、「赤縄」という語の用例は日本の文学作品に散見する。しかし、そのほとんどには、「赤縄」という言葉、または「月下老は赤縄で男女の足を結ぶ」という要素しか現れておらず、「赤縄」に関する具体的な描写が見られないため、橋本誠一の話との関連が希薄であるという感が否めない。そこで「赤縄」に関する具体的な描写の見られる文献に目を向けてみたい。

青木鷺水の「宿世の縁」

赤縄説話が現れた日本の作品中でもっとも古いとされる「宿世の縁」では、結ばれる部位は明記されておらず、結ばれる時に男が書生で、女が十四五歳だから、明らかに生まれる時ではない。また、身分の格差または、それによる家族の反対を表現する箇所は見られない。

柳沢淇園の「ひとりね」と『円機活法』

赤縄説話の日本語訳の嚆矢とされる「ひとりね」において、「此縄一たび結びぬれば、たとへかたきどふしの家、或は国を隔て、いか成遠き人なりとても、夫婦に成こと疑ひなし」という赤縄に関する表現が見られる。これは底本の『円機活法』における「雖仇家異域此縄一繫終不可易」（たとえ仇のある家に生まれても、異なる域に居ても、この縄で一たび結ばれたら、もう易えることはできない（拙訳））という部分を訳出したものであろう。結ばれる時期については、両作とも明記していないが、先に述べたように、二歳ばかりの女の子が主人公の韋固と結ばれているという設定から、ほぼ生まれた時から結ばれていると理解していいが、『円機活法』にも「ひとりね」にも、身分の格差または、それによる家族の反対を表現する箇所は現れない。

『書言故事大全』

『書言故事大全』では、赤縄について「雖讐敵之家。呉楚異郷富貴懸隔（懸隔、言相隔遠）此縄一繫。終不可逭。」（たとえ敵同士の家に生まれても、呉と楚のような遠く異郷にいようとも、貧富が隔たっていたとしても、この縄で一たび結ばれたら、もう逃れることはできない（拙訳））と表現されている。身分の格差を表現する「富貴懸隔」（貧富が隔た

っていたとしても）が見えるが、赤縄を結ぶ時期は明記していない。

『故事成語考』

『故事成語考』において、赤縄に関する描写は次のようである。「雖讐敵之家呉楚異地貴賤懸隔此縄一繋終不可違」（たとえ敵同士の家に生まれても、呉と楚のような遠く異郷にいようとも、身分が隔たっていたとしても、この縄で一たび結ばれたら、もう背くことはできない（拙訳））。身分の格差を表現する「貴賤懸隔」（身分が隔たっていたとしても）が見ええる。また、赤縄の結ばれる時期については、明記されていないが、三歳ばかりの女の子が主人公の韋固と結ばれているという設定から、ほぼ生まれた時から結ばれていると理解していい。つまり、『故事成語考』が先に挙げた二つの条件を満たしていると言えるであろう。

「定婚店」

「定婚店」において、「及其生、則潜相繋。雖讐敵之家、貴賤懸隔、天涯従宦、呉楚異郷、此縄一繋、終不可逭」（人が生まれると、こっそりと結びつけるのだが、たとえ敵同士の家に生まれても、身分が隔たっていたとしても、地の果てに赴任していたとしても、呉と楚のような遠く異郷にいようとも、この縄で一たび結ばれたら、もう逃れることはできない）というように、赤縄を描いている。

身分の格差を表現する箇所としては「貴賤懸隔」（身分が隔たっていたとしても）が見える一方、結ばれる時期は「及其生、則潜相繋」（人が生まれると、こっそりと結びつける）と明記されている。これも上記の二つの条件を満たしている。

沖縄の赤縄説話

一方、沖縄の赤縄説話における「赤い糸」については、結ばれる時期は「生まれる時」と書いてあり、「いくら親兄弟が反対しても結ばれるものは結ばれる」という家族の反対を表現する箇所もあるので、先に挙げた二つの条件を満たしている。よって、橋本誠一の話の典拠は『故事成語考』、「定婚店」と沖縄の赤縄説話の何れかであるのはほぼ間違いないと思われる。

橋本誠一の話の典拠は一体どちらか、という疑問を解き明かす決め手は「思い出」における次の箇所にあると思われる。

私たちはその夜も、波の音や、かもめの声に耳傾けつつ、その話をした。お前のワイフは今ごろどうしてるべなあ、と弟に聞いたら、弟は桟橋のらんかんを二三度両手でゆりうごかしてから、庭あるゐてる、ときまり悪げに言つた。大きい庭下駄をはゐて、団扇をもつて、月見草を眺めてゐる少女は、いかにも弟と似つかわしく思われた。私のを語る番であつたが、私は真暗い海に眼をやつたまま、赤い帯しめての、とだけ言つて口を噤んだ。海峡を渡つて来る連絡船が、大きい宿屋みたいにたくさんの部屋部屋へ黄色いあかりをともして、ゆらゆらと水平線から浮んで出た。[77]

太宰治は教室で橋本誠一から「赤い糸」の話を聞いてから、すぐ弟に言い聞かせた。後の或る時期に、二人がこの共通の話題について話し合っていると設定されており、二人の話はある意味では、橋本誠一の話の延長線上にあるはずであろう。「お前のワイフは今ごろどうしてる」とか「庭あるゐてる」とか「団扇をもつて、月見草を眺めてゐる」とかいう表現から見ると、橋本誠一の話におけるヒロインは赤ん坊ではないと考えられる。

『故事成語考』と「定婚店」のヒロインはそれぞれ三歳と二歳、何れも行動できない赤ん坊であるのに対して、沖縄の赤縄説話におけるヒロインは「薪をもって歩いている」少女であるので、橋本誠一の話の典拠は『故事成語考』または「定婚店」であるより、沖縄の赤縄説話である可能性の方が高いと言えよう。逆に、橋本誠一の話の典拠が『故事成語考』または「定婚店」であったとしたら、そこに出てくる「月老」または「天下の婚姻を掌る冥界の役人（月下老人の前身）」については、語り手の橋本誠一でも聞き手の太宰治でも見逃さないはずであろう。結局、「思い出」に「月老」も「冥界の役人」も見られないのは、橋本誠一の話の典拠が『故事成語考』でもないし「定婚店」でもないことを傍証していると考えられる。

また、沖縄の赤縄説話における主人公は「学問に励む青年」と設定されている。中学時代の太宰治と対照してみよう。

「衆にすぐれていなければいけないのだ、という脅迫めいた考え」から、太宰は勉学に励んだ。その結果、学業成績は優秀で、第一学年の第二学期からは級長に任ぜられ、

---

[77] 『太宰治全集』第 2 巻　筑摩書房　1998 年 5 月　51 頁。

以降在学中ずっと級長をつとめている。第四学年を終了したときの成績は及第百四十八名中の第四席であり、四年終了で弘前高等学校の入学試験に合格したのだから、まずは天晴れの秀才ぶりと言えよう。[78]

それまで、ずっと「勉強家」や「秀才」と言われていた中学三年の太宰治は沖縄の赤縄説話におけるこの「学問に励む青年」を自分の分身と考えて、興奮した可能性もあるであろう。

一方、『日本昔話通観』（第 26 巻）によると、この沖縄の赤縄説話が最初、雑誌『昔話：研究と資料』（昔話研究懇話会編）第 7 号に収録されたのは 1978 年だったようである。太宰治が橋本誠一から「赤い糸」の話を聞いたのは大正 14 年なので、本に出された沖縄の赤縄説話を読んだのは時間的には不可能である。本に収録されるかどうかに関わらず、その説話が伝わっているのは言うまでもない。橋本誠一は何らかのルートを通して、沖縄の赤縄説話に触れて、青森地方であまり広まっていなかった新しい話として生徒に言い聞かせたのではないか。説話が口から口へ語り伝えられる過程において、いささかの変化が生じるのはありふれた現象であるから、橋本誠一の話は先に挙げた沖縄の赤縄説話とまったく同じとは限らない。けれども、話の骨子となる要素は変化しないであろう。例えば、この赤縄説話における「赤い糸」や結ばれる時期である「生まれる時」は誰が語っても変わらないであろう。

太宰治の「思い出」と沖縄の赤縄説話を対照させて、他の共通点を探ってみよう。

①男女を結ぶのは「赤縄」ではなく、「赤い糸」である。これは「思い出」と沖縄の赤縄説話にしか見られない。

②ほとんどの赤縄説話において、結ぶ部位は足首かそれとも足の指か、言明せずに「足」としか表現していない。それに対して、沖縄の赤縄説話における「足の指先」と、「思い出」における「右足の小指」はもっとも近いと言わざるを得ないであろう。ただ、沖縄の赤縄説話においては、右足かそれとも左足か、及びどの指かを示していない。「右足の小指」に決めたのは太宰治の案出であろう。

③ヒロインの身なりに関する描写では、沖縄の赤縄説話に「みすぼらしい着物をつけた」とあるのに対して、「思い出」において、「大きい庭下駄をはゐて」いるとか、「赤い帯し

[78] 野原一夫『太宰治　生涯と文学』筑摩書房　1998 年 5 月　37 頁。

めて」いるとかいった表現が見られる。他の赤縄説話にはヒロインの身なりに関する描写はまったくない。

つまり、橋本誠一の話の典拠は「定婚店」に拠ったのではなく、沖縄で伝わる赤縄説話であると思われる。恋に目覚めた太宰治はこの話を聞いて、運命の象徴である「赤い糸」の不思議さを感じながら、自分の分身である「学問に励む青年」という人物設定、及び自分の心境と重なる「いくら親兄弟が反対しても結ばれるものは結ばれる」という点に心を動かされて興奮し、記憶に留めたのではないか。

第三節、上田秋成の「吉備津の釜」

「思い出」において、「私はこの話をはじめて聞いたときには、かなり興奮して、うちへ帰つてからもすぐ弟に物語つてやつたほどであつた」という表現がある。「はじめて」という言葉から、太宰治は「思い出」の執筆までに、この赤縄説話に触れたのは一回だけではないと推知できるだろう。換言すれば、太宰治は「赤い糸」の話に、橋本誠一の語る沖縄の赤縄説話以外においても接した可能性があると言える。

古田島洋介の指摘したように、安永 5 年（1776）に刊行された上田秋成の『雨月物語』巻三・「吉備津の釜」に、「既に聘礼を納めしうへ、かの赤縄に繋ぎては、仇ある家、異なる域なりとも易ふべからずと、聞くものを…」という表現が見られる。周知のように、「思い出」と同じ時期に成立した「魚服記」は、「雨月物語」の「夢応の鯉魚」にヒントを得て書かれたものである。太宰治は短文「魚服記に就いて」の中で

> 魚服記といふのは支那の古い書物にをさめられてゐる短い物語の題ださうです。それを日本の上田秋成が翻訳して、題も「夢応の鯉魚」を改め、「雨月物語」巻の二に収録しました。私は切ない生活をしてゐた期間にこの雨月物語をよみました…」[79]

と説明をしている。太宰治は「魚服記」の創作に先立って、『雨月物語』を読んだのは事実であろうが、どの本文で読んだのか、つまりこの「魚服記について」で言及した「雨月物語」はどの本であるか、先行研究では、言及されていない。

---

[79] 『太宰治全集』　第 11 巻　筑摩書房　1999 年 3 月　5 頁。

「魚服記」の題名はおそらく鈴木敏也の『雨月物語新釈』[80]または『新注雨月物語評釈』[81]を読んで、「夢応の鯉魚」の原典である『古今説海』の「魚服記」の題名をそのまま踏襲したものであろう、というような山内祥史[82]の指摘が示唆に富むと思われる。『新注雨月物語評釈』は『雨月物語新釈』の再版である。両作は内容においてほぼ変わらないので、太宰治はどちらに拠ったかを特定するのが難しいが、手元にある『新注雨月物語評釈』を参照しながら、考察を進めたい。

『新注雨月物語評釈』第二編第二章第二節の「説話の先蹤」において、「支那小説『古今説海』第九巻に見える魚服記の翻案である」（78 頁）と記され、『古今説海』の「魚服記」の原文の一部分が載っている。太宰治はここから「魚服記」という題目を得たであろう。

「魚服記について」で言及した「雨月物語」は上田秋成の原著ではなく、鈴木敏也の『新注雨月物語評釈』（または『雨月物語新釈』）だったら、太宰治は「吉備津の釜」における「既に聘礼を納めしうへ、かの赤縄に繋ぎては、仇ある家、異なる域なりとも易ふべからずと、聞くものを…」という所を読んだのではないか。注意すべきなのは鈴木敏也の『新注雨月物語評釈』（または『雨月物語新釈』）において、「吉備津の釜」における「赤縄」の「語釈」に次のように記載されている。

唐韋固旅次宋城、遇老人向月検書。因問嚢中赤縄、云繋夫婦之足、雖仇家異域、此縄一繋、終不可易。（幽怪録、書言故事）[83]

唐代の韋固という人は宋城へ旅に出る時、月に向かって本を読んでいるおじいさんに出会った。おじいさんの持っている嚢の中にある赤い縄について、韋固は聞くと、「夫婦になるべき男女の足を結ぶ。たとえ仇のある家に生まれても、異なる域に居ても、この縄で一たび結ばれたら、もう易えることはできない」とおじいさんは言った。（『幽怪録』、『書言故事大全』）（拙訳）

「赤縄」の出典は李復言の作『続玄怪録』（『続幽怪録』）である。『幽怪録』（唐の牛増

---

[80] 歴史名著新釈第一編　冨山房　1916 年 1 月。

[81] 精文館書店　1929 年 7 月。

[82] 『太宰治全集』第 1 巻　1989 年 6 月　464 頁。

[83] 267 頁。

儒の作）は別の本であり、鈴木敏也は「赤縄」の出典を『幽怪録』としているのは誤りであろう。

また、「吉備津の釜」における「赤縄」の出典、或いは上田秋成の参照した底本は『書言故事大全』だと鈴木敏也が指摘している。しかし、『円機活法』における「雖仇家異域此縄一繫終不可易。（たとえ仇のある家に生まれても、異なる域に居ても、この縄で一たび結ばれたら、もう易えることはできない）という赤縄に関する描写と、上田秋成の「仇ある家、異なる域なりとも易ふべからず」とを対照して見ると、『円機活法』における「仇」・「家」・「異」・「域」・「易」などの漢字をそのまま踏襲している点で、明らかに上田秋成の「赤縄」は『円機活法』から得たものと思われる。逆に、『書言故事大全』における「赤縄」に関する表現は次のとおりである。

雖讐敵之家。呉楚異郷富貴懸隔此縄一繫。終不可逭。

たとえ敵同士の家に生まれても、呉と楚のような遠く異郷にいようとも、貧富が隔たっていたとしても、この縄で一たび結ばれたら、もう逃れることはできない。

上田秋成の表現と対比してみると、意味合いは両作において似ているが、上田秋成の表現はいっそう簡略に見える一方、両作において、漢字の影響はまったく見られない。つまり、鈴木敏也が上田秋成の「赤縄」の典拠は『書言故事大全』だとするのも誤りではないか。

太宰治が「雨月物語」を読んだ時期については、弘前高校に在学中（昭和 2 年から昭和 5 年まで）に江戸文学に親しんだと言われているから、この時期であると鳥居邦朗[84]が主張している。つまり、太宰治は昭和 2 年から昭和 5 年までの期間中に「雨月物語」を読んだはずである。また、今官一によると、「魚服記」の原型である「金魚繚乱」は昭和 6 年 2 月に脱稿した[85]という。すなわち、太宰治は「雨月物語」を読んだ時期は遅くても昭和 6 年 2 月までであろう。

一方、「思い出」は昭和 7 年 8 月に書き始めたとされる。「雨月物語」を読んだ時期は明らかに「思い出」の執筆以前である。太宰治が橋本誠一の話の次に「赤い糸」の話に触れ

---

[84] 「水のモチーフ－「魚服記」を視座として」　『国文学解釈と教材の研究』第 24 巻第 9 号　1979 年 9 月 12 頁。

[85] 『太宰治全集』第 1 巻　1989 年 6 月　463 頁。

たのは、鈴木敏也の『新注雨月物語評釈』（または『雨月物語新釈』）ではないか。

まとめ

赤縄説話は唐代の李復言の作『続玄怪録』における「定婚店」に源を発し、「灌園嬰女」などの類話を加えて、人々に知られてきた。宋代に入って以来、「月下老」（「定婚店」における「幽吏」）とともに、「赤縄」という表現は中国の文化の中に定着した。同時に文学表現として各時代の作品に登場するようになった。日本において、江戸時代に和本で刊行された『書言故事大全』、『故事成語考』、『円機活法』によって、中国の赤縄説話が当時の文人たちに知られてきた。それを受容した青木鷺水の「宿世の縁」や柳沢淇園の「ひとりね」などの作品が現れ、また上田秋成の「吉備津の釜」に出てくる「赤縄」のような、「赤縄」という語の用例が江戸時代の文学作品に散見するようになった。一方、中国の赤縄故事を受容した説話は離島の沖縄にも伝わっている。橋本は何らかのルートを通してこの沖縄の赤縄説話に触れ、青森地方ではあまり広まっていなかったので、授業中に太宰ら生徒たちに言い聞かせた。太宰はそれを聞いて、「学問に励む青年」という主人公と自分を重ね合わせ、「いくら親兄弟が反対しても結ばれるものは結ばれる」という点を自身の励みとして、記憶に留めたのであろう。そして弘前高校在学中に、鈴木敏也の『新注雨月物語評釈』（または『雨月物語新釈』）を読んだとき、「吉備津の釜」の「語釈」で再びこの話に触れ、後の昭和 7 年 8 月に、この話をモチーフにして「思い出」に取り入れたと考えられる。

一方、太宰の「作家の手帖」（『文庫』　昭和 18 年 10 月）における「この夜は、牽牛星と織女星が、一年にいちどの逢う瀬をたのしむ夜だった筈ではないか。」[86]という七夕の夜に関する表現は中国の七夕説話[87]を髣髴させるのであろう。また、太宰の随筆「革財布」

---

[86] 『太宰治全集』第 6 巻　筑摩書房　1989 年 2 月　204 頁。

[87] 天の河の東に、天帝の娘である織女が住んでいた。織女は機を織ることを仕事としていた。絶えず仕事に追われているので、髪をつくろったり、面貌をととのえたりする暇もなかつた。天帝はそれを憐れみ、天の河の西に住んでいる牽牛といふ男と結婚させることにした。彼女は、結婚生活の楽しさに、酔ってしまって、機を織ることなどまるで忘れ果てたようになった。これを見ると天帝は怒って、天の河の東に帰してしまった。毎年七月七日に一度だけ、牽牛に会うことを許す。しかしあいにくその頃に雨が降りつづいて、天の河の水量が増すと、七月七日という日が来ても、二人は会うことが出来ない。そ

（『日本医科大学（角書）殉公団時報』　昭和 19 年 1 月 25 日）に中国の蕉鹿説話（本論文 149 頁）が見られる。太宰とこれらの中国説話との関わりについては今後の研究に期したい。

の悲しさを見かねて、鳥鵲が天の河を渡す橋となって、織女を東の岸から西の岸へと渡してやる。　松元竹二『支那・朝鮮・台湾神話伝説集』（誠文堂　1934 年 4 月）を参照した。

第四章、太宰治と寒山拾得

はじめに

寒山は中国唐代の隠者で、詩人である。確実な伝記は不明であるが、寒山の詩の語るところでは、農家の生まれだったが本を読んでばかりいて、村人にも妻にも疎まれ、家を飛び出して放浪の末に天台山に隠棲した。既成の詩壇からも仏教界からもはみ出した孤高な隠者として三百余首の詩を残した。閭丘胤の「寒山子詩集序」によると、「時に国清寺に往く。寺に拾得という人があり、食堂で働いて、常に残ったご飯とおかずを竹筒に蓄える。寒山が来たら、それを背負っていく。寒山は長い廊下をゆっくり歩いて、快活に叫喚しながら独言独笑する。時に僧は彼を捕まえ、罵ったり打ったりして追い払おうとする時に、寒山は立ち止まって掌を合わせてげらげら大笑いする（中略）樺の皮を冠として被って、破れ衣を着て、下駄を履いている」[88]という風狂的な風体の人である。

拾得は寒山伝説がふくらむ過程で付け加えられたものである。豊干禅師が道端で拾ってきたものだから、「拾得」と名づけられた。寒山に飲食を提供するほど親しい友人である「天台山国清禅寺三隠集記」に「拾得が床を掃いている時に、住職は「お名前は何ですか、どこの生まれですか」と聞くと、拾得は箒を捨てて、手を組んで立つだけ、住職にはその意味が分からない」[89]という記述が見られる。また、「寒山子詩集序」によると、閭丘胤は地方の長官として、国清寺にいる寒山拾得を訪ねる時、竈の前で火に向かって大いに笑っている二人は閭丘胤に礼拝されると、かれを大声で怒鳴ったあと、手を相握ってげらげら笑いながら寺を出たようである。そして、寒山は文殊菩薩、拾得は普賢菩薩の化身と見られる。

彼らの詩は独自の悟りと幽邃な景色とを重ね合わせた格調高いもののほかに、現世の愚劣さと堕落した偽僧侶を痛罵したものもある。九世紀から禅僧の間で愛好され、これに擬した詩を作ることも流行した。一方、二人の奇矯な風狂ぶりは画題としてもよく取り上げられている。

本論文では、芸術作品（絵画と文学作品）に登場する寒山拾得像を便宜的に整理するた

---

[88] 項楚『寒山詩注』　中華書局　2000 年 3 月　931 頁　原漢文。

[89] 項楚『寒山詩注』　中華書局　2000 年 3 月　945 頁　原漢文。

めに、それらを大まかに二種類に分けることにする。一つは曽我蕭白の「寒山拾得図」をはじめとして、寒山と拾得を怪異に造形したものである。異形のような、グロテスクな肉体描写が特徴である。「グロテスクな寒山拾得像」と呼ぶ。もう一つは「寒山子詩集序」や「天台山国清禅寺三隠集記」などの伝記に基づいて、寒山と拾得の風狂ぶりを表現するものである。例えば森鴎外の「寒山拾得」における寒山拾得像はそれである。本論文ではこれらを「一般的な寒山拾得像」と呼ぶ。

一方、講談社から刊行された『水墨美術大系』第 4 巻に収録されている作者未詳の「寒山拾得図」（図④、本論文 99 頁）では、寒山拾得を美少年の姿に描いている。寒山は巻物を、拾得は箒を持っている。二人とも広い額と精細な毛髪を有して、裸足でちゃんとした服を着ている。普通にみられる寒山拾得の図柄とはやや趣を異にすると言わざるを得ない。このような、一定の特異性を有するが、グロテスクな肉体描写は見られないものも、本論文で「一般的な寒山拾得像」に入れることにする。

「服装について」は昭和 16 年 2 月に『文芸春秋』に刊行されたもので、当時の太宰治の実生活を彷彿させる私小説である。貧しい生活を送っている主人公の「私」は自身の服装に対する態度、および自身の持っている限られた服装を諧謔を混ぜながら述べることを通して、服装をもって人を判断するという世俗を批判したものである。主人公の服装に対する態度を表す、つぎの様な表現が見られる。

> 寒山拾得の如く、あまり非凡な格好をして人の神経を混乱させ圧倒するのも悪いことであるから、私は、なるべくならば普通の服装をしていたいのである。[90]

寒山拾得の具体的な格好を何の描写も加えずに、「人の神経を混乱させ圧倒する」としか表現されていない。この寒山拾得像は一般的な寒山拾得像とグロテスクな寒山拾得像のどちらに属するか、及び太宰はどこから取り入れたかは、太宰の世界観や素材の使い方に関わっているが、先行研究にはまったく論じられていないので、この問題について考察してみたい。

---

[90] 『太宰治全集』第 5 巻　筑摩書房　1998 年 8 月　151 頁。

第一節、　寒山詩[91]

昭和 10 年 10 月に刊行された太宰治の随筆「もの思う葦（その一）」の一節「塵中の人」において、次のような表現がみられる。

寒山詩は読んだが、お経のようで面白くなかった。なかに一句あり。

悠悠たる塵中の人、

常に塵中の趣を楽しむ。

「悠悠たる」は嘘だと思うが、「塵中の人」は考えさせられた。[92]

まず、太宰治の読んだ寒山詩の版本について、考察してみたい。寒山詩は非常に複雑な詩風を有する。中でも「痴属根本業、無明煩悩阬。輪廻幾何劫、祇為造迷盲。（愚痴は根本の業因による、恐るべし無明煩悩のあな。輪廻そも幾劫、ただ迷妄の業による。）」[93]というような、仏法を説いたところにその特徴があるから、太宰治は「お経のようで」という評価を出したのではないか。また、項楚が『寒山詩注』で指摘したように、寒山詩は白話詩に属する。つまり、「猪喫死人肉、人喫死猪腸。猪不嫌人臭、人返道猪香。（ぶたは死人の肉を食い、人は死にたるぶたの腸を食う。ぶたは人の臭きをいとわず、人はぶた肉の香ばしきをいう）」[94]というような口語や俗語が混じっている詩が多いので、太宰治は一定の漢文力を有しても、訳注に頼らざるを得ないと思われる。

筆者の調査した限り、「塵中の人」が刊行された昭和 10 年 11 月まで、訳注の寒山詩は、釈清潭注釈の『寒山詩新釈』[95]、井土霊山訳の『ポケット寒山詩』[96]毛利湛然注釈の『寒山詩評釈』[97]と太田悌蔵訳注の『寒山詩』[98]などが挙げられる。

---

[91] 寒山と豊干・拾得の詩を併載しているので、「三隠集」または「三隠詩集」とも呼ばれる。

[92] 『太宰治全集』第 11 巻　筑摩書房　1999 年 3 月　16 頁。

[93] 延原大川『平訳寒山詩』　明徳出版社　1961 年 10 月　179 頁。

[94] 延原大川『平訳寒山詩』　明徳出版社　1961 年 10 月　61 頁。

[95] 国光社　1907 年 10 月。

[96] 二松堂　1911 年 4 月。

[97] 禅世界社　1917 年 1 月。

[98] 岩波書店　1934 年 10 月。

太宰治の「塵中の人」を読んでみると、題目を入れたら、「塵中の人」という表現は三回に亘り出てくる所が注目すべきであろう。上記の各書におけるこの詩句は次のようである。

釈清潭『寒山詩新釈』:「悠悠塵裏人、常楽塵中趣。」(245 頁)
井土霊山『ポケット寒山詩』:「悠々たる塵裡の人、常に塵中の趣を楽しむ。」(263 頁)
毛利湛然『寒山詩評釈』:「悠々塵裡人、常楽塵中趣。」(351 頁)
太田悌蔵『寒山詩』:「悠悠たる塵中の人、常に塵中の趣を楽しむ。」(258 頁)

釈清潭『寒山詩新釈』、井土霊山『ポケット寒山詩』や毛利湛然『寒山詩評釈』の何れにも「塵中の人」ではなく「塵裏(裡)の人」と記されている。また、項楚『寒山詩注』にも「悠悠塵裏人、常楽塵中趣」[99]と書かれている。ここにおける「塵裏」と「塵中」は同じ意味で、世間を指すであろう。周知のように、中国の古詩に言葉遣いの重複を避けるという傾向があるため、後ろの「塵中趣」における「塵中」との重複を避けるため、「塵中人」ではなく、「塵裏人」にされたと思われる。それに対して、太田悌蔵訳注の『寒山詩』に、「悠悠たる塵中の人、常に塵中の趣を楽しむ」と訳されており、「塵中」という言葉の重複があるので、誤記の可能性が高いであろう。太宰治も太田悌蔵の訳文と全く同じで、「塵中の人」と表現しているのは太田悌蔵訳注の『寒山詩』を読んで、太田悌蔵の誤記をそのまま踏襲したためであろう。つまり、太宰治はどちらを読んだかと言えば、太田悌蔵訳注の『寒山詩』だと思われる。

太宰治は太田悌蔵訳注の『寒山詩』から影響を受けたかどうかは本論の目的ではなくて、今後の課題に譲ることにする。

太宰治の「服装について」における寒山拾得像を考察するに先立って、先行する芸術作品に現われる寒山拾得像について述べておきたい。

第二節、　絵画―寒山拾得図

寒山拾得の風狂ぶりが画題として描かれるようになるのは宋代以降で、禅僧や文人たち

[99] 項楚『寒山詩注』　中華書局　2000 年 3 月　931 頁。

によってである。日本でも鑑賞絵画として作られた。箒、筆、巻物などを手にした、弊衣蓬髪で、草履または裸足の二人が笑っている様子を、単幅または双幅に分けて描かれている。筆者の調査によって次のような寒山拾得の絵＝寒山拾得図が見られる。昭和 48 年 3 月から昭和 52 年 7 月にかけて、講談社から刊行された『水墨美術大系』に拠って、まとめて見たい。

伝牧谿「寒山拾得豊干図」（3 巻　1973 年 5 月　26 頁）―（**図①**、本論文 99 頁）

寒山は寒山詩中の有名な一首「吾心似秋月」の一節を岩壁にかきつけ、墨をする拾得と、髭をひねる豊干がそれを凝視している。箒が地面に捨てれている。二人とも弊衣蓬髪で寒山は靴を履いているが、拾得は裸足である。一般的な寒山拾得像である。

因陀羅「寒山拾得図」（4 巻　1975 年 2 月　32 頁）―（**図②**、本論文 99 頁）

蓬髪の二人が木の下に座り、向かい合って笑っている。寒山と拾得を見分けることができないが、一人の裸足が見える。一般的なものであろう。

伝因陀羅「寒山拾得図」（双幅）（4 巻　1975 年 2 月　133 頁）―（**図③**、本論文 99 頁）

寒山は左手に芭蕉の葉を、右手に筆を持って笑っている。拾得は巻物を持って笑っている。二人とも蓬髪で、寒山は裸足で拾得は靴を履いている。これも一般的な寒山拾得像であろう。

作者未詳「寒山拾得図」（双幅）（4 巻　1975 年 2 月　121 頁）―（**図④**、本論文 99 頁）

普通にみられる寒山拾得の図柄とはやや趣を異にして、二人を美少年の姿に描いている。寒山は巻物を、拾得は箒を持っている。二人とも広い額と精細な毛髪を有して、裸足でちゃんとした服を着ている。破れ衣もグロテスクな肉体描写も見られないから、一般的な寒山拾得像に入れる。

梁楷「寒山拾得図」（4 巻　1975 年 2 月　74 頁）―（**図⑤**、本論文 99 頁）

口と目で笑っている寒山と拾得を描いたものである。二人が前後に重なっている。手前の寒山は掌を合わせて、弊衣蓬髪で裸足である。後の拾得は蓬髪と笑顔しか見えない。二人の口は異常に大きいが、グロテスクとまでは言えない。

可翁「寒山拾得図」（双幅）（5 巻　1974 年 11 月　96 頁）―（**図⑥**、本論文 99 頁）

寒山は巻物を開きながら、薄気味悪い顔つきをしている一方、拾得は箒を側に立てたままで、掌を合わせながら前方を凝視している。二人とも弊衣蓬髪であるが、寒山は下駄を、拾得は草履を履いている。二人の目つきはややグロテスクであろう。

松谿「寒山拾得図」（6 巻　1974 年 5 月　20 頁）―（**図⑦**、本論文 99 頁）

蓬髪の二人が手を相握って口を大きく開けて笑っている。寒山と拾得を見分けることができない。手前の一人は靴を履いているが、今一人は裸足である。一般的な寒山拾得像と言えるであろう。

墨谿「寒山拾得図」（双幅）（6 巻　1974 年 5 月　107 頁）―（**図⑧**、本論文 100 頁）

寒山は巻物を読みながら笑っている一方、拾得は右手に行灯を下げ、左手で上へ指差しながら笑っている。グロテスクな肉体描写が見えないから、一般的なものであろう。

啓孫「寒山拾得図」（双幅）（6 巻　1974 年 5 月　137 頁）―（**図⑨**、本論文 100 頁）

寒山は右手で前へ指差して笑っている一方、拾得は箒を地面に捨てたまま、両手を合わせて笑っている。二人とも弊衣蓬髪で靴を履いている。これも一般的な寒山拾得像である。

狩野山雪「寒山拾得図」（8 巻　1974 年 1 月　145 頁）―（**図⑩**、本論文 100 頁）

寒山と拾得の二人の上半身を大きく表わすものである。二人を前後に重ね描かれている。前の寒山は爪の長い両手で巻物を開きながら、口を大きく開けて笑っている一方、半顔を見せる後の拾得は爪の長い左手と怪しい笑顔しか見られない。二人ともきちんと服を着ている。グロテスクなものである。

長谷川等伯「豊干寒山拾得図」（双幅）（9 巻　1973 年 7 月　95 頁）―（**図⑪**、本論文 100 頁）

寒山は巻物を持ち、余所見しながら笑っている一方、拾得は箒を地面に置いたまま、掌を合わせて笑っている。寒山は靴を履いているのに対して拾得は裸足である。二人ともきちんと服を着ている。一般的なものである。

海北友松「寒山拾得図」（9 巻　1973 年 7 月　　121 頁）―（**図⑫**、本論文 101 頁）

寒山は巻物を開き、読んでいるところ、背後から箒を手にした拾得は覗き込んでいる。木の下に立つ二人とも靴を履いている一方、口を開けて笑っている。二人ともきちんと服を着ている。これも一般的な寒山拾得像であろう。

曽我蕭白「寒山拾得図屏風」[100]（双幅）―（**図⑬**、本論文 100 頁）

寒山は巻物と瓢と燭台を傍の岩に置いたままで足を交差して坐りながら怪異な表情で笑っている。一方、拾得は箒と大笠と竹筒を担ぎながら笑っている。二人とも弊衣蓬髪である。寒山は裸足で、拾得は草履を履いている。

岩に草や苔が稠密に生えて、瀧や飛沫や霧や月などの環境が豊富に描かれている一方、突出した眼球と長く鋭い手足の爪などの誇張した肉体描写も見られる。全体的に怪異さに富んでいる。これもグロテスクなものである。

曽我蕭白「寒山拾得図」（双幅）（14 巻　1973 年 9 月　118 頁）―（**図⑭**、本論文 102 頁）

「拾得図」部分では、拾得は左手で箒を持ち、腕に竹筒を提げている一方、右手は前へ指差している。足元に落葉が舞い落ちている中に立っている。濃墨で隈取した墨色の衣服は肘までしか蔽えないほどぼろぼろしている。頭上の真ん中には禿げ、周りには蓬髪が生えている。横に向いている顔には突出した眼球や耳元や鼻先や顎が見える一方、鼻先や耳元や手足の関節部に毛が生えている。手足の爪は獣の爪のように長く鋭く伸びている。

「寒山図」部分では、寒山は左手で岩に支え、右手で巻物を上に高く挙げながら、頭の上と足元に落葉が漂い落ちている中に、足を交差して坐っている一方、怪しい目つきでこちらに向きながら、舌と上の歯（下の歯は見えない）が見えるほど口を大きく開けて笑っている。淡墨で描かれているので白く見えるが、髪はぼさぼさして、衣服は腕と脛が露出するほどぼろぼろしている。怪物のような凹凸の激しい顔をしている一方、手足の爪も異常に長く鋭い。

曽我蕭白「寒山拾得図」はグロテスクな寒山拾得像の代表的なものであると思われる。

---

[100] 『新編名宝日本の美術』第 27 巻　小学館　1991 年 12 月　66 頁。

第三節、日本の文学作品における寒山拾得像

太宰治の「服装について」に先立って、坪内逍遥・森鴎外・芥川龍之介・井伏鱒二がそれぞれ「寒山拾得」という題目の作品を創作している。それぞれについて簡単に確認しておきたい。

一、坪内逍遥の「寒山拾得」

坪内逍遥の「寒山拾得」は明治 44 年 5 月に発表された舞踊劇である。「雪舟（または元信）の筆意」という副題が付いている。寒山拾得の風狂的な生活ぶりへの表現を通じて雪舟（または元信）の画いた寒山拾得図の趣を解明することが逍遥の意図である。

立方の格好は「二人とも鼠がかりたる服に古びたる墨染めの腰衣、一人は巻き物を、一人は箒を携へてゐる」[101]というようなものである。一般的な寒山拾得像を如実に表現したものだと思われる。

二、森鴎外の「寒山拾得」

森鴎外の「寒山拾得」は大正 5 年 1 月、『新小説』に刊行されたもので、閭丘胤の「寒山子詩集序」に基づいて翻案した短篇小説である。閭丘胤の官僚的なやり方と、菩薩の化身である寒山と拾得をただの狂人と見続けてきた道翹をはじめとする僧たちの、立派な人を見分けられない馬鹿馬鹿しさを風刺したものである。寒山拾得の格好について、「一人は髪の二三寸伸びた頭を剥き出して、足には草履を穿いてゐる。今一人は木の皮で編んだ帽を被つて、足には木履を穿いてゐる」[102]というような一般的な寒山拾得像が表現されている。

三、芥川龍之介の「寒山拾得」

芥川龍之介の「寒山拾得」は「東洋の秋」の草稿の一部である。師匠の漱石の元から帰る途中、乗った電車の窓から、歩いている寒山拾得を見たという設定である。寒山拾得については、「二人とも、同じやうな襤褸〻〻の着物を着てゐた。しかも髪も髭ものび放題

---

[101]『逍遥選集』第 3 巻　第一書房　1977 年 6 月　349 頁。

[102]『鴎外全集』第 16 巻　岩波書店　1973 年 2 月　250 頁。

で、如何にも古怪な顔つきをしてゐた。（中略）その二人の男は、箒をかついで、巻物を持つて、大雅の画からでも抜け出したやうに、のつそりかんと歩いてゐた」[103]と描写している。一般的な寒山拾得像であろう。

四、芥川龍之介の「東洋の秋」

また、大正 9 年 4 月に『改造』に掲載された芥川龍之介の「東洋の秋」にも寒山拾得が登場した。主人公が日比谷公園を散歩する時、落ち葉を掃除する寒山拾得を見たという設定である。寒山拾得に関する描写は「二人の男が、静かに竹箒を動かしながら、路上の明るく散り乱れた篠懸の落葉を掃いてゐる。その鳥の巣のやうな髪と云ひ、殆ど肌も蔽はない薄墨色の破れ衣と云ひ、或はまた獣にも紛ひさうな手足の爪の長さと云ひ」[104]というようなものである。グロテスクな寒山拾得像と言えるだろう。

芥川龍之介の「寒山拾得」に「その二人の男は、箒をかついで、巻物を持つて、大雅の画からでも抜け出したやうに、のつそりかんと歩いてゐた」という表現が見られる。ここに出てくる「大雅の画」は言うまでもなく、池大雅の「寒山拾得図」を指しているが、池大雅の画譜に依れば、「寒山拾得図」という題目の絵は四幅ある。落款によって区分しながら図柄を確認しておきたい。

①「九霞指墨」という落款が付いている「寒山拾得図」（**図⑮**、本論文 101 頁）[105]において、二人とも地面にうつ伏せになっている。こちらに向いている寒山は書物を読んでいる一方、拾得は箒を後に置いたままで、背を向いている。

②「九霞山樵写」という落款が付いている「寒山拾得図」（**図⑯**、本論文 101 頁）[106]において、背を向いている寒山は両手に巻物を広げ読んでいる一方、こちらに向いている拾得は箒を後に置いたままで、目を閉じながら聞いている。

---

[103]『芥川龍之介全集』第 21 巻　岩波書店　1997 年 11 月　265 頁。

[104]『芥川龍之介全集』第 6 巻　岩波書店　1996 年 4 月　17 頁。

[105]『池大雅画譜』第 5 帙　中央公論美術出版　1959 年 5 月　29－34。

[106]『池大雅画譜』第 3 帙　中央公論美術出版　1958 年 4 月　16－7。

③「丹霞禅師之句」という落款が付いている「寒山拾得図」（図⑰、本論文 101 頁）[107]において、稚さの抜けきらない二人が相依って何かを窺っている。

④「霞樵写意」という落款が付いている「寒山拾得図」（図⑱、本論文 101 頁）[108]において、二人は前後に重ね描かれている。前の一人が枝を持って微笑んでいる一方、後の一人が前方を凝視している。

上記の四幅の「寒山拾得図」と芥川龍之介の「寒山拾得」における描写を対照してみると、似ている所はない。一方、池大雅の「寒山拾得図」は何れも輪郭しか見えないスケッチなので、芥川龍之介はそれに基づいて、創作するのは不自然と言わざるを得ない。また、「大雅の画からでも抜け出したやうに」という表現における「でも」という言葉からも、芥川の「寒山拾得」における描写が必ずしも池大雅の絵に拠ったとは限らないということがわかるであろう。一般的な寒山拾得像として、芥川の「寒山拾得」は何を参照したか、を特定するのが難しいであろう。ただし、「大雅の画からでも抜け出したやうに」という表現から、芥川龍之介は池大雅の「寒山拾得図」のほかに他の画家の「寒山拾得図」も知っていたと考えられる。

芥川龍之介の「東洋の秋」における「二人の男が、静かに竹箒を動かしながら、路上の明るく散り乱れた篠懸の落葉を掃いてゐる。その鳥の巣のやうな髪と云ひ、殆ど肌も蔽はない薄墨色の破れ衣と云ひ、或はまた獣にも紛ひさうな手足の爪の長さと云ひ」という寒山拾得像は明らかに一般的な寒山拾得像と異なって、グロテスクだと言えるだろう。寒山拾得をグロテスクに描いた「寒山拾得図」と言えば、可翁と狩野山雪の「寒山拾得図」及び曽我蕭白の二作（「寒山拾得図屏風」と「寒山拾得図」）が注意すべきであろう。

可翁の「寒山拾得図」を参照すると分かるように、そこにあるグロテスクなものは二人の目と表情だけである。しかし「東洋の秋」には寒山拾得の目と表情について表現されていない。一方、「東洋の秋」における「獣にも紛ひさうな手足の爪」は可翁の「寒山拾得図」には見られない。

狩野山雪の「寒山拾得図」において、二人ともきちんと整っている衣服を着ている。「東

---

[107]『池大雅画譜』第 1 帙　中央公論美術出版　1957 年 2 月　3－12。

[108]『池大雅画譜』第 3 帙　中央公論美術出版　1958 年 4 月　14－11。

洋の秋」における「殆ど肌も蔽はない薄墨色の破れ衣」という描写と一致しない。また、狩野山雪の「寒山拾得図」において、二人の長くて鋭い手の爪が見えるが、上半身しか描かれていないから、足の爪が見えない。これは「東洋の秋」における「獣にも紛ひさうな手足の爪の長さ」という描写と一致しないであろう。一方、狩野山雪の「寒山拾得図」では、二人とも髪の毛が長く伸びているが、「東洋の秋」における「鳥の巣」を彷彿させにくい。芥川龍之介の「東洋の秋」は狩野山雪の「寒山拾得図」との関連は希薄と言わざるを得ないであろう。

曽我蕭白「寒山拾得図屏風」において、寒山拾得とも長く鋭い手足の爪が誇張しながら描かれている一方、肘や脛や胸まで露出するほどほろぼろした衣服を着ている。それぞれ「東洋の秋」における「獣にも紛ひさうな手足の爪の長さ」や「殆ど肌も蔽はない薄墨色の破れ衣」という描写と一致する。しかし、曽我蕭白「寒山拾得図屏風」において、寒山は白い服で、拾得は灰色の服である。「東洋の秋」における「薄墨色の破れ衣」とは異なっている。また、「寒山拾得図屏風」では、二人の髪はすこし乱れて伸びているが、「東洋の秋」における「鳥の巣のやうな髪」とまでは言えない。

曽我蕭白「寒山拾得図」の「拾得図」部分では、濃墨で隈取した墨色の衣服は肘までしか蔽えないほどぼろぼろしている。頭上の真ん中には禿げ、周りには蓬髪が生えている。手足の爪は獣の爪のように長く鋭く伸びている。これは「東洋の秋」における「その鳥の巣のやうな髪と云ひ、殆ど肌も蔽はない薄墨色の破れ衣と云ひ、或はまた獣にも紛ひさうな手足の爪の長さと云ひ」と対照してみると、髪の毛にせよ、手足の爪の長さにせよ、衣服のぼろぼろさにせよ、衣服の色にせよ、何れもぴったり一致すると言えるであろう。また、拾得の足元に舞い漂っている落ち葉は「東洋の秋」における「散り乱れた篠懸の落葉」と対応しているであろう。

一方、曽我蕭白「寒山拾得図」の「寒山図」部分では、寒山は巻物を挙げ、白い服を着ているのに対して、「東洋の秋」において、二人とも箒を持ち、薄墨色の衣服を着ているという相違点が見える。何故かと言うと、芥川龍之介は「東洋の秋」を創作する前、複数（池大雅や曽我蕭白）の「寒山拾得図」を見たことがあるが、曽我蕭白の「拾得図」から受けた印象は最も強かった。後に、記憶に留まった曽我蕭白の「拾得図」に頼って「東洋の秋」を創作したのではないか。誰でも曽我蕭白の「拾得図」をいったん見たら、横に向いている顔には突出した眼球や耳元や鼻先や顎が見える一方、鼻先や耳元や手足の関節部に毛が生えており、手足の爪は獣の爪のように長く鋭く伸びているというような、グロテ

スクな肉体描写は忘れられないだろう。いずれにせよ、「東洋の秋」の創作に際して、「拾得図」における拾得像に基づいて、寒山を「箒をもち、墨色の服を着ている」というように造形したのではないか。一言で言えば、芥川龍之介の「東洋の秋」における寒山拾得像は曽我蕭白の「寒山拾得図」の「拾得図」部分に拠ったと思われる。

五、井伏鱒二の「寒山拾得」

井伏鱒二の「寒山拾得」は大正 15 年 1 月、『陣痛時代』に刊行されたものである。寒山拾得は画題として現れた。

主人公の「私」は旅行したとき、ある町に着くとそこの宿屋に暫く逗留し、その宿屋の掛け軸や襖絵を模写してから、それを次の町へ持って行って売るという旅絵師をやっている大学の級友の佐竹に会った。佐竹は既成の「神農様の絵」を「私」に見せてから、床の間の掛軸を参照しながら未完成の「寒山拾得の絵」を描き終えて、売りに出かけた。結局「神農様の絵」は売ったが、「寒山拾得の絵」は売れなかったというあらすじである。

ここにおいて「その二箇の顔は歯のぬけた口を大きくあけてげらげらと笑つてゐた。佐竹は隣の部屋の襖を開いた。なるほど隣室の床の間にかゝつてゐつ軸物は、明らかに佐竹の人物画の粉本であつて、それは寒山拾得の絵であつた。寒山先生は箒を持つて庭をはいてゐる。拾得先生は一巻の巻物を高ゝと空にさし上げて読んでゐる。そして両先生とも、頭髪を河童にしたり爪をだらしなく長く生したりしてゐて、何がをかしいのかとりとめもなく笑ひつゞけてゐるのである。そして両先生の頭の上や足元には、落葉の雨がしきりに降りそゝいでゐるのである」[109]という怪異な寒山拾得像が出てくる。ただ、寒山は巻物を、拾得は箒を持つというのは一般的な常識であるが、井伏鱒二の「寒山拾得」では、「寒山先生は箒を持つて庭をはいてゐる。拾得先生は一巻の巻物を高ゝと空にさし上げて読んでゐる」と設定されている。

井伏鱒二の「寒山拾得」における「その二箇の顔は歯のぬけた口を大きくあけてげらげらと笑つてゐた」や「寒山先生は箒を持つて庭をはいてゐる。拾得先生は一巻の巻物を高ゝと空にさし上げて読んでゐる。そして両先生とも、頭髪を河童にしたり爪をだらしなく長く生したりしてゐて、何がをかしいのかとりとめもなく笑ひつゞけてゐるのである。そして両先生の頭の上や足元には、落葉の雨がしきりに降りそゝいでゐるのである」という描

---

[109] 『井伏鱒二全集』第 1 巻　筑摩書房　1996 年 11 月　50 頁。

写と上記の「寒山拾得図」を対照しながら、井伏鱒二の参照した「寒山拾得図」を究明してみたい。

井伏鱒二の寒山拾得像はグロテスクだと言えるだろう。前記の幾つかのグロテスクな寒山拾得図を参照しながら論じて見たい。

井伏鱒二の「寒山拾得」において、寒山拾得は「歯のぬけた口を大きくあけてげらげらと笑つてゐた」のに対して、可翁の「寒山拾得図」で、二人は笑っていないどころか、厳しい顔をしているから、両作の関係は希薄であろう。

狩野雪山の「寒山拾得図」を参照して見ると分かるように、寒山と拾得の上半身しか見えない。口を大きく開けて怪しげに笑っている一方、手の爪が異常に長いという所は井伏鱒二の「口を大きくあけてげらげらと笑つてゐた」や「爪をだらしなく長く生したりしてゐて」という描写と一致する。しかし、井伏鱒二の「寒山拾得」に「歯のぬけた口」という表現が見えるが、狩野雪山の「寒山拾得図」においては、寒山のきちんと整っている歯がはっきり見える。また、狩野雪山の「寒山拾得図」では、寒山と拾得は蓬髪であるが、禿げている所はない。ここは井伏鱒二の「頭髪を河童にしたり」という描写とは一致しない。一方、井伏鱒二の「寒山拾得」には「両先生の頭の上や足元には、落葉の雨がしきりに降りそゝいでゐるのである」という表現があるのに対して、狩野雪山の「寒山拾得図」には、環境についてまったく描かれていない。井伏鱒二の参照した「寒山拾得図」は狩野雪山のそれではないと思われる。

曽我蕭白の「寒山拾得図屏風」は怪奇に富んだ寒山と拾得を造形したものである。口を開けて怪しげに笑っている一方、手の爪が長く鋭いという所は井伏鱒二の「口を大きくあけてげらげらと笑つてゐた」や「爪をだらしなく長く生したりしてゐて」という描写と似ている。しかし、井伏鱒二の「頭髪を河童にしたり」という描写と異なって、曽我蕭白の「寒山拾得図屏風」における寒山と拾得はただの蓬髪で、禿げている所は見えない。また、環境描写については、曽我蕭白の「寒山拾得図屏風」には、方解石状の岩や垂直に落ちる瀧や蕨手状の飛沫や周りに漂っている湯煙みたいな霧や朦朧な月や至るところに生えている草と苔などが見られ、二人の居る環境が豊富に描かれているが、井伏鱒二の「寒山拾得」に出てくる「落葉の雨」は見られない。

曽我蕭白の「寒山拾得図」の「寒山図」部分では、寒山は右手で巻物を上に高く挙げながら、怪しい目つきで舌と上の歯が見えるほど口を大きく開けて笑っている。これは井伏鱒二の描写する「その二箇の顔は歯のぬけた口を大きくあけてげらげらと笑つてゐた」や

「拾得先生は一巻の巻物を高ゝと空にさし上げて読んでゐる」というような図柄と似ているであろう。「寒山図」では、寒山が笑う時、舌と上の歯しか見えず、下の歯は見えないため、井伏鱒二は歯がぬけていると思い、「歯のぬけた口」と表現したのであろう。

曽我蕭白の「寒山拾得図」の「拾得図」部分における、頭上の真ん中には禿げ、周りには蓬髪が生えているという拾得の髪型は井伏鱒二の描写する「頭髪を河童にしたり」という図柄と全く同じである。他の「寒山拾得図」では頭上の真ん中は禿げ、周りには蓬髪が生えており、所謂河童にした髪型は見られない。また、曽我蕭白の「寒山拾得図」においては二人とも、異常に長く鋭い手足の爪が伸びている。これは井伏鱒二の「爪をだらしなく長く生したりしてゐて」という描写と一致するであろう。

曽我蕭白の「寒山拾得図」における環境描写については、岩や雑草が見える一方、もっとも明らかなのは寒山の頭の上や足元及び拾得の足元に舞い漂っている落ち葉である。これは井伏鱒二の「両先生の頭の上や足元には、落葉の雨がしきりに降りそゝいでゐるのである」という描写とまったく一致する。本論文における他の「寒山拾得図」にはこの舞い漂っている落ち葉はまったく見られない。井伏鱒二の「寒山拾得」と曽我蕭白の「寒山拾得図」にしか共通しない。総じていえば、井伏鱒二の「寒山拾得」における「寒山拾得の絵」は曽我蕭白の「寒山拾得図」だったのはほぼ間違いないと思われる。

一方、曽我蕭白の「寒山拾得図」において、拾得が笑わずに寒山だけが笑っているのに対して、井伏鱒二の「寒山拾得」では、二人とも笑っていることや、曽我蕭白の「寒山拾得図」において、拾得だけが河童のような髪型をしているのに対して、井伏鱒二の「寒山拾得」では、「両先生とも、頭髪を河童にしたり」していることや、曽我蕭白の「寒山拾得図」において、寒山は巻物を読まずに挙げる一方、拾得は箒を掃除せずに持つのに対して、井伏鱒二の「寒山拾得」では、「寒山先生は箒を持つて庭をはいてゐる。拾得先生は一巻の巻物を高ゝと空にさし上げて読んでゐる」と改変していることなどから、井伏鱒二は曽我蕭白の「寒山拾得図」を参照しながら「寒山拾得」を創作したのではなく、創作する前に、どこかで曽我蕭白の「寒山拾得図」を見て、「寒山拾得」の創作に至って、記憶に頼ったのではないか。でなければ、寒山は箒を、拾得は巻物を持つという常識に背く設定はしない筈であろう。

第四節、太宰治の寒山拾得像

破れ衣は一般的な寒山拾得像にもグロテスクな寒山拾得像にもほぼ共通するため、これを以て太宰の寒山拾得像が一般的なものであるか、それともグロテスクなものであるか、を判断するのは難しいので、「服装について」における「人の神経を混乱させ圧倒する」という表現や、太宰と井伏、芥川との関係や、太宰と絵画との関連などを根拠として、太宰の寒山拾得像を考察して行きたい。

一、太宰治と井伏鱒二や芥川龍之介

太宰治と井伏鱒二は師弟関係であるのは周知のことであろう。青森中学校に入学した太宰治が同人誌『世紀』に掲載されていた井伏鱒二の「幽閉」を読み、「埋もれたる無名不遇の天才を発見したと思つて興奮した」[110]のは、大正 12 年（1923 年）のことである。太宰治は井伏鱒二に実際に会うのは昭和 5 年のことである。戦後疎遠になるまで、二人の親密な師弟関係が続いていた。師としての井伏鱒二が太宰治の監督者、後見人としての役も担っていたようである。昭和 10 年 3 月、太宰の慢性パビナール中毒症による東京武蔵野病院入院、最初の妻初代の庇護、石原美知子との見合い・結婚などはすべて井伏の尽力に依ったという。太宰治は「『井伏鱒二選集』後記」において、「やがて、井伏さんの最初の短編集「夜ふけと梅の花」が新潮社から出版せられて、私はその頃もう高等学校にはひつてゐたらうか、何でも夏休みで、私は故郷の生家でそれを読み（中略）私はその短篇集を読んで感慨に堪へず、その短篇集を懐に入れて、故郷の野原の沼のほとりに出て、うなだれて徘徊し、その短篇集の中の全部の作品を、はじめから一つ一つ、反すうしてみて、何か天の啓示のやうに、本当に、何だか肉体的な実感みたいに、「大丈夫だ」といふ確信を得たのである」[111]と書いている。昭和 5 年（1930 年）4 月、新潮社から刊行された井伏鱒二の最初の短編集『夜ふけと梅の花』には「寒山拾得」が収録されている。つまり、太宰治は昭和 5 年の夏ごろ、井伏鱒二の「寒山拾得」を確実に細かく読んだということである。

一方、太宰治は芥川龍之介の文学から強い影響を受けたとされている。太宰治の年譜によれば、太宰治が 16 歳の大正 13 年ごろから芥川龍之介の小説に親しむようになり、中学校時代には芥川龍之介を意識した作品を書いていた。弘前高校在学中、昭和 2 年の芥川龍之介の自殺から強い衝撃を受け、生活の基本的なありようが一変したとみられる。それ以

---

[110] 「『井伏鱒二選集』後記」　『太宰治全集』第 11 巻　筑摩書房　1999 年 3 月　409 頁。

[111] 『太宰治全集』第 11 巻　筑摩書房　1999 年 3 月　411 頁。

降も、芥川龍之介の作品を愛読していたという。その自殺をきっかけに自分の人生を一変させようとするほど傾倒した芥川龍之介の作品である「東洋の秋」における寒山拾得像を、読んだことは十分考えられる。

二、太宰治と絵画

先に述べたように、井伏鱒二の「寒山拾得」と芥川龍之介の「東洋の秋」における寒山拾得像はいずれも曽我蕭白の「寒山拾得図」から取り入れたものである。太宰治がその目で「寒山拾得図」を見た可能性について述べて見たい。

太宰治と絵画との関係に関する先行研究は、花田清輝の「二十世紀における芸術家の宿命―太宰治論」[112]を始め、いくつかあるが、最も全面的な考察は、太宰の全作品を視野にいれた青木京子の「太宰治と絵画」[113]だと思われる。青木京子は「日本画の受容」、「西洋絵画の受容」や「絵画に関連する登場人物」という三つの面から、それぞれ前期・中期・後期に分けながら論じたうえで、次のような一覧表に纏めている。

太宰治が踏襲した絵画と登場人物[114]

	作品名	登場人物	洋画	日本画
	思ひ出	末の兄（塑像科）	黄色い人魚の水彩画（婦人雑誌の口絵）風景のスケツチ、水彩五枚 姉の胸像　姉の顔のスケツチ	地獄極楽の御絵掛地
	逆行（決闘）		ポスタア（束髪を結つた女のぐつたりと頬杖をつき、くるみの実ほどの大きな歯をむきだして微笑んでゐる）真紅の表紙（黒いハムマア）	
	陰火（誕生）		祖父の肖像画（けしの花の油画）	
	（紙の鶴）	画家の友人	二十号の風景画（水の澄んだ沼のほとりに、赤い屋根の洋館が建つてゐる画）	
	めくら草紙	ポンチ画		

112　『新小説』　1927 年 2 月。

113　『京都語文』第 7 号　2001 年 5 月。

114 『京都語文』　第 7 号　2011 年 5 月　248 頁～251 頁。

前期	道化の華	葉蔵（洋画）飛騨（塑像科）	ロダン（バルザツク像）ポスタアマツチ（その箱に画かれてある馬の顔）雪の景色をスケツチ海と島の景色（空と海がまつくろで、島だけが白い）あのひとの画（勲章をつけてゐる）婦長の肖像画　ポンチ画	
	葉		レニン像	木版の東海道五十三槍を持つてこの橋のうへを歩いてゐる画
	猿面冠者	洋画家（友人）		
	彼は昔の彼ならず		首の細い脚の巨大な裸婦のデツサン　石膏の胸像（てい子のむかしの胸像）	北斗七星の掛軸
	ダス・ゲマイネ	東京美術学校生（佐竹六郎）	ポンチ	
	雌に就いて		絵（五歳の娘）	
	狂言の神		ヴイナス	
	虚構の春		ピカソ、マチス	挿絵（三画伯の花鳥）
	HUMAN LOST		十字架のキリスト	
	二十世紀旗手	画家（あなた）	モオゼ　ミレエの晩鐘	
	あさましきもの	画家（友人）		
	花燭		モナ・リザ	
	富嶽百景			広重　文晁　北斎
	女生徒	画家（伊藤先生）	図画　写生　スケツチ　ガロオン	
	懶惰の歌留多		ヴイナス　モオゼ	
	春の盗賊		奇妙な獄彩色の絵	

中期	八十八夜		ヴエラスケス	
	皮膚と心	図案工	蔓バラ模様のレツテル　ポスタア	
	善蔵を思ふ	日本画家　洋画家　彫刻家		棟方志功
	俗天使		ミケランジエロ（最後の審判） ダヴインチ（ジヨコンダ）	
	美しい兄たち	三男（美術学校の塑像科）	同人雑誌（「十字架」）の表紙淡彩の小品（「苦笑に終わる」）フキヤ・コウジ（少女雑誌、少女の口絵）	
	鴎		ポンチ画	
	駆込み訴へ		ダビデ（御子の姿）	
	老ハイデルベルヒ		ペンキ絵似顔絵（映画女優）	達磨の軸物
	東京八景	すぐ上の兄（彫刻）H（洋画家）	洋画の展覧会　H（洋画家の画） バルザツク像	
	きりぎりす	夫（画家）	小さい庭と日当たりのいい縁側の画（縁側には、誰も坐つてゐないで、白い座蒲団だけが一つ置かれ、青と黄色と白だけの画）　アパートの裏庭　深夜の新宿の街　二科の画（新聞社から賞）　菊の花の絵（第一回の展覧会）	
	ある画家の母	杉野君（洋画家）	自画像　風景　静物　ルノアル（リイズ）　ゴオギヤン（タヒチの女）	
	ろまん燈籠	新之助（美術学校）		
	ア・秋			襖の絵（鷺が六羽）
	正義と微笑		ミケランジエロ　ピエタ　ダヴインチの自画像　ダヴインチ（「最後の晩餐」）　ゲエ（「最後の晩餐」） ダビデ（砦）	

	水仙	草田静子（洋画）中泉花仙（老画伯）	ドガ（競馬の画）水仙の絵（バケツに入れられた二十本程の水仙の絵）	
	花火	鶴見仙之助（洋画家）	ルノアルの画（スケツチ版） 小さい雪景色の画　二十枚程の画 描き損じの画	
	故郷		油絵（罌粟の花）　油絵（裸婦）	
	鉄面皮			絵本「源の実朝さま」
	右大臣実朝			絵合せ（朝光さま）
	花吹雪	杉田画伯（官展）		
	佳日	媒酌人（大学で東洋美術史）		
	東京だより	友人（画かき）	表紙の画（小説集）	
	津軽		エドガア・ドガ	風景画（山桜、田園の山水）金屏風（百穂の父、穂庵）綾足　地獄極楽の御絵掛地
	赤い太鼓			金蒔絵（天女の舞ふ図）
	舌切雀			図案化（雀が二羽）
	庭			建築美術
	十五年間	ベツクリン（海と海女の妖女）		
	未帰還の友に			絵図面（吉良邸）

後期	トカトントン		フランスの印象派の画　セザンヌ　モネー　ゴーギャン　ヴアン・ダイク	尾形光琳（躑燭）尾形乾山
	母			写楽（版画）
	斜陽		ローランサンの画集　モネーの霧の中の寺院の絵　ヴイナスの右手（片手の石膏像）ピエタ　ルネツサンスの頃のプロフイルの画　ユトリロ	光琳（襖）
	人間失格	堀木（画学生）	ゴツホ（自画像）印象派の画　ゴツホ　ゴーギャン　セザンヌ　ルナアル　モジリアニ（裸婦）漫画猥画　春画のコピイ	
	グッド・バイ	水原ケイ子（洋画）		

青木京子によると、太宰治作品に絵画が主題やモチーフとして踏襲されているのは、全作品の六分の一であり、登場人物などを含めると実に三割もの作品が関わっている。絵画との関係が深いと言わざるを得ないであろう。西洋画との関係はここで述べない。日本画との関連を述べて見たい。

太宰前期の日本画は仏教絵画や江戸時代のものが多い。「思い出」には津軽の雲祥寺に「地獄絵図」が見られ、「十王曼陀羅の図」に幼少時の恐怖の体験として現世の罪科の呵責に悶える姿が書き出されている。仏教絵画以外には「彼は昔の彼ならず」などに「北斗七星の掛軸」について述べられている。中期には江戸時代や明治時代の先駆的な画家の絵画が多い。「富嶽百景」には冒頭から広重、北斎についての記述が見られる。特に北斎の「富嶽百景」は、題名やモチーフに踏襲され、人間の心理の種々相が描写されている。「老ハイデルベルヒ」には「達磨の軸物」、「津軽」には穂庵の「金屏風」や「綾足」などが見られる。後期には「トカトントン」には「母」、「斜陽」には光琳、乾山、写楽などの江戸時代の画家が登場し、旧時代の隠喩や伝統的な精神性として描写されている。これらの絵画は、太宰治が兄や同郷や在京時の画家の友人から画集や美術雑誌を借用し、収集したものだと青木が指摘している。

「寒山拾得図」は太宰治の収集した画集や美術雑誌に掲載されている可能性が高いであ

ろう。一方、先に述べたように、「寒山拾得図」には幾つか存在するが、青木の指摘によると、前期にも、中期にも、後期にも太宰治と深く関わるのは江戸時代の絵画だけである。江戸時代の「寒山拾得図」といえば、狩野山雪、長谷川等伯、海北友松と曽我蕭白の二作が数えられる。狩野山雪、長谷川等伯、海北友松の「寒山拾得図」における寒山拾得は何れもきちんと服をきているため、破れ衣を強調するため寒山拾得を取り入れた「服装について」との関連は希薄だろう。太宰治の参照した可能性のあるのは曽我蕭白の「寒山拾得図」と「寒山拾得図屏風」だけである。「服装について」における「寒山拾得の如く、あまり非凡な格好をして人の神経を混乱させ圧倒するのも悪いことであるから、私は、なるべくならば普通の服装をしていたいのである。」という描写の直前に「どうせ貧寒なのだから、木枯しの中を猫背となつてわななきつつ歩いてゐるのも似つかはしいのであらうが」[115]という表現が見られる。それに対して、曽我蕭白の「寒山拾得図」の「拾得図」において、拾得は猫背になって落葉が舞い漂う中に立っている。猫背という表現が共通する一方、「拾得図」における舞漂っている落葉から「木枯し」を連想するのも自然であろう。曽我蕭白の「寒山拾得図屏風」にはこのような共通点は見られないため、太宰治は曽我蕭白の「寒山拾得図」を参照したのではないか。この「寒山拾得図」は曽我蕭白の代表作として、上記の『水墨美術大系』の他、明治 40 年 7 月、日本真美協会から刊行された田島志一編『真美大観』第 16 巻や昭和 7 年 7 月、東方書院から刊行された『日本画大成』第 15 巻に収録されている一方、昭和 9 年 5 月、文部省編集『日本国宝全集』（日本国宝全集刊行会）第 60 輯に 1196 番の国宝として掲載されている。

曽我蕭白の「寒山拾得図」は、頭上の真ん中には禿げがあり、周りには蓬髪が生えている。横に向いている顔には突出した眼球や耳元や鼻先や顎が見える一方、鼻先や耳元や手足の関節部に毛が生えている。手足の爪は獣の爪のように長く鋭く伸びている。そういうグロテスクな肉体描写に太宰は圧倒されたであろう。

まとめ

森鴎外の「寒山拾得」における「一人は髪の二三寸伸びた頭を剥き出して、足には草履を穿いてゐる。今一人は木の皮で編んだ帽を被つて、足には木履を穿いてゐる」というよ

---

[115] 『太宰治全集』第 5 巻　筑摩書房　1998 年 8 月　151 頁。

うな寒山拾得像は一風変わっていると言ってもいいけれども、「人の神経を混乱させ圧倒する」とまでは至らないであろう。それに対して、井伏鱒二の「寒山拾得」における「歯のぬけた口を大きくあけてげらげらと笑つてゐた」や「頭髪を河童にしたり爪をだらしなく長く生したりしてゐて、何がをかしいのかとりとめもなく笑ひつゞけてゐる」および芥川龍之介の「東洋の秋」における「鳥の巣のやうな髪」や「獣にも紛ひさうな手足の爪の長さ」というような格好は「人の神経を混乱させ圧倒する」には十分であろう。

太宰治が井伏鱒二の「寒山拾得」における寒山拾得像を知っているのは確実である一方、芥川龍之介の「東洋の秋」における寒山拾得像を読んだのもほぼ間違いない。この二つの寒山拾得像はいずれも曽我蕭白の「寒山拾得図」に拠って造形したグロテスクなものである。また、太宰治は江戸時代の先駆的な画家であった曽我蕭白の代表作「寒山拾得図」を直接参照した可能性も高い。いずれにせよ、「服装について」における「非凡な格好をして人の神経を混乱させ圧倒する」というような寒山拾得像は直接的に、或は井伏と芥川の作品が介在して間接的に、曽我蕭白の「寒山拾得図」に基づいて造形したグロテスクなものと言えるであろう。

一方、参照して見ると分かるように、前記の青木京子の纏めた「太宰治が踏襲した絵画と登場人物」という一覧表には曽我蕭白の「寒山拾得図」が見られない。おそらく、その一覧表は主として画家の名前や画作の名前などを手がかりとして全作品から探り出したのであろう。一方、「服装について」における寒山拾得像は曽我蕭白の「寒山拾得図」に基づいて造形したが、曽我蕭白（画家の名前）と「寒山拾得図」（画作の名前）は何れも出てこなかったので、先学に看過されたのであろう。つまり、太宰と絵画との関連については、考察する余地がまだあるのではないだろうか。

附図

図①伝牧谿「寒山拾得豊干図」

図③伝因陀羅「寒山拾得図」

図②因陀羅「寒山拾得図」

図④作者未詳「寒山拾得図」

図⑤梁楷「寒山拾得図」

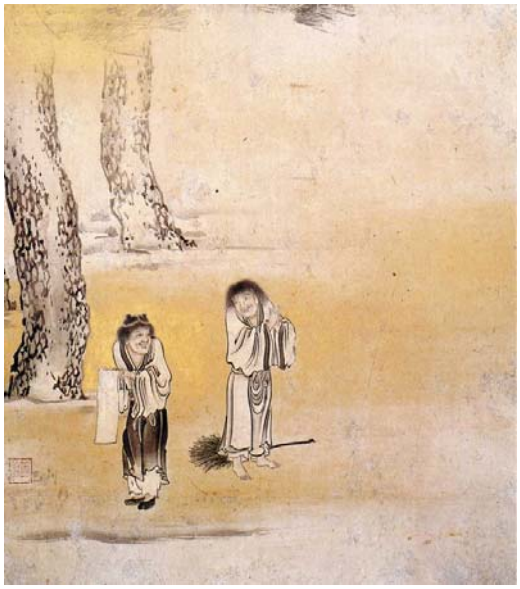
図⑥可翁「寒山拾得図」

図⑦松谿「寒山拾得図」

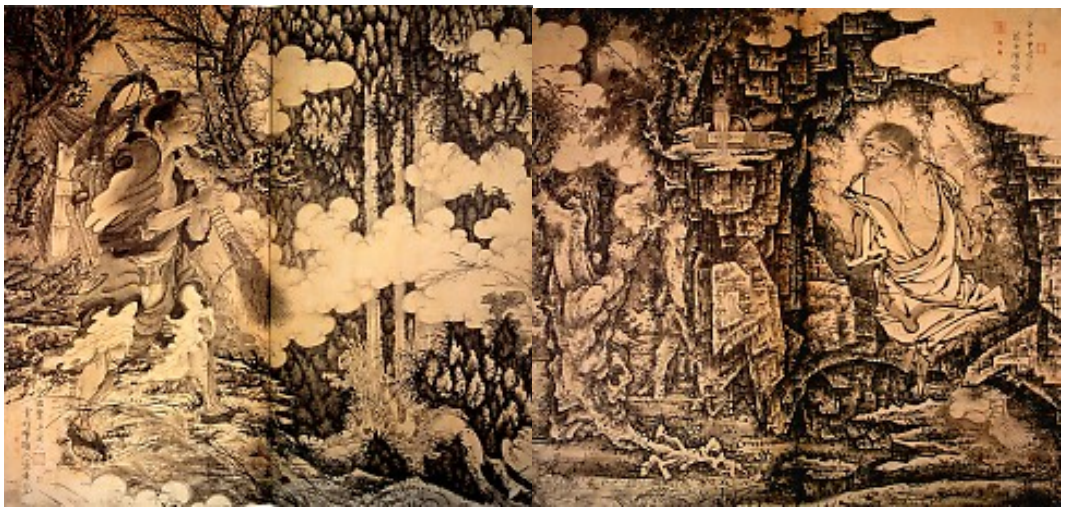
図⑧墨谿「寒山拾得図」

図⑨啓孫「寒山拾得図」

図⑩狩野山雪「寒山拾得図」



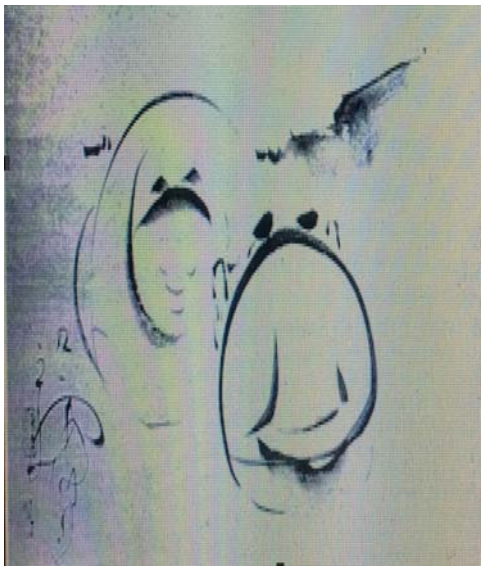
図⑪長谷川等伯「豊干寒山拾得図」



図⑬曽我蕭白「寒山拾得図屏風」

図⑫海北友松「寒山拾得図」

図⑮池大雅「寒山拾得図」
（落款：「九霞指墨」）



図⑯池大雅「寒山拾得図」
（落款：「九霞山樵写」）

図⑰池大雅「寒山拾得図」
（落款：「丹霞禅師之句」）

図⑱池大雅「寒山拾得図」
（落款：「霞樵写意」）

図⑭曽我蕭白「寒山拾得図」

第五章、太宰治の竹林七賢観

はじめに

竹林七賢とは魏晋時代に、老荘（道家）思想を尊んで、世俗を避け、自由を楽しんだ七人の隠者であり、阮籍（210～263 年）、嵇康（223～262 年）、山滔（205～283 年）、劉伶（生没年不明）、阮咸（生没年不明）、向秀（生没年不明）、王戎（237～305 年）の七人が常に竹林の下に集まり、酒を思い切り飲み、清談[116]をしたという。曹操の子であった曹丕の立てた魏王朝は、景初 3 年（239 年）、魏明帝の死去とともに、下り坂にさしかかった。明帝の死から 10 年後の正始 10 年（249 年）、魏の実力者の司馬懿は激烈な権力闘争に勝ち、実権を掌握するようになり、司馬懿の死後、長男の司馬師、次男の司馬昭が敵対勢力を抹殺し、魏王朝の簒奪を推し進めた。泰始元年（265 年）司馬昭の長男司馬炎が魏を滅ぼして西晋王朝を立てた。竹林七賢はこういう激動する時代を生きたものである。

太宰治作品では、小説「惜別」における「しかしあの竹林の名士たちだって、自分たちの生活を決して立派なものだとは思っていなかったのです。仕方が無かったのです。」[117]という表現や随筆「もの思う葦（その二）」における「竹林の七賢人も藪から出て来て、あやうく餓死をのがれん有様」[118]などの言及が見られる。では、太宰治は竹林七賢に対して、どのような認識を持っていたのか、ひいてはその竹林七賢観の由来については、先行研究では言及されていないので、この問題について考察して見たい。

第一節、太宰治の竹林七賢観

「惜別」の創作に際して、太宰が改造社版『大魯迅全集』を参照したのは事実であるた

---

[116] 中国の魏晋時代に流行した論理性を重視する談論で、清談・玄談ともいう。源は後漢末、在野の士の間で行われた人物批評（清議）に由来する。その主たる内容は抽象化類型化された人物論、三玄（「易経」、「老子」、「荘子」）に基づく形而上的言論である。老荘思想を鼓吹して清談の気風を隆盛に導いたのは何晏と王弼である。次いで登場した竹林の七賢は儒家的礼法を無視した言動を志向し、清談派の典型の一つとなっている。

[117] 『太宰治全集』第 7 巻　筑摩書房　1995 年 10 月　295 頁。

[118] 『太宰治全集』第 11 巻　筑摩書房　1999 年 3 月　29 頁。

め、「惜別」における竹林七賢に関する表現は、改造社版『大魯迅全集』第 6 巻（1937 年 7 月）における「魏晋の時代相と文学」に依拠したという松木道子（〈惜別における出典〉という一覧表の 30 項目）[119]の指摘が間違いないと思われる。しかし、魯迅の「魏晋の時代相と文学」と太宰治の「惜別」との影響関係については、松木道子は具体的に述べなかったので、次の表に示すことにする。

魯迅の「魏晋の時代相と文学」における表現	太宰治の「惜別」における表現
彼等（竹林の七賢人＝筆者）の態度は、大抵酒を飲む時には衣服をつけず、帽子もかぶらなかつたのであります。（576 頁） 彼（劉伶＝筆者）は世の中に従来規定された道理を承認しなかつたので、嘗てかやうなことがありました、或時客が彼を訪問したところ、彼は着物をきてゐなかつた。人が彼を責問しました。すると彼はその人に答へて云ひました、天地が俺の房屋だ。房屋は俺の衣服だ、君たちは何だつて俺のフンドシの中へはひつて来るのだ―と。（577 頁）	彼等は頗る行儀が悪かった。まっぱだかで大酒を飲んでいた。
若しも阮籍が自らの行為を正しいと思つてゐたなら、彼の息子を拒絶する筈はないのであります、ところが阮籍は却て自分の息子を拒絶しました、阮籍が決して彼自身の行為を尤もだとしてゐなかつたことが知られるのであります。（582 頁） これは、彼等（阮籍と嵇康＝筆者）が乱世に生きてゐたゝめ、已むを得ずして、このやうな行為に出たものであり、決して彼等の本心ではなかつたのであ	しかしあの竹林の名士たちだって、自分たちの生活を決して立派なものだとは思っていなかったのです。仕方が無かったのです。

[119] 「太宰治『惜別』における魯迅受容のあり方」　『国語国文研究と教育』第 9 号　1981 年 1 月　65 頁。

ります。（584 頁）	
何故なら魏晋時代の所謂禮教崇奉は、これは自分のために利用したので、その崇奉たるやたゞ出鱈目に崇奉したまでであります。曹操が孔融を殺し、司馬懿が嵇康を殺したごとき、みなこれは彼等が不孝と関係のあつたゝめであります。だが実は曹操や司馬懿が何ぞ嘗て著名な孝子でありましたらうや。この名目を利用して、自己に反対する者に罪を着せたといふに過ぎないのであります。かくて馬鹿正直な人間は禮教がかくの如く利用されるのを見て、禮教を冒瀆するものとして、不平の極、如何とも施す術なく、激して禮教を語らなくなり、禮教を信じなくなり、甚しきに至つては禮教に反対するといふことに変じたのであります。（581 頁）	世は滔々として礼を名目にして、自己に反対する者には出鱈目に不孝などの汚名を着せ、これを倒し、もっぱら自己の地位と富の安全を計り、馬鹿正直に礼の本来の姿を信奉している者は、この偽善者どもの礼の悪用を見て、大いに不平だが、しかし無力なので、どうにも仕様がなくて、よろしい、そんならばもう乃公は以後、礼のレの字もいうまい、という愚直の片意地が出て来て、やけくそに、逆に礼の悪口をいい出したり、まっぱだかで大酒などという乱暴な事をはじめるようになったのではないかと思うのです。
だが然し実はこれは彼等の態度に過ぎなくて、彼等の本心に至つては、恐らく却て禮教を相信ずること、恰も宝物であるが如くに考へたのである。（581 頁） 魏晋時代に、禮教を崇奉したものは、一見表面的には甚だ尤もらしく見えるが、実は禮教を破壊したものであり、禮教を信じないものでありました。表面上禮教を破壊した者は、実は却て禮教を承認したものであり、あまりに禮教を信じたものであります。（580～581 頁）	しかし、心の底で、礼教を宝物のように本当に大事にしていたのは、当時この人たちだけだったのです。当時、こんな『背徳者』のような態度でもとらない事には、礼の思想を持ちこたえる事が出来なかったのです。この時代の『道徳家』たちは表面はなはだもっともらしい上品ぶった態度をしていたが、実はかえって礼の思想を破壊しているものであり、全然、礼教を信じていなかったのです。

両作を対照してみるとわかるように、「惜別」における竹林七賢に関する描写は魯迅の

「魏晋の時代相と文学」におけるそれを集約したり、敷衍したりしたものである。

また、「惜別」に「この傾向は、もう早くからあらわれて、あの魏の頃の竹林の名士なども、この礼の思想の堕落にたえかねて竹林に逃げ込んで、やけ酒を飲んでいたのです。」[120]という表現も見える。「竹林に逃げ込んで、やけ酒を飲んでいた」というような記述は原典の魯迅の「魏晋の時代相と文学」にないので、太宰が自分の認識に基づいて加えたものであろう。つまり、「竹林に逃げ込んで、やけ酒を飲んでいた」という表現は太宰の竹林七賢観の一部と見なしていいであろう。

一方、太宰の随筆には竹林七賢への言及が次のようにある。

① むかし、支那に竹林の七賢人といつて、知ること最上、つひに竹藪の中に隠れ、日々、淫酒、手を拍つて笑ひ、さうして餓死いたした人たちがあつたさうですね。賢人も、竹藪へはひつてしまへば、それきりです。[121]（「昭和 10 年 9 月 30 日付鰭崎潤宛書簡」）

②竹林の七賢人も藪から出て来て、あやうく餓死をのがれん有様。（「もの思う葦（その二）」昭和 10 年 12 月）

これらの太宰治の言及に依拠して、彼の竹林七賢観を纏めてみたい。

㈠餓死するほど貧しい。

鰭崎潤宛書簡における「さうして餓死いたした人たちがあつたさうですね」や「もの思う葦（その二）」における「あやうく餓死をのがれん有様」という表現から、太宰の、七賢人が餓死するほど貧しいという認識があったと言えるのであろう。

㈡大酒飲みである。

鰭崎潤宛書簡における「日々、淫酒」や「惜別」における「やけ酒を飲んでいた」という表現から七賢人が大酒飲みであったという太宰の認識が伺える。

つまり、大酒飲みでありながら、貧しい生活を送っていたという竹林七賢観は浮かび上がってくる。

---

[120] 『太宰治全集』第 7 巻　筑摩書房　1995 年 10 月　295 頁。

[121] 『太宰治全集』第 12 巻　筑摩書房　1999 年 4 月　55 頁。

第二節、太宰治の竹林七賢観の一面性

では、太宰の竹林七賢への認識は事実と符合するかどうかについては、「晋書」[122]おける関連伝記や「世説新語」[123]に基づいて、考察してみたい。

隠逸（隠者、隠士、逸民、逸士、隠君子とも呼ばれる）の概念については、研究者によって違うようである。例えば、島内裕子が「「隠遁」とは、狭く仏教の僧侶の生き方を指すだけでなく、出家しなくとも俗世間を離れて、自分自身の価値観に基づいて生きる生き方である」[124]と指摘しているのに対して、小林昇は「隠逸（隠士、逸民）はもともと仕官を求めない人人、またはそれをすてさる人人を指したのである」[125]と考えている。中国で、隠逸と仕官が対照的に使われているので、本論文では、小林昇の説に従い、隠逸とは官吏になる条件を満たす人が出仕を求めないで、または仕官を離れて隠居するということである。隠逸したあと、出仕する場合もあれば、逆に、出仕を離れたあと、隠逸する場合も見られる。陶淵明のような、出仕と隠逸を繰り返した人もある。また、隠逸する場所については、山林、市井や自宅などが挙げられる。「学而優則仕」（学問をしている者は、学問が十分進んで、余力があるようになったら、はじめて出て仕えて、その学んだところを実行に移すべきだ。[126]）という儒家思想の影響により、出仕は歴代の知識人の求めているものである。それに対して、中国の隠逸の特徴は、自ら出仕を求めようとしない所にある。

隠逸は中国歴史や文化で重要な地位を占めているものである。正史と認められる「二十四史」[127]の中で「後漢書」や「晋書」から「明史」まで 14 の史書に隠逸の伝記が専ら設けられていることからも、中国歴史における隠逸の重要性が伺えるであろう。堯から天子

---

[122] 二十四史の一つ。晋代の正史である。唐の太宗の時、房玄齢らの奉勅撰。帝紀 10 巻、志 20 巻、列伝 70 巻、載紀 30 巻よりなる。

[123] 南朝宋の劉義慶の編で、後漢から東晋に至る貴族・学者・文人・僧侶などの徳行・言語・文学などに関する逸話を 38 門（または 36 門）に分類し収録した書である。

[124] 「『本朝遯史』と『扶桑隠逸伝』にみる隠遁像」　『放送大学研究年報』第 14 号　1996 年 11 月　44 頁。

[125] 『中国・日本における歴史観と隠逸思想』　早稲田大学出版部　昭和 58 年 1 月　294 頁。

[126] 『新釈漢文大系』第 1 巻『論語』　明治書院　1960 年 5 月　418 頁。

[127] 「史記」・「漢書」から「旧五代史」・「明史」に至るまでの 24 部の正史の総称。清の乾隆（1736～1795）年間、勅令によって選ばれたものである。

の位を譲られ、それを辞退した許由は中国で最も古い隠者であると見られる。以来の数千年の歴史にずっと隠逸の姿が見える。隠逸の動機は人によってそれぞれ違うが、治世には出仕するのに対して、乱世には隠逸するという儒家の保身思想の影響が甚大であると言わざるを得ない。また、漢代になると、儒教は正統思想として高められ、三網五常をはじめとする系統的礼教が形成された。中でも国家支配のイデオロギーとしての忠孝思想が支配者により確立されている。その影響をうけ、政権交代にあたり、旧王朝への忠誠を尽くすため、新王朝への出仕を固く拒否する人が隠逸に入るのはよく見られる。

竹林七賢の代表格であった阮籍と嵇康の隠逸の動機について、述べてみたい。

阮籍の隠逸の動機について、魏と晋の交替期にあたり、凄惨な事件が頻発して、名士の中で生命を全うする者が少なかったため、世事に関わらないで、大酒飲みを事とするようになった。(「属魏晋之祭、天下多故、名士少有全者、籍由是不与世事、遂酣飲為常。」[128])と「晋書」に書いてある。治世なら出仕し、乱世なら隠逸するという儒家の保身思想が彼の隠逸の主因だと思われる。

嵇康になると、山滔が吏部郎より散騎常侍に昇進する時、後任に嵇康を推挙したところ、嵇康は山滔に絶交の手紙（「与山巨源絶交書」）を出して、それを固く拒絶した。彼の隠逸の動機は、山滔への手紙であった「与山巨源絶交書」における下記の記述にあると考えられる。

> 恐足下羞庖人之独割、引屍祝以自助。
>
> 近ごろ、あなたが昇進されたことを聞き、私はびくびくして心が晴れません。というのは、（祭祀のとき）調理人が自分ひとりで犠牲を裂くのを恥じて、神主を引っぱってきて、手伝わせようとし、鸞の鈴飾りをつけた刀をさし出して、神主を血なまぐさいものでけがそうとするのと同様のことを、あなたがなさるのではないかと思うからです。[129]

山滔を、祭祀用の動物を殺したり、裂いたりする調理人に譬えている。魏の民として魏の政権を簒奪した司馬氏に協力して出仕するのは汚い事であると、司馬氏に仕えている山滔を嘲笑している。ここで嵇康の旧王朝の魏への忠誠が読めるであろう。つまり彼の隠逸

---

[128] 『晋書』第 5 冊　中華書局　1974 年 11 月　1360 頁。

[129] 『中国の古典』第 24 巻『文選下』　学習研究社　1985 年 1 月　122 頁。

の主因は儒家思想に唱えられる朝廷への忠誠を尽くすためであろう。結局、嵇康は司馬氏による晋王朝への出仕を拒絶して、司馬氏に殺されたのも彼の忠誠心の裏づけではないか。

⑴七人の貧しさに関する記述は「晋書」に見えない。一方、阮籍の務めた官職に尚書郎、参軍、大司馬従事中郎、散騎常侍、大将軍従事中郎などがある。嵇康は中散大夫を務めたことがある。阮咸は散騎侍郎を経て始平太守に就いたまま死んだ。向秀は散騎侍郎などを経て散騎常侍に就いたまま死んだ。王戎と山滔は何れも当時の最高級の官職の司徒である。劉伶も建威参軍に就いたことがある。七人は何れも官吏なので、貧しいはずはないであろう。阮籍、阮咸、向秀、王戎と山滔は何れも官職に就いたまま死んだが、嵇康は協力を拒否して司馬氏に殺された。劉伶だけが無官のまま死んだ。餓死するほど貧しいという太宰治の認識は事実とかなりずれていると言わざるを得ない。

⑵竹林の七賢人と酒との関連が深いと言わざるを得ない。なかでも劉伶は中国酒文化の象徴と見られている。彼らの酒に関わる逸話を述べてみたい。

劉伶：劉伶はアル中でひどくのどが渇き、妻に酒をくれと言った。妻は酒を棄て酒器を壊し、涙を流して言った。

「あなたはあまりにも飲み過ぎです。養生の道にはずれています。きっと禁酒してください」

劉伶は言った。「大いにけっこう。しかし、わしは自力では禁酒できない。ただ、神さまにお祈りし、誓いをたててやめるしかない。すぐに酒と肉を用意してくれ」

妻は言った。「承知いたしました」

酒と肉を神前に供え、劉伶にお祈りし誓いを立てるようにうながした。劉伶は跪いて祈って言った。「天は劉伶を生み、酒をもって名をなさしまた。ひとたび飲めば一斛。五斗は酔いざまし。女の言うことなどゆめゆめ聞くべからず」

そのまま酒を引き肉を口に入れ、もうグデングデンに酔っぱらっていた。[130]

阮籍：歩兵校尉に欠員ができた。その炊事場に数百斛の酒が貯蔵されていた。そこで阮籍は頼んで歩兵校尉になった。[131]

阮咸：阮一族はみな酒がいけた。仲容（阮咸）は親類のところにやって来て、いっしょに

---

[130] 井波律子訳『世説新語』第４巻　平凡社　2014 年５月　236 頁。

[131] 井波律子訳『世説新語』第４巻　平凡社　2014 年５月　238 頁。

集まると、ふつうの盃で飲まず、大ガメに酒を入れ、車座になって向かい合い、盛んに酌んで飲んだ。そのとき、豚の群れが酒を飲みに来たので、さっそく迎えに行って、招き入れ、そのままいっしょに酒を飲んだ。[132]

また、八斗の酒を飲まないと酔わない（「酒至八斗方酔[133]」）山滔や母親の喪に服しても酒を飲み、肉を食べる（「飲酒食肉」[134]）王戎も酒と関わっている。嵇康や向秀の飲酒に関する記述は「晋書」に見られないが、「世説新語」における「七人常集于竹林之下、肆意酣暢。（七人がいつも竹林のもとに集まり、思い切り酒を飲んで気晴らしをした。）」[135]という記述により、七人が何れも酒飲みであるのが伺える。つまり、七賢人が酒飲みだったという太宰の認識は正しいと言えるであろう。

一方、晋代の知識人と酒との関わりについて、宋代の学者葉夢徳は「晋人多く飲酒を言い、沈酔するに至る者あるも、これ未だ必ずしも意は真に酒には在らず。蓋し時まさに艱難にして、人おのおの禍いを懼る、ただ酔いに託して、以って世故（世俗）を疎遠にすべきなるのみ」[136]と指摘している。例えば、鐘会が時事に関わる問題の可否を尋ねて、その答えの如何によって罪に陥れようとしたが、阮籍は酒によって避けたという話が「晋書」に記述されている。また、魯迅も「魏晋の時代相と文学」において、「彼（阮籍＝筆者）の飲酒なるものはたゞ彼の思想に基因したばかりではなく、大半は却てその環境にあつたのであります。（中略）そこで、多く酒をのんで、少く講説するのが最善の方法であつたし、且つまた若し不都合なことを講説したとしても酔つぱらつた上といふので人が大目に見てくれます。」[137]と述べ、葉夢徳とほぼ同じ考え方を示している。しかし、それに対して、太宰治は「淫酒」（鰭崎潤宛書簡）や「やけ酒」（「惜別」）と表現していることから、竹林七賢と酒との関わり方を理解できなかったと思われる。つまり、竹林七賢が大酒を飲むのがわかるが、なぜ大酒を飲むのか分からないという、皮相的な認識に留まる。

酒との関係はともかく、貧しさについて、太宰の七賢への認識は一面的なものと言わざ

132　井波律子訳『世説新語』第４巻　平凡社　2014 年５月　249 頁。

133　『晋書』第４冊　中華書局　1974 年 11 月　1228 頁。

134　『晋書』第４冊　中華書局　1974 年 11 月　1233 頁。

135　井波律子訳『世説新語』第４巻　平凡社　2014 年５月　231 頁。

136　松枝茂夫・和田武司『中国の詩人　陶淵明』　集英社　1983 年９月　152 頁。

137　『大魯迅全集』第６巻　改造社　1937 年７月　577 頁。

るを得ないであろう。なぜ、こういう一面的な竹林七賢観を持ったのかと言えば、太宰が自身の中国的隠者観を竹林七賢に当て嵌めたのではないかと考えられる。

第三節、太宰治の中国的隠者観

一、太宰治の日本的隠者観－貧

中国では、遁世人といえば、隠者の意味であり、出家は仏門に帰依するとしている。両者が区別されている。一方、日本では、最初、大江朝網の「賦落花乱舞衣応太上法皇製詩序」[138]や菅原輔昭の「賦隔花遥勧酒応太上法皇製詩序」[139]における「遁世」のように、天皇の位を離れるという、中国の隠逸とほぼ同じ意味で使われているが、平安朝時代の後半に入り、慶滋保胤の「為二品長公主四十九日御願文」[140]における「遁世」を皮切りに、遁世が出家の同義語として用いられるようになった。遁世の意味における中国と日本のこの差異について、小林昇は「利養を捨て去るという点では出家も隠士も同じであるが、中国で遁世人といえば、隠士があげられるほど、遁世には伝統的観念が絡んでおり、出家が仏語として新たに用いられても、それによって混乱が生じなかったからなのであろう。隠士は一般に熟知されており、出家とは別のものと考えられていたからである。我が国には隠士とよばれる者が実際に存在したわけでなく、書物の上の知識から隠士を胸中に描いたのであり、出家して山林に修行することが隠士の生活に類似すると見たことが、両者に親近感を抱かせ、遁世を出家のような意義に転化させたのであろうか。」[141]と指摘している。つまり、中国では、隠逸が先に現われて、定着した後に、仏教が伝わってくるので、遁世と出家とははっきり区別されている。それに対して、日本では、隠逸への憧憬が山林を志す修行僧に投影され、修行僧が隠士のような性格を持つものと見られ、また、出家と遁世を同義語として重ねて「出家遁世」と四字一句に使われている。

---

[138] 「本朝文粋」巻 10「序丙・詩序三」: 蓋太上皇遁世之別館也。（柿村重松注『本朝文粋』　下冊　内外出版　1922 年 4 月　462 頁。）

[139] 「本朝文粋」巻 10「序丙・詩序三」: 自彼遁世揖尊。（柿村重松注『本朝文粋』　下冊　内外出版　1922 年 4 月　439 頁。）

[140] 「本朝文粋」巻 14「願文下」: 何其遁世之太疾乎。（柿村重松注『本朝文粋』　下冊　内外出版　1922 年 4 月　989 頁。）

[141] 『中国・日本における歴史観と隠逸思想』　早稲田大学出版部　昭和 58 年 1 月　351 頁。

江戸時代になると、職業に関係なく風雅風流に暮らす人が隠者と見られている。中国の隠者を、出仕を離れ、詩文に逃れた人と理解した浪人、つまり主家を失った武士が隠者と自称し、山林や市井に居て、詩歌などの文学活動に励み、貧にあって名利を離れる気風が出来た。林靖の「本朝遁史」[142]や元政の「扶桑隠逸伝」など武士による隠者の伝記が相次いで著されている。また、新しい文学気運の隆興につれて、俳人や戯作者にも隠者と自称する人が現れてきた。

一方、小林昇が指摘したように、隠者というと貧乏物語がしばしば見られる。例えば、鴨長明の「発心集」の冒頭に収録されている有名な隠者である玄賓と平等供奉の様子が次のようである。

玄賓：この舟の渡し守を見ると、髪は手でつかめるほどにのびて、薄汚い麻衣を着た法師であった。[143]

平等供奉：さて伊予の国で、彼はいつということなくふらふらとさまよい歩いて、乞食をして日を暮らしたので、この国の人々は、彼に門乞食という名を付けたのだった。（中略）とても人間の姿とは思えないほどに痩せ衰え、ぼろがひらひらしている継ぎ合わせだけを着て、まことにみすぼらしい。[144]

下線を付けた部分を読んでみると、二人の貧しさは贅言する必要はないであろう。「本朝遯史」にも、松の実を食べていた民黒人や今日一日の生計も立てられないほど非常に貧しい生活を送っていた藺笥翁が見える。また、伴蒿蹊の「近世畸人伝」（序文によると初め隠士の伝を集録する予定であったが、畸人伝にしたという）にも次のような貧乏な隠者が登場する。

---

[142] 日本で最初の隠者伝記であり、寛文 4 年 4 月に刊行され、2 巻 2 冊からなる。上巻に民黒人から橘正通まで 22 人、下巻には源顕基から善住まで 29 人、計 51 人の隠遁者の小伝が漢文でまとめられている。

[143] 『鑑賞日本古典文学』第 23 巻『中世説話集　古今著聞集・発心集・神道集』　角川書店　昭和 52 年 5 月　152～153 頁。

[144] 『鑑賞日本古典文学』第 23 巻『中世説話集　古今著聞集・発心集・神道集』　角川書店　昭和 52 年 5 月　162 頁。

桃山隠者：伏見桃山に乞丐のごとくわらむしろをもてかこひたるものして住人あり。[145]

森金吾：「終に四十近き比致仕し、故郷に帰り、只膝を容る斗の庵を結び、糟汰瓶をもたくはへず、蕎麦の粉をもて朝夕の飢を凌ぐ。」[146]

日本では、貧は隠者と密接に繋がっていると伺えるのであろう。小林昇の「貧は隠者の宿命のようである」[147]とか、杉浦明平の「日本の隠者は、精力気力不足から俗世間から落伍した連中で、貧しさが一つの看板となっていたこと、鴨長明以来すこしも変わらない」[148]とか言う判断は日本人の普遍的認識であろう。太宰は日本人として、隠者が貧しいという、小林昇や杉浦明平などと同じ認識を持っていても、何の不自然もないであろう。また、太宰の「吉野山」は井原西鶴の「万の文反古」中の「桜よし野山難儀の冬」の翻案である。しかし、原典の「桜よし野山難儀の冬」に主人公の貧しさに関する描写はないのに対して、太宰の「吉野山」に「遁世してこのようにお金がかかるものとは思いも寄らず、そんなにお金も持って来ませんでしたので、そろそろ懐中も心細くなり、何度下山を思い立ったかわかりません」[149]や「ここを立ちのくにしても、里人への諸支払いがだいぶたまって居りますし、いま借りて使っている夜具や炊事道具を返すに当ってもまた金銭のややこしい問題が起るのではなかろうかと思えば、下山の決心もにぶります。」[150]というような、主人公の貧しさに関する表現があることからも、日本の隠者が貧しいという認識を太宰が持っていたと伺えるのであろう。こういう認識に基づいて、原典になかった、主人公の貧しさに関する描写を付け加えたのではないか。

つまり、貧しい生活を送っているという日本的隠者観を太宰は持っていたのであろう。貧しい生活を送っているという竹林七賢観とは、生活状態において共通するのは偶然ではないと思われる。

---

[145] 宗政五十緒校注『近世畸人伝・続近世畸人伝』　平凡社　1976 年 3 月　123 頁。

[146] 宗政五十緒校注『近世畸人伝・続近世畸人伝』　平凡社　1976 年 3 月　138 頁。

[147] 『中国・日本における歴史観と隠逸思想』　早稲田大学出版部　昭和 58 年 1 月　371 頁。

[148]「日本の隠者、中国の隠者」　『国文学解釈と教材の研究』第 19 巻第 14 号　1974 年 12 月　74 頁～75 頁。

[149] 『太宰治全集』第 6 巻　筑摩書房　1996 年 7 月　417 頁。

[150] 『太宰治全集』第 6 巻　筑摩書房　1996 年 7 月　417～418 頁。

二、、太宰治の中国的隠者観－貧

一方、周知のように、竹林七賢は中国人である。中国の一部の隠者は、上記のような日本の隠者と共通する要素を持っていた。

● 伯夷・叔斉

上記の「鰭崎潤宛書簡」における「さうして餓死いたした人たちがあつたさうですね。」という太宰の言及は興味深い。中国で餓死した隠者と言えば、最も有名なのは伯夷と叔斉である。伯夷が兄、叔斉は弟で、孤竹という国の君主の息子であった。父の死後、お互いに君主の位を譲り合って、あとめを継がなかった。紀元前 1100 年頃、周の武王が、殷の紂王を武力によって倒そうとする時、兄弟は武王の馬を叩いて、諌めたが、受け入れられなかった。天下は周のものとなった後、伯夷叔斉は新王朝の周の粟を食うのを恥じて、首陽山に隠居し、蕨を取って命を繋いだが、やがて餓死した。

「日本近代文学館所蔵　太宰治自筆資料集」に、太宰治の中学一年時（旧制青森中学校 1923 年 4 月～1924 年 4 月）に使った漢文教科書ガイドであった岡田正之編『新定漢文読本詳解』[151]巻一が見える。つまり、太宰の中学時代に使った漢文教科書は岡田正之編『新定漢文読本』[152]である。岡田正之編『新定漢文読本』第 4 巻「伯夷・叔斉」には、次のように書いてある。

> 武王載木主、号為文王、東伐紂。伯夷・叔斉叩馬而諫曰、「父死不葬、爰及干戈。可謂孝乎。以臣弑君、可謂仁乎。」左右欲兵之。太公曰、「此義人也」。扶而去之。武王已平殷乱、天下宗周。而伯夷・叔斉恥之、不食周粟。隠於首陽山、採薇而食之（中略）遂餓死於首陽山。[153]

周王朝の粟を食べず餓死したという伯夷叔齊の言動が明記されている。二人の生活状態における「餓死」が注意すべき点であろう。

● 寒山

また、中国唐代の隠者の寒山も看過できないものである。前述した（第四章）ように、

---

[151] 東京辞書出版社　1917 年 6 月。

[152] 開成館　初版　1911 年 12 月。

[153] 岡田正之編『新定漢文読本』第 4 巻　開成館　1916 年 12 月　36 頁。

太宰は太田悌蔵訳注の『寒山詩』を読んだ。太田悌蔵訳注の『寒山詩』における閭丘胤の「寒山子詩集序」では、寒山の行状を次のように述べている。

且た状貧子の如く、形貌枯悴なり。（中略）布裘破弊、木屐地を履む。（中略）縣の界の西七十里の内に當たり一巖有り、巖中に古老より貧士有るを見る。（9～10 頁）

「貧子」や「布裘破弊」や「貧士」などの表現が寒山の貧しさを物語っていると思われる。

太宰の接触した中国隠者の伯夷、叔斉や寒山は何れも貧しい生活を送っており、偶然なことに、太宰の日本的隠者観にぴったり一致する。これはただの偶然であることを、太宰は知らず、中国の隠者も日本のそれとまったく同じで、みんな貧しい生活を送っていると誤解したのではないか。

一方、昭和 20 年 10 月、筑摩書房から刊行された太宰の「お伽草紙」中の「瘤取り」に「しかし、隠者とは言っても、かの竹林の賢者たちのように、ありあまる知識をもてあまして、竹林に逃げ込んだというようなものでは無くて、この剣山の隠者の心は甚だ愚である。」[154]という表現が見られる。竹林七賢が隠者であることを太宰は知っていると伺える。貧しい生活を送っているという隠者観をそのまま竹林七賢に当て嵌めたのであろう。

まとめ

主として貧しい生活を送っているという日本的隠者観を太宰は持っていた。また、伯夷、叔斉や寒山などの中国隠者のことも知っており、生活状態の貧において、彼の日本的隠者観と共通するため、中国の隠者も日本の隠者と同じく、みんな貧しい生活を送っているという中国的隠者観が形成されたのであろう。一方、太宰は竹林七賢が隠者であることを知っているため、自身の中国的隠者観をそのまま竹林七賢に嵌めて、事実上、貧しくない官吏なのに、餓死するほどの貧者と誤解したという、事実とかけ離れる竹林七賢観を形成したと思われる。こうした竹林七賢観から太宰が自身の認識に基づいて中国の物事（人物像）を臆断していることが覗われるのであろう。

一方、後記の附表 3（本論文 145～153 頁）を参照して見ると分かるように、伯楽や呂

---

[154] 『太宰治全集』第 7 巻　筑摩書房　1995 年 10 月　335 頁。

蒙などのような、太宰作品に登場する中国の人物がかなり多い。これらの人物に対して、太宰はどのような認識を持ったのかは、素材の生かし方や太宰の世界観に関わっているので、今後引き続き考察する余地があると思われる。

第六章、太宰治作品の漢訳

はじめに

第一章で述べたように、「竹青」と「惜別」は何れも時局に応え、大東亜共同宣言の理念を中国へ伝えようとするために書いたものである。「創作年表」の昭和 20 年 1 月の項に「小説（漢文／竹青）大東亜文学　三〇」、4 月の項に「小説（和文／竹青）文芸　三〇」とある[155]。つまり、「竹青」は『文芸』への発表に先立って、昭和 20 年 1 月、「漢訳「竹青」を、華語文芸雑誌「大東亜文学」（電報通信社刊、発行日未詳）に発表」[156]したことになっている。ところで、相馬正一は「幻の漢訳「竹青」について」において、『文芸』に発表した「竹青」の末尾における「自注。これは、創作である。支那のひとたちに読んでもらひたくて書いた。漢訳せられる筈である」という太宰治の注記を根拠として、『文芸』4 月号掲載原稿として「竹青」を編集部に届けた時点では、まだ漢訳が発表されていなかった[157]と指摘している。

一方、周海林は「日本文学報国会は「大東亜文学」第三号の原稿を太宰治にも依頼していた。彼の「惜別」は実はその依頼によって書かれたものだったようである」[158]と述べている。本論文では、「竹青」や「惜別」などの太宰治作品の漢訳について述べてみたい。

第一節、幻の漢訳

まず「竹青」と「惜別」の掲載（予定）雑誌『大東亜文学』について述べたい。

一、『大東亜文学』の成立

『大東亜文学』の成立は 1943 年 8 月に、東京で開かれた第二回大東亜文学者大会まで遡ることができる。第二回大東亜文学者大会で中国代表の陶亢徳はつぎのように発言している。

---

[155]『太宰治全集』別巻　筑摩書房　1992 年 4 月　169 頁。

[156] 山内祥史編「年譜」（桂英澄編『太宰治研究Ⅱその回想』　筑摩書房　1978 年 6 月　388 頁）。

[157] 『上越教育大学国語研究』第 4 号　1990 年 2 月　48 頁。

[158] 「日本文学報国会編集「大東亜文学」―戦時下における日中文化交流の一風景」（杉野要吉『淪陥下北京一九三七－四五―交争する中国文学と日本文学』　三元社　2000 年 6 月　375 頁）所収。

就中日華両国間の事を論じますならば、中国は事変前までの間に日本文学の紹介に就て相当の努力をした為に、日華文学は恰度影の形に添ふやうなものでありまして、お互いに相離れることの出来ない関係にありましたけれども、事変勃発以降は、それを継続する人はゐなくなつたわけでございまして、今日のやうに文化交流を唱へる真最中に在りましても、日本文学の紹介や訳述につきましては、甚だ遺憾ながら昔の盛況に及ばないのでございます。文学上非常に密接な関係を持つてゐる日本に対してさへこんな状態でありますから、東亜のその他の民族、文学に対する認識は、いかに不足してゐるかはお察しができることであらうと存じます。

これを逆に申しますれば、東亜各民族は現在の中国民族に対する認識も恐らく足らないでせうと思ふのでございます。こんなに理解の不足な各民族から同心協力東亜建設を求めるのに幾倍かの苦労を要するのも無理のないところでございませう。以上の理由を持ちまして、東亜各国間には、同様の内容を有つ東亜文学定期雑誌の発行を必要と感じまして、この動議を出しましたわけでその具体的の方法につきましては、次のやうに申し上げたいのでございます。

その名称を仮に『大東亜文学第何巻』といふふうに付けたいと存じます。それからその内容に至りましては、東亜各国間に於ける最もその国の生活、思想を能く表現したところの作品を紹介し翻訳することがこの内容でございます。それから組織を申し上げますと、東京に於きまして、総編訳所といふものを置いて、さうして東亜共栄圏内の各国が推薦いたしました傑作をそこで引請けまして、日本語にそれを翻訳して後、各国に送ることゝいたし、各国も翻訳部といふものを設けまして、その東京の総編訳部から送付の原稿を自国の文章に訳しましてこれを発行することにいたしたいと存じます。

それから最後に経費の問題でありますが、経費は各国の文芸団体が之を負担いたします。或ひはその政府の補助を受けるやうにいたしたいと存じます。以上が私の申し上げたい希望でございます。[159]

この陶亢徳の発言の後に引き続き、満洲代表の山田清三郎は

[159] 復刻版『文学報国』不二出版　1990 年 12 月　16 頁。

大東亜文学者大会もすでに二回を開催し、将来も更に続けて戴くことと存じますがこの大会の成果を大会だけのものたらしめることなく、恒常的にも之を生かしてゆきたい。かういふ意味におきまして定期刊行物といふものは絶対に必要だと存するのであります。陶先生が具体的に仰しやいましたやうに『大東亜文学』といふやうなものを発行いたしまして、広く各地各国からの優秀な作品を選択して発表し、同時に各地各国の文学運動の情況を月々集録いたしまして相互の提携と交換をなし、また傍ら親睦の促進機関とすることができれば非常に幸だと思ひます。各地各国に編纂委員会を設けまして東京に本部を置いてやつて戴きたいと思ふのであります。

この雑誌は将来更に大東亜文学者協会連盟とか、或ひは何かさういつた大東亜の文学団体の大同団結の一つの母体ともなるだらうと、我々は期待してゐる次第であります。何卒皆さんの御賛成によつて、これが速やかに発刊を実現させて戴きたいと存じます。[160]

と述べている。両氏の提案に対して、日本代表の河上徹太郎は

この問題は仰せの通り非常に大事な問題でありまして、ぜひ実現させたい、いや今まで実現されなかつたのが非常に遅かつたことを私は感じてゐる次第であります。兎もあれ、早速にこれに着手する方法としまして、私は、現在満洲国、中国にあります各文学雑誌の編輯機関が、つねに密接な関連をとること、それをいたしますれば、夫夫の傑作が相互に翻訳交換されることは非常に容易になるだらうと存じます。

現に今回見えました代表の方々でも、日本では大体文学報国会を主といたしまして、満洲国では山田清三郎さん、また北京では沈啓無先生、柳龍光先生の夫夫の雑誌、また蒙疆では石塚さん、赤塚さんの『蒙疆文学』それから上海では柳雨生君のやつてをります『風雨談』さういふやうな雑誌社の代表的な方が集つてゐますので、この会議の席上でなくても、皆さんお帰りになるまでに充分連絡の相談はできると思ひます。

これは早速の具体案でありますが、その次に特に陶先生の仰しやつたやうな本格的な各国文学の交流雑誌を発刊すること、これは非常に大事なことで、我々も充分考へてお

[160] 復刻版『文学報国』不二出版　1990 年 12 月　16 頁。

かうと思ひます。[161]

と述べ、同様の考え方を持っていたことがわかる。このように、各国文学者は『大東亜文学』創刊にほぼ一致した考えを示した。後の昭和 19 年 9 月 1 日発行の「文学報国」第 34 号において、「華文文芸雑誌『大東亜文学』創刊―堂々たる編輯内容―」の見出しで、

本会発行事業の一たる満洲、中国向華文文芸雑誌（月刊）『大東亜文学』は、大東亜文学者大会の刺戟により中国平和地区に起こりつゝある新文学運動を助成善導し、対重慶牽制の知識層工作を活発に推進するため之が最上の武器としてかねてより待望さるゝところであつたが、今や諸般の準備全く成り左の如き堂々たる内容を以て、愈々その創刊号の発刊を見るに至つた。(中略) 尚創刊号は十月初旬現地に於て発売されるが、次号（十一月号）の内容も既に整へられてゐる、発行所は電報通信社。[162]

というような『大東亜文学』の創刊に関する記事が見える。

二、『大東亜文学』の内容

次に、その内容を確認して見たい。

第 1 号（昭和 19 年 11 月 1 日印刷／昭和 19 年 11 月 1 日発行／発行所・日本電報通信社）

「発刊の辞」中村武羅夫

小説と紀行文：「旅人」佐藤春夫

「本朝名笛傳」白井喬二

「在上海」冨澤有為男

随筆：「光琳与宗達」武者小路実篤

「周作人先生論」一戸務

「昭南所見」井伏鱒二

論文：「中日文芸談」増田渉

「依学界而樹立的日華提携」石田幹之助

---

[161] 復刻版『文学報国』不二出版　1990 年 12 月　16 頁。

[162] 復刻版『文学報国』不二出版　1990 年 12 月　91 頁。

「対於岡倉天心的回憶」浅野晃

紹介：「於中国内地探検的書籍」稲垣史生

「文芸短訊・拉雑談」、「書評」常関堂

「編輯後記」編輯室

第 2 号（昭和 19 年 11 月 25 日印刷／昭和 19 年 12 月 1 日発行／発行所・日本電報通信社）

小説：「冷凍人体」井伏鱒二

「不動心」土師清二

詩歌：「旗・大兵」蔵原伸二郎

随筆：「中臣祓」上司小剣

「嘗遊地」佐藤春夫

「仰光新秋」小田嶽夫

「日本庭園」小寺駿吉

「唐詩雑抄」小杉放庵

「大東亜音楽之世界的優秀性」田辺尚雄

「文学与道徳」山本健吉

「表現在近代日本文学上的日本的伝統」塩田良平

論文：「儒林外史之日本訳完成」常関堂

「文芸家拉雑談・文芸短訊」常関堂

「編輯後記」編輯室

上記の目次を参照して見ると分かるように、太宰治の「竹青」と「惜別」はいずれも見られない。一方、第 3 号以降の『大東亜文学』は中国においても、日本においても見つからないので、「竹青」と「惜別」の漢訳はまだ不明のままである。相馬正一の話を借りて言えば、何れも「幻の漢訳」作品である。

では、太宰治の作品は何時から、誰に、中国語に翻訳されたか、という問題が沸いてくるであろう。これについて考察して見たい。

第二節、実際の漢訳

管見に入ったかぎり、1942 年 1 月発行の雑誌『訳叢』（第 3 巻第 1 期）に、章克標（周囲の批判から家族と自身を守るため、許竹園という偽名を用いた）による太宰の「きりぎりす」の漢訳である「蟋蟀」（附図、本論文 131 頁）が掲載されている。この「蟋蟀」は太宰治作品の漢訳の嚆矢だと思われる。

一、雑誌『訳叢』

『訳叢』は、南京中日文化協会（1940 年 7 月創立）の機関紙として 1941 年 2 月に創刊され 1944 年 6 月に停刊。編訳及び発行は中日文化協会訳叢月刊編訳委員会、発売は上海中華日報館と中央書報発行所。「総編訳」すなわち編集長は九州大学卒の広東人郭秀峰で、毎号の内容はその大半が『改造』『日本評論』等日本の雑誌からの翻訳転載である。翻訳文学作品の初出は明記されていないが、その多くがやはり同時期の総合雑誌、文芸雑誌から選ばれている。[163]

二、訳者の章克標

生い立ち

章克標（1900 年—2007 年）は作家、日本文学翻訳家で、浙江海寧に生まれ、1918 年、来日、東亜高等予備学校で日本語を勉強した後、翌年の四月、官費留学生として東京高等師範学校数学科に入学した。1926 年 6 月、中国に帰り、国立暨南大学を始め、幾つかの学校を転転して、教鞭を取った。1927 年、騰固らの同人と、獅吼社を結成し、『獅吼』、『金屋月刊』などの雑誌を創刊した。雑誌の編集をしながら、文学創作に携わる、所謂兼業作家として活躍した。日中戦争中、汪兆銘による偽国民政府の宣伝部に勤めたので、後に問題視されてきた。1943 年 8 月、中国代表として第二回大東亜文学者大会に参加して、翻訳機関の設置を次のように提案した。

> 文学の交流といふものは、実際問題として一面必要なのはお互いの文芸作品一般刊行物の翻訳であると私は信じます。翻訳がなければ、外国の作品も何も解ることができない。ところが、今日中国の文学界について申し上げますと、中国において日文訳者の人

---

[163] 大澤理子「“淪陥期”上海における日中文学の“交流”史試論—章克標と『現代日本小説選集』—太平出版印刷公司・太平書局出版目録（単行本）」 『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第 9 号 2006 年 4 月 75 頁に拠った。

数が非常に少ない。訳すべき作品は余に多くて少ない人数をもつてそれに当たるのはちょつと私は難しいと思ひます。事変前は日本文の訳者は、凡そ百人位ゐました。が今はせいぐ十人位であります。その十分の一の人数をもつては以前のやうに工作を実行することはとても難しい。それであるから、成るべく一番必要なもの、一番有効なるものを訳さなければならない。つまり訳すべきものにたいする選択といふことが一つの大事な事項になつてしまつたのであります。

で、中国にとつて、例えば日本のものを訳しようと思えば、その出版物を一く手に入れて読まなければなりません。それを読んで、中国にとつて一番必要なるものを選択してそれを訳すのです。それだけの仕事にしても大変なことでございます。しかもまた訳するに当つて人数が少ないんですから、成るべく重複のないやうに―例えば北京で訳したものを上海でもう一遍訳することはそれは不経済なんですから―しなければなりません。

今のやうな状態においては、私は翻訳者協会とか、或は委員会とかいふやうなものを各地区に設けて、さうして一番適当な本を選び出して訳者に委託して訳すべきだと思ひます。かやうな翻訳者委員会とかいふものを作つて、その仕事を担任させて頂ければ必ずや今よりももつと効果ある仕事ができると私は思ひます。

別に具体案はないのでございますが、私の意見はこれだけでございます。また同様の問題について古丁さんから、いゝ御意見があると思ひますから、私はこれで…。[164]

作品に「文壇登龍術」をはじめ、「銀蛇」、「恋愛四象」、「蜃楼」などが数えられる。作風は谷崎潤一郎の耽美主義から多大な影響を受けたようである。特筆すべきなのは、日本からの帰国後まもなく日中戦争末期にかけて、多数の日本の文学作品を翻訳したことである。以下に章克標の訳した日本の文学作品を挙げておく。

章克標の訳した日本の文学作品

武者小路実篤「愛欲」－『愛欲』　上海金屋書店　1928 年（1929 年再版）

（初出『東方雑誌』第 23 巻第 14 号～17 号　1926 年 7 月～9 月）

---

[164] 復刻版『文学報国』不二出版　1990 年 12 月　16 頁。

芥川龍之介「藪の中」－「藪中」(『芥川龍之介集』　上海開明書店　1927 年（1929 年再版)）

片岡鉄兵「立志」－「立志」(『東方雑誌』第 26 巻第 22 号　1929 年 11 月）

「ある結末」－「一個結局」(『小説月報』第 21 巻第 2 号　1930 年 2 月）

横光利一「蛾はどこにでもゐる」－「到処有的蛾」(『東方雑誌』第 26 巻第 24 号　1929 年 12 月）

「春は馬車に乗つて」－「春天坐了馬車」(『小説月報』第 21 巻第 3 号　1930 年 3 月）

『谷崎潤一郎集』上海開明書店　1929 年 1 月

「刺青」－「刺青」

「麒麟」－「麒麟」

「悪魔」－「悪魔」（初出『東方雑誌』第 25 巻第 19 号　1928 年 10 月）

「続悪魔」－「続悪魔」

「富美子の足」－「富美子的脚」（訳者　夏衍）

「二人の稚児」－「二沙弥」

『殺艶』上海水沫書店　1930 年 3 月

「お艶殺し」－「殺艶」

「蘿洞先生」－「羅洞先生」

『富美子的脚』(「富美子の足」）三通書局　1941 年 1 月

『人面瘡』(「人面疽」）三通書局　1941 年

『悪魔』(「悪魔」）三通書局　1941 年

『菊池寛集』上海開明書店　1929 年（1930 年再版）

「藤十郎の恋」－「藤十郎之恋」

「若杉裁判長」－「若杉裁判長」

「身投げ救助業」－「投水救助業」

「羽衣」－「羽衣」）

「島原心中」－「島原心中」

「世評」－「公論」

「貞操」－「貞操」

「恋愛病患者」－「恋愛病患者」

「兄の場合」－「兄的場合」

『夏目漱石集』上海開明書店　1932 年 7 月

「坊っちゃん」－「哥児」（初出『小説月報』第 21 巻第 7 号～9 号　1930 年 7 月～9 月）

「倫敦塔」－「伦敦塔」（初出『金屋月刊』第 1 巻第 4 号　1929 年）

「高浜虚子著『鶏頭』序」－「鶏頭序」

『日本戯曲集』上海中華書局　1934 年

山本有三「同志の人々」－「同志」

中村吉蔵「星亨」－「星亨」

久米正雄「阿武隈心中」－「阿武隈心中」

小山内薫「第一の世界」－「第一的世界」

久保田万太郎「短夜」－「短夜」

岡本綺堂「修禅寺物語」－「修禅寺物語」

『北条民雄小説集－癩院受胎及其他五編』太平書局　1942 年 11 月

「いのちの初夜」－「生命的初夜」

「間木老人」－「間木老人」

「癩院受胎」－「癩院受胎」

「癩家族」－「癩家族」

「癩院記録」－「癩院雑記」

『現代日本小説選集』第 1 集　太平書局　1943 年 8 月

横光利一「秘色」－「秘色」

丹羽文雄「開かぬ門」－「不開的門」

葉山嘉樹「海に行く」－「往海洋去」

中山義秀「山師」－「山師」

林芙美子「大学生」－「大学生」

火野葦平「山峡にて」－「在山峡裏」

舟橋聖一「枯木」－「枯木」

大瀧重直「解氷期」－「解氷期」

壺井栄「風車」－「風車」

荒木巍「幸運児」－「幸運児」

窪川稲子「鳩」－「鴿」

太宰治「きりぎりす」－「蟋蟀」

芹沢光治良「冬のはじめ」－「冬初」

宇野浩二「晴れたり君よ」－「日麗天和」

上田廣「冬の町」－「冬街」

『現代日本小説選集』第 2 集　太平書局　1944 年 4 月

森三千代「安南」－「安南」

上田廣「地熱」－「地熱」

上田廣「雨季」－「雨期」

高見順「帰つての告白」－「帰来独白」

高見順「花さまざま」－「花種種」

芹沢光治良「春の記録」－「春之記録」

井上友一郎「竹夫人」－「竹夫人」

大谷藤子「或る女の話」－「某女的事」

舟橋聖一「木石」－「木石」

嘉村磯多「業苦」－「業苦」

三、『訳叢』における翻訳作品の選択

後記の附表 2（本論文 136 頁～137 頁）で示したように、雑誌『訳叢』に「蟋蟀」をはじめとして章克標（許竹園）による日本文学作品の翻訳が多く掲載されている。章克標はどのように日本作品を選択したのだろうか。彼の回想録である「世紀揮手」（初出は 1999 年 7 月、海天出版社から刊行された単行本である）において、つぎのようにある。

在郭秀峰主辦的[譯叢]雑志上，我毎月要翻譯一篇日文小説，那時日本文学雑志及一般読物以及新的出版物，我們還有机会看到，就从那些書刊里挑選材料来譯。我的排選是采取回避当前政治的方針，凡是配合当時他們方針政策，為政治运動效労的東西，我竭力回避，只選些超越時代的，不太渉及時事的作品来選毎月一篇，后来結集起来，作為[現代日本文学選]由太平書局出版了。(『章克標文集』下　上海社会科学院出版社　2003 年 1 月　208 頁)

郭秀峰の主宰した雑誌『訳叢』において、日本の小説を月に一篇翻訳した。当時、日本の文学雑誌や一般的な読み物及び新刊の出版物などは、われわれにはまだ入手できたため、これらの中から翻訳すべき作品を選んだ。私は当時の政治方針を回避する態度を採り、方針や政策に協力したり政治運動に奉仕したりするような作品はできるだけ避けて、時代を超えた、時事にあまり関わらない作品を毎月一篇選んで訳した。後に（それらの翻訳作品が）まとめられ、『現代日本文学選』として、太平書局から刊行された。（拙訳）

翻訳作品を選択する章克標の規準が政治の回避にあったと窺えるであろう。しかし、先に述べたように、汪兆銘政権に協力した“文化漢姦”として、章克標が過去の行為を言い訳する可能性があったかどうかは疑問であろう。後記の附表 2 を参照して見ると、雑誌『訳叢』に北條民雄の「いのちの初夜」と「間木老人」が掲載されている。二作の粗筋は次のようである。

「いのちの初夜」：尾田という癩者が、自殺しようとするが、死に切れないことにもがきながら、癩病院に入った日、重症者の付添いを兼ける癩者であった佐柄木と知り合った。鼻の潰れた男などを見て、恐怖と不安に耐えられない尾田は、首を吊ろうとしたが、失敗した。夜、怖い夢から醒めた尾田は、当直の佐柄木と話し合った上で、癩者は社会

的人間として、既に死んだ。癩病に直面して、新しい人間として生きていくべきだと悟った。[165]

「間木老人」：癩病患者の宇津が、入院してから三ヶ月過ぎたある日、間木という老人と知り合った。宇津は彼を訪ねる時、金槌で自分の膝を叩き続ける狂人に出会った後、ある夜中、逃走未遂の女が檻房に入れられたのを目撃した。数日後、その女が松の枝に首をくくって死んだ。恐怖と不安に苦しんでいる宇津は首を吊ろうとしたが、あきらめた。訪ねてきた間木との談話を通じて、彼は宇津の父の親友だった。そして、先日自殺した女が彼の娘だったことは宇津が分かった。翌日、間木も首をくくって自殺した。[166]

何れも癩病患者を取り上げる作品で、政治はおろか、一般社会とさえ隔離されており、確かに、時局と関わらないと言わざるを得ない。一方、火野葦平の「山峡にて」のような作品も翻訳されている。そのストーリーは次のようである。

主人公の「私」が戦地から帰還して、山奥にある嘗ての剣道の師匠であった鴫澤先生の家を訪ねたが、鴫澤先生が亡くなったため、彼の墓のある常正寺に行った。「私」は小さい頃、武士道文庫などの英雄豪傑譚を何よりも愛読して、尋常小学五年の時から鴫澤先生の道場に通った。落武者であった鴫澤先生が頑固で冷酷な剣術家だったので、彼の厳しい稽古に最後まで耐える人が少なかった。「私」は東京の学校に行ってから、先生との連絡が途絶えた。後に出征して南支の戦場で、ある日こちらの何倍もの敵の襲撃を受けて、「私」は日本刀で、敵の隊長を始とする 9 人の支那兵を斬って命を保つことができた。戦友に褒められる中、剣道を教えてくれた鴫澤先生の恩に気付き、それまで思い出すことのなかった先生に会いたくてたまらなくなったという、山奥を訪ねる動機を常正寺の住職に言い聞かせた。[167]

日本兵士が勇ましく戦う一場面が見られるので、時局的色彩は否めない。つまり、雑誌『訳叢』に掲載された翻訳作品には非時局的ものと時局的ものが混じっているので、章克

---

[165] 北條民雄『いのちの初夜』　創元社　1936 年 12 月　1 頁～65 頁を参照した。

[166] 北條民雄『いのちの初夜』　創元社　1936 年 12 月　66 頁～114 頁を参照した。

[167] 『日野葦平選集』第 1 巻　創元社　1958 年 5 月　223 頁～236 頁を参照した。

標の発言の信憑性が疑わしいであろう。しかし、「世紀揮手」第 5 章「教師生涯」で、若い頃、一人で上海へ向かう途中、旅館で買春して性病を移された経緯を詳しく述べている。このような醜事は章克標自身が語らなければ、誰も分からないはずであろう。「世紀揮手」に細かく書いてあるのはかえって彼の誠実さを裏付けているのではないか。一方、この「世紀揮手」の刊行された 1999 年には、章克標は既に 100 歳（数え年）になった。100 歳の人がほぼ 60 年前の翻訳作品の選択態度について、嘘をついたり、隠したりする必要はないであろう。逆に、周辺の人が全部逝去した時点で、何か隠そうとしたら、何も言わずに済んだのであろう。そのため、章克標の上記の発言は信じていいと思われる。また、兵隊作家として持て囃された火野葦平の代表作の「麦と兵隊」（『改造』昭和 13 年 8 月）、「土と兵隊」（『文芸春秋』昭和 13 年 11 月）、「花と兵隊」（『朝日新聞』昭和 13 年 12 月～昭和 14 年 6 月）の、いわゆる兵隊三部作が当時のベストセラーなのに、それらを選ばずに、後に刊行された「山峡にて」を選んだのも、出来るだけ時局を避けるという章克標の態度を傍証していると考えられる。「麦と兵隊」などと比べると、舞台が戦地ではなく日本に置かれている一方、戦う場面もわずか一箇所しかなかった「山峡にて」の時局的色彩が相対的に希薄だと言えるだろう。

時局的作品を翻訳したのは、政治の回避という態度を取ろうとしても、日本軍の支配に置かれている状況下、徹底できなかったためだと考えられる。『訳叢』の発行機関の南京中日文化協会は日本の対華文化宣伝を担っているのは言うまでもない。こういう性格の雑誌にひたすら非時局的な作品だけを翻訳し掲載するのは不可能であろう。

四、「きりぎりす」の選択について

「きりぎりす」は昭和 15 年 11 月発行の『新潮』に刊行され、語り手の「私」から夫の「あなた」に宛てた別れる手紙の形で書かれた短篇小説である。「私」は周囲の反対を押し切って無名の画家の「あなた」と結婚した。世間に認められない「あなた」を理解するのは「私」しかいなかった。ところで、去年、「あなた」が新浪漫派という団体を作り、その展覧会に「菊の花の絵」を出品して、周囲の賞賛を受けたことをきっかけに、「私」は「あなた」を非難し始めた。先日「あなた」の行った、新浪漫派の時局的意義についてのラジオ放送を聞いて、「あなた」に憎悪を抱くようになった、というような「あなた」と別れると決意する経緯を手紙に綴っている。

井原あやが「「あなた」と別れるということ―太宰治「きりぎりす」をめぐって―」[168]において指摘しているように、「きりぎりす」に対しては同時代評が多い。その代表的なものを列記すれば、次のようである。

①平野謙「混濁と希薄　作家精神の在りやう　文芸時評④」(『都新聞』　1940 年 10 月 31 日)

作家精神の在りやうといふ点で私は太宰治の『きりぎりす』(新潮)を興味深く読んだ。ここにみられる反俗精神は、現在私どもでも伝へ聞く日本画壇のインフレ景気に対する風刺といふやうな素材的意味を超えてゐる。

②鬼生田貞雄「作家と自覚　文芸時評」(『文芸首都』　1940 年 12 月)

栄誉、名声、金銭を超えようとする気持ちと、それを欲求する気持ちとの争闘を、妻と夫とに別けて表現してゐるのだが、(中略)俗念に徹してしまつても、また悟念に徹してしまつても、いけないのが芸術家の生き方かも知れない。

③高見順「反俗と通俗　文芸時評」(『文芸春秋』　1940 年 12 月)

美しい反俗精神とも見られるが、そしてその女はそのつもりにちがひないが、実はそれは女の醜悪なエゴチズムの変形なのだ。エゴチズムの上に咲いた反俗精神、さう言つてもいい。(中略)男の俗物性を糾弾するなら、同様に女のエゴチズムも糾弾せねばならないと思ふ。

④岩上順一「太宰治の一面」(『三田文学』　1941 年 2 月)

「きりぎりす」の弱いがしかし真剣な、思ひつめて純粋な反俗精神となつて現はれてゐることに就いては、も早や説明するまでもないであらう。

参照して見ると分かるように、上記の同時代評は何れも反俗を主題とした作品であると、「きりぎりす」を評価している。また、「きりぎりす」の発表された 6 年後の 1946 年 8 月に、あづみ書房から刊行された太宰の作品集『玩具』の「あとがき」には、つぎのよう

---

[168] 『国文学　言語と文芸』第 124 号　2008 年 3 月。

な一節がある。

「きりぎりす」は、昭和十五年の秋に書いた。このころ少し私に収入があつた。千円ちかい金がまとまつて入つたのではなかつたかと思ふ。そんな経験は私にとつてははじめてであつたので非常に不安であつた。結局それは、すぐに使つてしまつたけれども、しかし、自分もこんな事では所謂「原稿商人」になつてしまふのではあるまいかと心配のあまり、つまり自戒の意味でこんな小説を書いてみた。この小説発表の後で、あれは文壇の流行作家何某を攻撃したものだ、などといふ噂も起つたやうであつたが、私はそんな何某などを相手になどしてやしない。私の心の中の俗物根性をいましめただけの事なのである。[169]

太宰治のこういう発言は「きりぎりす」における反俗をめぐる評価にさらに拍車をかけたと井原あやは考えている。その後も「きりぎりす」から反俗を読み取ろうとする論は枚挙にいとまがない。井原あやの話を借りて言えば、「平野の「反俗精神」という評価以来、時代とともに研究手法や切り口がいかに変化しようとも、今日に至るまで「きりぎりす」を分析する際には、妻の「反俗」であれ夫の「通俗」であれ、必ず「俗」であることが問われていた」。（井原あや「「あなた」と別れるということ―太宰治「きりぎりす」をめぐって―」　『国文学　言語と文芸』第 124 号　2008 年 3 月　82 頁。以下は頁数だけ示す）

一方、井原あやは前述した「あとがき」について、「これらの太宰自身による言葉、つまり〈自作自解〉は、先の同時代評―「反俗」をめぐる評価を受けた後に発せられたものであるということである。ここに、同時代評で挙げられた「反俗精神」に接続する、「原稿商人」「自戒」「俗物根性」といった〈作者の言葉〉を言わせてしまう同時代評の力学とでも言うべきものが働いていたと見ることは出来ないだろうか。また、同時代評と〈作者〉との間に作用する力学が、同時代評に理想的な形で応答した〈理想的な作者〉の姿を生み出したと言えはしないだろうか。」（81 頁）と述べた上で、「きりぎりす」の発表された昭和 15 年という時代に目を向け、作中における幾つかの論拠を挙げ、「反俗」に画一化された評価を覆した。

昭和 15 年は神武天皇即位から 2600 年目にあたる「紀元二六〇〇年」という祝祭の時で

---

[169] 『太宰治全集』第 11 巻　筑摩書房　1999 年 3 月　388 頁。

あった。こういう時代状況の中で、主人公の「あなた」は「新浪漫派」という新団体の最初の展覧会に「菊の花の絵」を出品し、周囲から好評を博した。桜が兵士を表象していたのと同様に、菊の花が天皇の表象であることは周知の通りである。特に、「紀元二六〇〇年」という祝祭の時における「菊の花」は祝祭装置として機能している。「私」の「あなた」への非難とは、「紀元二六〇〇年」を前に、祝祭装置へと回収される「菊の花の絵」を描いてしまう「あなた」への嫌悪と読める、という考えを井原あやは示した。

井原あやの挙げた、もう一つの論拠は結末に出てくる「ラジオ放送」である。「周知の通り、すでに戦中からラジオ、あるいはラジオ放送とは「放送は実に一億国民を一瞬にして抱擁し、これを同一の思考と感情の響の中に置く国民指導の近代的な武器であると共に、戦時下にあつては姿なき大砲である」と目されていた。そのような国家宣伝装置としてのラジオから放送される「あなた」の声は、もはや「私でなければ、わからない」ただ一人の「あなた」の声ではなくなったのだ。」（91 頁）というように、井原あやは指摘した上で、「「あなた」とは極めて〈紀元二六〇〇年〉的な〈国民〉表象であり、その「あなた」と別れるということは、「私」にとって、そうした〈国民〉に同化することへの拒否に繋がるということが出来るだろう」（93 頁）という結論を出した。

また、金京淑が「きりぎりす」について、「自由恋愛・自由結婚を認めなかった家父長制の当時において親の反対を押し切って自分が自由に選択した人と結婚するということは、その社会の制度・秩序に服従しない「私」個人の自由な行動の表れである」[170]とし、また当時のラジオは全体主義を掲げる国家共同体への精神的な統合に欠かせない役割を果たしているので、最後の場面におけるラジオのスイッチを切ったというのは時局とのつながるパイプを切断したことを意味しており、時局に対する不服従の意思表明でもあるといった、いくつかの論拠を挙げた上で、「このような『きりぎりす』からは「新体制運動」によって全体主義へ押し流されて行く現実に否を唱える作者の文学者としての批判的な目差しを確認することができる」[171]と、井原あやとほぼ同じ結論を出している。金京淑の論文の参考文献に、先行する井原あやの「「あなた」と別れるということ―太宰治「きりぎりす」をめぐって―」は見えない。金京淑と井原あやはそれぞれ独立した論考を通して、同じ結論に至っている。

---

[170] 金京淑「太宰治における時代と文学―中期を中心に」　博士論文　東京外国語大学　146 頁。

[171] 金京淑「太宰治における時代と文学―中期を中心に」　博士論文　東京外国語大学　146 頁。

ところで、訳者の章克標は日本の同時代の評論家と同様に、「きりぎりす」を反時局的作品ではなく、反俗的作品と捉えたのであろう。反俗は目下の政治方針を回避し、時事と関わりのないという条件を満たすので、それを翻訳したのではないか。

また、先に述べたように、同時代評は何れも反俗を主題とした作品であると、「きりぎりす」を評価している。章克標自身が「当時、日本の文学雑誌や一般的な読み物及び新刊の出版物などは、われわれにはまだ入手できる」（那時日本文学雑誌及一般読物以及新的出版物，我們還有机会看到）と言っている。一方、『訳叢』に掲載された翻訳はほぼ初出雑誌に拠った。附表 2 を参照して見ると、『文学界』、『文芸』、『中央公論』、『日の出』、『新潮』、『婦人公論』、『改造』、『日本評論』、『不同調』、『知性』、『週刊朝日』、『雄辨』などの雑誌が数えられる。つまり、当時、章克標にはこれらの雑誌を読む機会があった。おそらく上記の同時代評が載っている『都新聞』、『文芸首都』、『文芸春秋』、『三田文学』などの雑誌の何れかも入手できたであろう。雑誌における「きりぎりす」に関する同時代評を読んで、「反俗」という評価をそのまま信じて、それを翻訳した可能性もあるであろう。

五、太宰治作品の中国における翻訳

①「きりぎりす」－「蟋蟀」　章克標訳（『現代日本小説選集』第 1 集　太平書局　1943 年 8 月）

②「斜陽」－『斜陽』　張嘉林訳　上海訳文出版社　1981 年 8 月

③「ヴィヨンの妻」－「維栄的妻子」　張嘉林訳（『当代日本小説集』　上海訳文出版社　1986 年）

④「人間失格」－『喪失為人資格』　王向遠訳　北京師範大学出版社　1993 年

⑤『外国優秀小説選粋－「斜陽」他』　山東文芸出版社　1999 年

「走れメロス」－「社会迷霧中的世態心霊図」　楊偉訳

「魚服記」－「魚服記」　許金龍訳

「満願」－「満願」　唐先容訳

「富嶽百景」－「富岳百景」　晋学新訳

「桜桃」－「桜桃」　趙戈非訳

「ヴィヨンの妻」－「維栄之妻」　楊偉訳

「斜陽」－「斜陽」　晋学新・穆麗琴訳

「人間失格」－「喪失為人資格」　楊偉訳

⑥『斜陽』　重慶出版社　2008 年 9 月

「斜陽」－「斜陽」　張嘉林訳

「ヴィヨンの妻」－「維庸之妻」　楊偉訳

「人間失格」－『人間失格』　楊偉訳

まとめ

章克標は、同時代評を読んだかどうかはともかく、実際に反時局的な作品である「きりぎりす」を反俗的な作品と思い込んで、「当時の政治方針を回避する」という翻訳作品の選択条件に該当するため、それを「蟋蟀」に翻訳したと言えるであろう。

太宰治はこの「きりぎりす」の漢訳や章克標についてまったく言及していないため、章克標による「きりぎりす」の漢訳を知らなかった可能性が高いであろう。つまり、中国人に読んでもらうために書いた「竹青」と「惜別」の漢訳（発表予定は昭和 20 年）は何れも幻に終わったが、ずっと先の昭和 17 年に「きりぎりす」がすでに章克標によって漢訳された。そしてこれが太宰治作品の漢訳の嚆矢であると思われる。

一方、20 世紀の中国における日本文学の翻訳史を整理した康東元の『日本近・現代文学の中国語訳総覧』（勉誠出版　2006 年 1 月）や王向遠の『日本文学漢訳史』（寧夏人民出版社　2007 年 10 月）では、雑誌『訳叢』に掲載された、章克標による「きりぎりす」の漢訳を始めとする一連の翻訳作品については言及されていないので、日本文学の漢訳史という視点から見ても、太宰作品の漢訳史という視点から見ても、章克標による「きりぎりす」の漢訳は見逃すことができないと思われる。

附図

文藝

蟋蟀

太宰治

跟你分別了。你一味說謊哄騙人。也許我也有不合的地方。但是我不知道什麼地方是我的不合。我已經二十四歲了。到了這個年紀，說什麼地方不行，我也沒有法子改過的。若非先死了再來一次復活，像耶蘇基督那樣，決不能改變。自己去求死，又像是最大的罪惡，因之我決定跟你分別，照我自己所認爲正當的路上，努力去求生活。我是怕你。在這個世界上社會上，也許你的那一種生活方法是不錯的。但是，我無論如何不能照這個樣子活下去。我嫁到你的地方已經五年了。十九歲的春天相親之後，不久我就差不多光身子一個到你的地方來的。現在我到可以對你說明白了，父親母親對於這樁結婚都是非常反對的。弟弟當時纔進大學，也老成持重的詰問我說，姊姊靠得住嗎，很不快意的樣子。因爲恐怕你不開心，所以從沒有對你說過，那時我另外還有兩件結親的事提着的。已經有些記不清楚了，好像一個是剛從帝國大學法科畢業的少爺輩，是志望做外交官的？他的照片也拿來看過。像樂天家那樣很明朗的顏面。這是池袋的大姊姊推薦的。還有一個是在父親的公司裏任職的技師，年紀近三十歲。因爲是五年以前的事，有點記不清楚了，好像說是大家庭的長子，人物非常幹練可靠。父親像看中此人，父親母親都熱心支持他。照片記得沒有看見過。這些事情沒有關係，怕也許要遭你的訕笑，非常苦痛，把記得的都說給你聽。現在說些說話，也決不是想討你惹厭或者什麼。這一點請你不必懷疑。我是坦白的。嫁到別的好地方去了到好，這一種淺薄可恥的念頭，分毫沒有的。除了要嫁你以外，我沒有想到別的人。照平常那種樣子，你再笑起來，我不許的。我是眞心誠意的說話。請一直聽下去。那個時候以及現在，除了你以外，我沒有想同別人結婚的意思。這是十分明白的。我從小就歡喜絕不含糊。那時候，被父親，母親池袋大姊，用種種說話勸告，說不妨見見面，但是我總像覺得相親訂親是一樣的，所以不輕易允許。因爲完全沒有想跟那些人結婚的意思。像照別人所說的都是完美無缺的人，那麼要在世間尋一個好新娘很容易，何必特別要我，我就好像沒有什麼可做的樣子。在這個世界上(這話一定又要惹你笑了)我要嫁到一個非我嫁過去不可的人的地方，我茫然這樣想着。恰巧那個時候，你的那邊有那說話的提起。因爲是突如其來的，父親母親起初很生氣了。你想那個古董商人的但馬先生，到父親公司裏來賣畫幅，總是雜七夾八亂說一陣子，到後來又打訕地說，這幅畫的作家，將來一定成名的，怎麼樣？把府上的小姐匹配給他？此種不客氣缺禮貌的說笑，父親隨便聽着絕不介意，不過畫是買了，掛在公司裏會客室的牆壁上，二三天之後，但馬先生又來了，這一次却是正式來求親了。簡直混鬧。做媒使的但馬先生也眞正糊塗，托但馬先生做媒說親的更不成話，父親母親都啞然無話。可是後來我問你，這又是你完全不知道的事情，全是但馬先生一個人出於爲朋友的忠義。眞是受了但馬先生的種種照應了。現在你的出世成名也是靠托但馬先生之力。對於你，他眞是不當生意做，忠心盡力

附表 2：雑誌『訳叢』に掲載された日本の小説

作品	初出（初刊）	訳者	訳名	所載
北條民雄 「いのちの初夜」	『文学界』 1936 年 2 月号	許竹園	【生命的初夜】	第 1 巻第 1 期～第 2 期
壷井栄 「風車」	『文芸』 1939 年 3 月号	許竹園	【風車】	第 1 巻第 3 期～第 4 期
横光利一 「秘色」	『中央公論』 1940 年 1 月号	許竹園	【秘色】	第 1 巻第 5 期
丹羽文雄 「開かぬ門」	『日の出』 1940 年 11 月号	許竹園	【不開的門】	第 1 巻第 6 期
宇野浩二 「晴れたり君よ」	『新潮』 1924 年 4 月号	許竹園	【日麗天和】	第 2 巻第 1 期
窪川稲子 「鳩」	『扉』 （甲鳥書林　1941 年 3 月）	許竹園	【鴿】	第 2 巻第 2 期
林芙美子 「大学生」	『婦人公論」』 1939 年 10 月号	許竹園	【大学生】	第 2 巻第 3 期
火野葦平 「山峡にて」	『新潮』 1941 年 1 月号	許竹園	【在山峡裏】	第 2 巻第 4 期
舟橋聖一 「枯木」	『木石』 （新潮社　1941 年 10 月）	許竹園	【枯木】	第 2 巻第 5 期
太宰治 「きりぎりす」	『新潮』 1940 年 11 月号	許竹園	【蟋蟀】	第 3 巻第 1 期
芹澤光治良 「冬のはじめ」	『改造』 1942 年 1 月号	許竹園	【冬初】	第 3 巻第 2 期
上田広 「冬の町」	未詳	許竹園	【冬街】	第 3 巻第 3 期
荒木巍 「幸運児」	『日本評論』 1942 年 2 月号	許竹園	【幸運児】	第 3 巻第 4 期
葉山嘉樹 「海に行く」	『改造』 1942 年 5 月号	許竹園	【往海洋去】	第 3 巻第 5 期
大瀧重直 「解氷期」	『中央公論』 1942 年 6 月号	許竹園	【解冰期】	第 3 巻第 6 期
大谷藤子 「或る女の話」	『改造』 1942 年 2 月号	許竹園	【某女的事】	第 4 巻第 1 期
北條民雄 「間木老人」	『文学界』 1935 年 11 月号	許竹園	【間木老人】	第 4 巻第 2 期
嘉村磯多 「業苦」	『不同調』 1928 年 1 月号	許竹園	【業苦】	第 4 巻第 3 期
中山義秀 「山師」	『文芸』 1939 年 4 月号	許竹園	【山師】	第 4 巻第 4 期～第 5 期
高見順 「花さまざま」	『知性』 1940 年 7 月号	許竹園	【花種種】	第 4 巻第 6 期

井上友一郎 「竹夫人」	『日本評論』 1943 年 1 月号	許竹園	【竹夫人】	第 5 巻第 1 期
上田広 「雨季」	『改造』 1943 年 2 月号	許竹園	【雨期】	第 5 巻第 2 期
高見順 「帰つての告白」	『改造』 1943 年 3 月号	許竹園	【歸来獨白】	第 5 巻第 3・4（合併）期
芹澤光治良 「春の記録」	『文芸』 1942 年 7 月号	許竹園	【春之記録】	第 5 巻第 5 期
大瀧信一 未詳	未詳	張　蕾	【春之海】	第 5 巻第 6 期
中村地平 「馬来人サーラム」	『文芸』 1943 年 6 月号	張　蕾	【馬来人薩拉姆】	第 6 巻第 1 期
火野葦平 「魔法の杖」	『敵将軍』 （第一書房　1943 年 11 月）	張　蕾	【魔法杖】	第 6 巻第 2 期
大江賢次 「極楽鳥」	『週刊朝日』 1943 年 9 月 5 日	慕　文	【極楽鳥】	第 6 巻第 3 期
志賀直哉 「夢」	『雄辨』 1920 年 1 月号	張資平	【夢】	第 6 巻第 4 期

結論

本論文では、太宰治作品に散見し、先行研究であまり言及されていない中国的なモチーフを比較文学的視点から考察を試みた。各章の内容を振り返ってみよう。

第一章では、「竹青」と「惜別」における中国古典と中国地理の知識をまとめた上で、二作の時局小説という性格から、意識的に中国の古典や地理知識を自作に取り入れた太宰治の狙いは大東亜五大宣言の理念に従って、日本人が確かに親族のように、中国の文化（古典や歴史や地理など）をよく知っている兄弟であることを根拠付けるためであったと分析した。

第二章では、先行研究に基づいて、「惜別」の執筆に際して、太宰治の参照した資料を整理した上で、補足を加えた。「惜別」における「康有為が、日本の維新に則り、旧弊を打破し大いに世界の新知識を採り、以て国力回復の策を立てよと叫び」と『東洋近世史（二）』における「日本の明治維新に則つて、旧弊を打破し世界の新知識を採り、以て国力回復の策を立てよと叫び」との表現はまったく同じなので、「惜別」における中国同盟会の成立や日清戦争以降の列強の中国への進出や康有為・梁啓超などによる戊戌変法などの中国に関する描写の典拠は『東洋近世史（二）』にあることを検討した。一方、既に指摘されている太宰治の参照した資料にも、『東洋近世史（二）』にも載っていないが、「惜別」に現れる孫文と康有為との対立などに関わる描写の典拠は可能性として吉野作造『対支問題』や周佛海著・犬養健訳『三民主義解説』などを述べた。

第三章では、中国と日本における赤縄説話を概観し、身分の格差または、それによる家族の反対を表現する箇所の有無・赤い糸の結ばれる時期は「生まれた時」であるかどうか、を根拠として、中国と日本における一連の赤縄説話の太宰治の「赤い糸」の典拠になる可能性を排除し、太宰治の「赤い糸」の典拠を『故事成語考』、「定婚店」と沖縄に伝わる赤縄説話のいずれかに絞った上で、ヒロインは赤ん坊であるかそれとも少女であるかを決め手として、結局、太宰治の「赤い糸」の典拠は中国の赤縄故事を受容した沖縄の赤縄説話にあると論証した。一方、弘前高校在学中に、鈴木敏也の『新注雨月物語評釈』（または『雨月物語新釈』）を読んだとき、「吉備津の釜」の「語釈」で再び赤縄説話に接し、後の昭和７年８月に、この話をモチーフにして「思い出」に取り入れたということも考察した。

第四章では、太宰治の読んだ「寒山詩」は太田悌蔵訳注の『寒山詩』であることを確認し、寒山拾得を主題とする絵画や文学作品を概説した上で、「服装について」における「非

凡な格好をして人の神経を混乱させ圧倒する」という表現や太宰治と芥川龍之介・井伏鱒二、また絵画との密接な関係を根拠として論を展開し、太宰治の寒山拾得像は直接的に、或は井伏や芥川の作品が介在して間接的に、曽我蕭白の「寒山拾得図」に基づいて造形したグロテスクなものであると分析した。

第五章では、「惜別」における表現や関連随筆に基づいて、大酒を飲みながら貧しい生活を送っているという竹林七賢観を太宰が持っていたことを纏めた上で、そうした竹林七賢観を「晋書」や「世説新語」における竹林七賢に関する記載と対照させて、太宰の竹林七賢観が一面的なものであったことを確認した。また、こういう一面的な竹林七賢観の由来については、太宰の接した伯夷、叔斉や寒山などの中国隠者は生活状態において、偶然に太宰の日本隠者観と一致するため、太宰には日本の隠者と同じく、貧しい生活を送っているという中国隠者観が形成された。そして、その中国隠者観をそのまま竹林七賢に当て嵌めたことを分析した。

以上のように、第二章から第五章までは、中国の歴史、中国の説話、中国の人物を、素材にして考察した。

第六章では、「幻の漢訳」と呼ばれる「竹青」と「惜別」の掲載（予定）雑誌であった『大東亜文学』の性格を説明した上で、訳者の人物像や翻訳の経緯を考慮した結果、昭和17 年の章克標による「きりぎりす」の中国語訳である「蟋蟀」が太宰治作品の漢訳の嚆矢であることを解明した。

また、前述した「赤い糸」や寒山拾得などのほかにも、多くの中国的なモチーフ（附表3、本論文 145 頁～153 頁）が太宰作品に散見する。本論文の考察を通じて、次のようなことが分かってくる。

1、太宰と中国との関連は多岐にわたる。

中国文学との関わりは「股をくぐる」、「清貧譚」、「竹青」や「惜別」などの翻案物だけではなく、「寒山詩」や魯迅の「答有恒先生」（本論文 150 頁）などの中国文学作品にも見られる。作品以外に、中国歴史、中国地理、中国人物（寒山拾得や竹林の七賢人など）、中国説話（赤縄説話や蕉鹿説話など）など、中国文化のいろんな面に渉っている。

2、中国的モチーフの出所は主として、次のようなルートが挙げられる。

①学生時代の勉強などを通じて、身に付けたもの。例えば、「竹青」や「惜別」に出てく

る「論語」[172]中の語句はそれである。

②自身の中国に関する知識の不足に配慮して、専門書籍に依ったもの。例えば、「竹青」や「惜別」における中国歴史や地理知識はそれである。

③周辺の人から聞いたもの。「思い出」における「赤い糸」や「作家の手帖」における中国の七夕[173]はそれである。

④先行する小説や絵画などの芸術作品から踏襲したもの。「服装について」における寒山拾得像はそれである。

⑤自身の認識に基づいて、臆断したもの。太宰の竹林七賢観がその代表的なものであろう。

3、このように多岐にわたり、関わりを持っている中国文学や中国的なモチーフを太宰治は、どのように作品の中で生かしていると言えるだろうか。太宰の中国的モチーフの受容の特徴といえば、次の二点が挙げられる。

①中国的モチーフを自分の創作に都合のいいようにかなり自由に使っている。場合によっては、事実と食い違った書き方をしている場合もある。

屈原は洞庭湖ではなく汨羅江に身を投じたのが事実であるのに対して、太宰治は「竹青」で洞庭湖に身を投げたというように書いていることや、孫文は康有為よりずっと先に日本に来ている一方、孫文と康有為との連携が失敗したあと、康有為が新嘉坡に移住したのは史実であるが、「惜別」において、「さきに日本に亡命して来た康有為」や「康有為はひそかに日本を去つて欧洲に旅立つた」と表現されていることや、実際にアメリカの中国への干渉は「望厦条約」の結ばれた 1844 年からであったが、「惜別」において、1898 年の米西戦争以降、フィリピン「を足がかりにしてそろそろ支那に対して無気味な干渉を開始していた」と設定されていることなどがその例である。

②太宰が中国的モチーフを主題として正面から受け入れているというよりも、あくまでもエピソード的素材として利用しているという点にあると言える。このことを、やはり中国文学と関わりを持っていた芥川龍之介との対比を通じて確認してみたい。

芥川龍之介が漢文学素養の高い作家であるのは周知のことであり、「酒虫」(「聊斎志異」中の「酒虫」の翻案)、「首が落ちた話」(「聊斎志異」中の「諸城某甲」の翻案）などを書

---

[172] 太宰の旧制中学時代に使った漢文教科書であった岡田正之編『新定漢文読本』第 4 巻、第 5 巻に「論語鈔」が見られる。

[173] 「作家の手帖」において、七夕の夜を述べる直前に、「私は子供の頃から聞かされていた」という断わりが見える。

いている。一方、太宰も「聊斎志異」を典拠本文とした翻案物の「清貧譚」と「竹青」[174]を創作した。

1916 年 6 月、『新潮』に刊行された芥川の「酒虫」は、中国の長山県で屈指の素封家である劉大成は大酒飲みで蛮僧に言われて腹中に住み着いている「肉の色が朱泥に似た、小さな山椒魚のやうなもの」で、「長さは、三寸ばかりであらう。口もあれば目もある」[175]というような酒虫を取り出してもらう怪談である。また 1918 年 1 月、『新潮』に刊行された「首が落ちた話」の粗筋は次のようである。日本兵に皮一枚を残して首を斬られた何小二は、奇跡的に救われる。死を目の前にした何小二は、幻想に見た美しい景色に見惚れ、「もし私がここで助かつたら」「誰にでも謝りたかつた。さうして又、誰をでも赦したかつた」と思ったのである。しかし、助かった後の何小二はそんなことを忘れ、女と酒に身を持ち崩し、或る日、飲み仲間と喧嘩したときに再度首が落ちて死んだという話である。

芥川と「聊斎志異」との関連について、邱雅芬が「怪異物、奇怪談を好む芥川は創作において、優雅な美と最もかけはなれ、作者愛用の言葉で言えば「不気味」に象徴されるようなグロテスクな世界を描出するのに熱心であった。これから取り上げようとする「仙人」「酒虫」はもちろん、中国を舞台にする「アグニの神」もまた、彼が愛読した怪異文学に強く影響されたグロテスクな世界を展開した作品と考えられるのである。」[176]と指摘している。「劉が酒虫を去ったのは自ら己を殺したのも同然である」(「酒虫」)や「人間はあてにならない」(「首が落ちた話」)などの芥川の世界観又は人間観が作品に現われるが、肉の色が赤く、三寸ばかりで口もあれば目もある、魚のような酒虫が人の腹に住み着いているとか、首を皮一枚を残して首を斬られても、人が死なないとかいう、中国の超現実的、グロテスクな世界を日本の読者に見せようとするのは「酒虫」と「首が落ちた話」の主題

---

[174] 太宰とほぼ同時代に活躍した佐藤春夫も中国趣味の持ち主で、昭和 26 年 9 月に『美しい暮らしの手帖』に掲載された「竹青の話」(「聊斎志異」中の「竹青」の逐語訳)を初めとして、「聊斎志異」を典拠本文とした翻訳・翻案が 19 篇もある。彼の翻訳・翻案の態度は原典に出来るだけ忠実であろうとする点であると見られている。こういう態度は「文学を通して支那の文明や国柄、支那人の気質などをこまごまと呑み込んで」(佐藤春夫「支那文学選序」)いるという佐藤春夫の中国文学観に由来するのではないか。つまり、中国文学を中国の文化、国家、人を認識する媒介と捉えている佐藤春夫は、自作を以て、日本の読者に中国を正確に認識してもらうために、原典に忠実でなければならないであろう。

[175] 『芥川龍之介全集』第 1 巻　岩波書店　1995 年 11 月　199 頁。

[176] 『芥川龍之介の中国－神話と現実－』　花書院　2010 年 3 月　44 頁。

であろう。つまり、原典の「聊斎志異」中の「酒虫」と「諸城某甲」における怪異性はそのまま芥川に踏襲され、彼の「酒虫」と「首が落ちた話」の主題になっていると言える。

一方、同じく「聊斎志異」を典拠本文として、太宰は「清貧譚」と「竹青」を書いている。「清貧譚」のあらすじは以下のとおりである。江戸の向島に住んでいた馬山才之助は菊作りの愛好家である。ある日、旅の帰途、菊の精である若い姉弟と知り合った。才之助はその弟陶三郎と菊栽培の趣味で意気投合し、姉弟二人を家に連れ帰って納屋で生活させるようになった。才之助は姉弟との交際を通じて、自分の堅持してきた清貧観を捨てたという話である。また「竹青」は、故郷で周りから軽蔑されてきた書生の魚容が科挙試験に落第して帰る途中、呉王廟で祈ると、烏に化して、竹青という雌の烏とペアになり、仲睦まじく暮らしたが、兵隊の弾に当ると、廟の中で夢から醒めた。三年後、また、呉王廟に立ち寄り、漢江の女神になっている竹青に誘われ、神仙界に行ったが、そこのいい景色を楽しみながら「くにの女房にも、いちど見せたいなあ」と行ったため、竹青に故郷へ帰されたというストーリーである

原典の「聊斎志異」中の「黄英」の主題は次にあると思われる。

黄英曰。妾非貪鄙。但不少致豊江盈。遂令千載下人。謂淵明貧賤骨。百世不能發迹。故聊為我家彭澤解嘲耳。[177]

『私は金を貪るつもりはないのですが、ただすこし豊かにならないと、後世の人に、あの淵明は貧乏性だ、何時までも世に出ることができなかつたぢやないかと云はれるのですから、それで我家を豊かにして云ひわけにしたのです。』[178]

菊の精が人間に化けて、人間と結婚するという怪談の中で、陶淵明[179]のような、節操を守るため清貧に固執する知識人への諭しが「黄英」の主題であろう。一方、「清貧譚」の主

---

[177] 『支那文学大観』第 12 巻『聊斎志異』　支那文学大観刊行会　1926 年 3 月。

[178] 『支那文学大観』第 12 巻『聊斎志異』　支那文学大観刊行会　1926 年 3 月。

[179] 陶淵明（365～427）名は潜、晋の時代の詩人。江西省の生まれ。武昌太守陶茂の孫。405 年彭沢の令になったが、80 余日にして、有名な「帰去来の辞」を作り、帰郷した。彼が菊を愛し酒を好んだことは有名で種種の逸話が残っている。詩作の主要テーマは清貧と酒と、みたされない人生の問題が田園生活への思慕の中におおくもり込まれている。

題については、主人公の才之助が生活のために、堅持してきた信念を棄てたように、当時の太宰が、生活のために原稿生活者になり、作家としての本道から逃れて行った悔恨を作品に託しているというように、松島芳昭[180]が指摘しており、清貧な生活を送っている当時の太宰の実生活を彷彿させる小説である。つまり、「黄英」と「清貧譚」との間に主題の違いが見られる。「清貧譚」の冒頭に「古い物語を骨子として、二十世紀の日本の作家が、不逞の空想を按配し、かねて自己の感懐を託して以て創作也」と書いているように、太宰は原典の「黄英」の主題を踏襲せず、その物語だけを素材として「清貧譚」に取り入れ、自作の主題を表現する上での骨組みとしている。

また、「聊斎志異」中の「竹青」の主題は人間が鳥に変身する怪異性であろう。太宰の「竹青」の主題については、祝振媛[181]が「太宰作品（「竹青」＝劉）の主人公にとって唯一の郷愁から脱出する方法は、作品の結末のように、脱俗的な姿をしないで、故郷の風土と一体化することである。これは太宰の作品のモチーフであるし、主題でもある。」と述べており、原典の変身の怪異性という主題とはかけ離れている。つまり、「聊斎志異」中の「竹青」も太宰の「竹青」の主題とはかけ離れた素材でしかない。

文学作品以外の要素との関わり方にもこういう傾向が見える。例えば、第四章で述べた寒山拾得は芥川の「東洋の秋」にも太宰の「服装について」にも登場する。「東洋の秋」における寒山拾得について、邱雅芬は次のように述べている。

> このような芥川にとって、中国と中国古典が精神の安息場となったことは十分考えられる。1918 年 3 月に完成した「東洋の秋」（「改造」　1920 年 4 月）で、日比谷公園を散歩していた「云ひやうのない疲労と倦怠」を感じる「おれ」は、中国唐代の詩僧寒山と拾得とに出会い、「今までの疲労と倦怠との代わりに、何時か静かな悦びがしつとりと薄明るく溢れてゐた」と言うのである。また「あの二人が生きてゐる限り、懐かしい古東洋の秋の夢は、まだ全く東京の町から消え去ってゐないのに違ひない」とも言う。芥川にとって、「寒山拾得」―中国古典の世界は、病める心を癒してくれる、言わば桃源郷的な存在であった。[182]

---

[180] 「『清貧譚』―聖と俗の狭間で」　『解釈学』第 5 号　1991 年 6 月。

[181] 「太宰治と中国―太宰の『竹青』」　『解釈と鑑賞』第 63 巻第 6 号　1998 年 6 月。

[182] 『芥川龍之介の中国－神話と現実－』　花書院　2010 年 3 月　11 頁。

寒山拾得は中国古典の世界の象徴なので、芥川の中国伝統文化への憧憬という「東洋の秋」の主題に繋がるのはいうまでもないであろう。しかし、太宰の「服装について」では、寒山拾得は弊衣の例として取り入れられ、服装をもって人を判断する世俗への批判という主題とはかけ離れた素材と言わざるを得ないであろう。

太宰と芥川におけるこうした中国的要素への接し方の違いは二人の中国に対する態度に由来すると思われる。芥川の中国への傾倒は贅言するまでもない。一方、文学作品以外で、太宰の中国に関するものへの言及は上記の竹林七賢のほかに、石濤（附表 3、本論文 146 頁）と中国の便箋（附表 3、本論文 149 頁）しか見つからない。また、太宰の読んだ中国の作品（学生時代の漢文教科書に収録されているもの以外）については、翻案（「清貧譚」、「竹青」や「惜別」）の需要に応じて、参照した田中貢太郎訳・公田連太郎注『聊斎志異』と改造社版『大魯迅全集』の外に、現在確定できたのは太田悌蔵訳注『寒山詩』と吉川幸次郎評釈「李太白匹配金銭記」（筑摩書房　1943 年 5 月）しかない。

太宰の創作全体に中国文学や中国的モチーフの占める度合いは、他の国の文学やモチーフと比べて決して少なくない。しかし、太宰はそれらの要素を、自分の作品の主題に直結する形で活用したのではなく、作品の素材として自由に応用したと言えるのであろう。

このように様々なルートを通して、中国的モチーフを素材として自由に活用しているという、太宰と中国との関わり方の究明は今後の、外国文学との関わり方や創作手法に関する太宰治研究の一助になるのであろう。また、中国に関する知識を太宰がどれほど持ったのかは彼の世界観に関わっているので、今後の作家論に役立つのではないか。

附表 3：太宰治作品[183]における中国的な要素

一、中国の人物や文化など

太宰における表現及び収録作品	取り上げた中国的な要素
お役人の面々に、それぞれ逸物三匹ずつを用意せしめ、御自身いやしき伯楽の如くお手ずから馬の口の中まで綿密にお調べになったくらいで。(「右大臣実朝」)	伯楽（中国古代の、馬の鑑定に巧みであったという人）
臥竜。おれは、考えることをしている。ひるあんどん。面壁九年。さらに想を練り、案を構え。雌伏。賢者のまさに動かんとするや、必ず愚色あり。（中略）晴耕雨読。三度固辞して動かず。(「懶惰の歌留多」)	諸葛亮、達磨、趙温（後漢末期の人）
たとい一日たりとも我は既に武術の心得ある男子なり、呉下阿蒙には非ざるなり。(「花吹雪」)	呂蒙（三国時代の呉の武将）
あの陳和卿という人物を信頼する気にはどうしてもなれなかった御様子で、あの者が案内役をつとめるというならば、この御計画にはあくまでも反対しなければならぬ、というお考えのように見受けられました。この陳和卿というのは甚だ不思議な人物で、異国の人の気持というものは、私どもにはなかなかわかりにくいものでございますが、この人は建保四年の六月にひょっこり鎌倉へまいりまして、当将軍家は御仏のお生れ変りでいらっしゃると奇妙な事を言いふらして歩きましたそうで。（中略）陳和卿の泣く泣く申し上げる事には、将軍家はその御前身に於いて宋朝医王山の長老たり、我はその時、一門弟としてお仕え申して居りました。(「右大臣実朝」)	陳和卿（宋代の和上で、東大寺大仏の再建に関与したという）
秋田附近から五銖銭が出土したことがあり、東北には漢文帝武帝を祀った神社があったらしいのは、いずれも直接の交通が大陸とこの地方との間に行われたことを推測せしめる。(「津軽」)	漢文帝、漢武帝
○この傾向は、もう早くからあらわれて、あの魏の頃の竹林の名士なども、この礼の思想の堕落にたえかねて竹林に逃げ込んで、やけ酒を飲んでいたのです。(「惜別」) ○隠者とは言っても、かの竹林の賢者たちのように、ありあまる知識をもて	竹林七賢（晋の時代の隠者で、阮籍、嵇康、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎という七人の称である）

[183] 前述した「竹青」、「惜別」、「服装について」などは除く。

あまして、竹林に逃げ込んだというようなものでは無くて、この剣山の隠者の心は甚だ愚である。(「瘤取り」) ○竹林の七賢人も藪から出て来て、あやうく餓死をのがれん有様、佳き哉、自ら称していう。(「もの思う葦(その二)」) ○むかし、支那に竹林の七賢人といつて、知ること最上、つひに竹藪の中に隠れ、日々、淫酒、手を拍つて笑ひ、さうして餓死いたした人たちがあつたさうですね。賢人も、竹藪へはひつてしまへば、それきりです。(「昭和十年九月三十日付鰭崎潤宛書簡」) ○竹林の七賢人は藪より出づべし、出でてわが身を都塵にまみれさすべし。(アンケート「作家としての心構へ・覚悟」)	
あすは、呉清源が、この家へ兄を訪ねてやって来るという。碁の話ではなく、いろいろ世相の事など、ゆっくり語り合う事になるらしい。(「庭」)	呉清源(日本に帰化した囲碁の棋士)
むかし支那に顔回という人物がありました、等といろんな事を言い出して。(「千代女」)	顔回(孔子の弟子)
韓信の股くぐりさえ思い出した。元来、私は、木村氏でも神崎氏でもまた韓信の場合にしても、その忍耐心に対して感心するよりは、あのひとたちが、それぞれの無頼漢に対して抱いていた無言の底知れぬ軽蔑感を考えて、かえってイヤミなキザなものしか感じる事が出来なかったのである。(「親友交歓」)	韓信(秦末漢初の武将)
唐詩選は、成功したやうでした。T 君は、各地を転戦しながら、此処は李太白の酔つぱらつたところ、此処は杜甫の泣いたところと唐詩選に照らし合せて、戦ふ心も豊かになり、さながら詩聖たちと共に且つ酔ひ泣く気持だと。(「このごろ」)	「唐詩選」、李白、杜甫
石濤と法帖わざわざありがたう。石濤には、ちよつと恐ろしい気がいたします。(「昭和 8 年 4 月 26 日付久保隆一郎宛葉書」)	石濤(清代の有名な画家)
革命いまだ成らず、と孫文が言って死んだそうだけれども、革命の完成というものは、永遠に出来ない事かも知れない。(「おさん」)	孫文
あなたの大好きな魯迅先生は、所謂「革命」に依る民衆の幸福の可能性を懐疑し、まづ民衆の啓蒙に着眼しました。(「返事」)	魯迅
いよいよ支那事変になり、私たちの年頃の者は皆戦争に行かなければなら	蒋介石

なくなった。事変はいつまでも愚図々々つづいて、蒋介石を相手にするのしないのと騒ぎ、結局どうにも形がつかず。（「十五年間」）	
けれども私は、ときどき思うことがある。宋美齢は、いったいどうするだろう。（「懶惰の歌留多」）	宋美齢（蒋介石の夫人）
「逃げろ、逃げろ。鐘馗かも知れねえ。」「いいえ、鐘馗ではございません。」（「瘤取り」）	鐘馗（伝説上、鬼を掴んで食べる神。）
またあの、犬、猿、雉の三匹の家来も、決して模範的な助力者ではなく、それぞれに困った癖があって、たまには喧嘩もはじめるであろうし、ほとんどかの西遊記の悟空、八戒、悟浄の如きもののように書くかも知れない。（「舌切雀」）	孫悟空、猪八戒、沙悟浄（「西遊記」中の登場人物）
右六名のうち、孔雀の扮装は最も醜怪なり。馬肉をくらいたる孫悟空の如し。（「パンドラの匣」）	孫悟空
勝太郎に較べて何から何まで見劣りして色は白いが眼尻は垂れ下り、唇厚く真赤で猪八戒に似ているくせになかなかのおしゃれで。（「義理」）	猪八戒
そこのあるじは、支那のひとであって、女の子を一人並の客として取扱った。（「葉」）	中国人の主
むかし支那に、ひとりの自由思想家があって、時の政権に反対して憤然、山奥へ隠れた。時われに利あらずというわけだ。（「パンドラの匣」）	中国のある思想家
兄がいま尊敬している文人は、日本では荷風と潤一郎らしい。それから、支那のエッセイストたちの作品を愛読している。（「庭」）	中国のエッセイスト
○むかし江戸深川に原宮黄村という男やもめの学者がいた。支那の宗教にくわしかった。（「ロマネスク」） ○支那の宗教から心が離れれば離れるほど、それに心服した。（「ロマネスク」）	中国の宗教
○僕は、この秋から支那服着るのだ。（「虚構の春」） ○僕もそのうち、支那服を着てみるつもりである。（「喝采」）	中国衣服
○近くの支那そばやへ、よく行ったものであるが、或る晩、私は黙って支那そばをたべていると、そこの小さい女中がエプロンの下から、こっそり鶏卵を出して。（「俗天使」） ○支那そばやの女中さんから、鶏卵一個を恵まれたからとて、それが、なん	中国そば

の手柄になることか。(「俗天使」)	
○お祝いの意味で、これから支那料理でも食べに行こう。(「正義と微笑」) ○場所は、小坂氏のお宅の近くの或る支那料理屋。(「佳日」) ○私は、阿佐ヶ谷のピノチオといふ支那料理店で酔つ拂ひ、友人に向つてさう云つたのを記憶してゐる。「『井伏鱒二選集』後記」	中国料理
新聞の政治欄を、むさぼる如く読み、支那の地図をひろげては、何やら仔細らしく検討し、ひとり首肯き。(「八十八夜」)	中国地図
はじめの感想文は、あれは、支那のブルジョア雑誌から盗んだものだが、岩の上の場面などは僕は書いた。(「虚構の春」)	中国雑誌
八歳になるまでは一銭の小遣いも与えられず、支那の君子人の言葉を暗誦することだけを強いられた。(「ロマネスク」)	中国の君子の言
彼が渡支してから、もう五年。けれども、その五年のあいだに、彼と私とは、しばしば音信を交わしていた。彼の音信に依れば、古都北京は、まさしく彼の性格にぴったり合った様子で。(「佳日」)	北京
はるかに紫禁城を眺めている横顔の写真。碧雲寺を背景にして支那服を着て立っている写真。(「佳日」)	紫禁城、碧雲寺(北京の名所)
二、廃船は意外わが贈物、浮ぶ『西太后の船。』そもそも北京郊外万寿山々麓の昆明湖、その湖の西北隅、意外や竜が現われた。(「俗天使」)	北京
妹さんの御亭主も、北支で戦死をなさったので、N 君夫妻は、この三人の遺児を当然の事として育て、自分の子供と全く同様に可愛がっているのだ。(「津軽」)	中国北部
昭和十二年七月七日、蘆溝橋に於いて忘るべからざる銃声一発とどろいた。(「作家の手帖」)	蘆溝橋
事変以来八十九日目。上海包囲全く成る。敵軍潰乱前線に総退却。(「秋風記」)	上海
○夕方ちかく、お母さまと支那間でお茶をいただきながら、お庭のほうを見ていたら、石段の三段目の石のところに、けさの蛇がまたゆっくりと現われた。(「斜陽」) ○その部落のはずれに、支那ふうの、ちょっとこった山荘があった。(「斜陽」) ○十畳間と六畳間と、それから支那式の応接間と、それからお玄関が三畳、	中国式の建築

お風呂場のところにも三畳がついていて。(「斜陽」)	
○我等の生活は自給自足のアナキズム風の桃源である。(「苦悩の年鑑」) ○あたしは、それは、支那の桃源境みたいなものを作ってみる事じゃないかと思うの。(「冬の花火」) ○そうしてあたしたちの桃源境を作るんだ。(「冬の花火」) ○あたしのあこがれの桃源境も、いじらしいような決心も、みんなばかばかしい冬の花火だ。(「冬の花火」)	中国の桃源境(中国のユートピアで、陶淵明の「桃花源記」に由来する)
これはもうはじめから、私を苦力のようにこき使う目的を以て私に近づいてきたのです。(「男女同権」)	苦力(下層の肉体労働者の呼称)
雛壇を遠くから眺めると、支那の壷の模様のやうに見えます。(「国技館」)	中国の壷
この便箋は支那のものださうです。ゆうべ義兄からもらひました。支那の文化に敬意を感じます。(「昭和 16 年 10 月 9 日付山岸外史宛書簡」)	中国の便箋
七夕は女の子のお祭りである。女の子が、織機のわざをはじめ、お針など、すべて手芸に巧みになるように織女星にお祈りをする宵である。支那に於いては棹の端に五色の糸をかけてお祭りをするのだそうであるが、日本では、藪から切って来たばかりの青い葉のついた竹に五色の紙を吊り下げて、それを門口に立てるのである。(中略)私は子供の頃から聞かされていた。この夜は、牽牛星と織女星が、一年にいちどの逢う瀬をたのしむ夜だった筈ではないか。(「作家の手帖」)	中国の七夕
鴎外の説に拠ると、この話は、支那の蕉鹿の話説から出てゐるのではあるまいか、といふのである。蕉鹿の話説といふのは、もと列子周の穆王第三に見えてゐるものださうで、鴎外はその原文も紹介してゐるが、話の様子が少し似てゐるやうでありながら、その主題は全然ちがつてゐるやうにも思はれる。(「革財布」)	中国の蕉鹿説話(「列子」にある説話)
支那に於いて、君子というのは、日本に於ける酒も煙草もやらぬ堅人などを指さしていうのと違って、六芸に通じた天才を意味しているらしい。(「パンドラの匣」)	中国の六芸(中国周代に士以上が学ぶべき六種の技芸、即ち礼・楽・射・御・書・数)
このたびわが塾に於いて詩経の講義がはじまるのであるが、この教科書は坊間の書肆より求むれば二十二円である。(「ロマネスク」)	「詩経」(現存する最古の書、孔子の作という)

廿日、戊辰、将軍家貞観政要の談議、今日其篇を終へらる、去る七月四日之を始めらる。(「右大臣実朝」)	「貞観政要」(唐の太宗が大臣と政治上の得失を問答した言葉を記録した本)
魯迅の随筆に、「以前、私は情熱を傾けて支那の社会を攻撃した文章を書いた事がありましたけれども、それも、実は、やつぱりつまらないものでした。支那の社会は、私がそんなに躍起となつて攻撃してゐる事を、ちつとも知りやしなかつたのです。ばかばかしい。」といふやうな文章があつて、私はそれを読んでひとりで声を出して笑つてしまつた事があるけれども、私が映画に就いて語る場合も、少しそれと似たやうな結果になるのではあるまいかと思はれる。(「藝術ぎらひ」)	魯迅の「答有恒先生」(我先前的攻撃社会、其実也是無聊的。社会没有知道我在攻撃、倘一知道、我早已死無葬身之所了。)
最近出版せられた本では、左の二冊、面白く読みました。 ○ホッフマン「ブラムビラ姫」石川道雄氏訳 ○吉川幸次郎氏評釈「李太白匹配金銭記」 (アンケート「若き日の感銘の書」)	「李太白匹配金銭記」(元の時代の喬吉が創作した戯曲)
ただいま支那神仙伝を読んでゐます。「昭和十九年十一月二十日付小田嶽夫宛書簡」	支那神仙伝
私はまた、木下杢太郎の「支那伝説集」を携行してゐた。さきの日机上に「聊斎志異」のひらかれてあるのを見て、参考になればと思つたのである。(中略)太宰さんは一旦私の原稿を取りに家に引き返した。私は「支那伝説集」を渡した。(小山清「風貌－太宰治のこと」)	木下杢太郎の「支那伝説集」
○支那を相手の時とは、まるで気持がちがうのだ。(「十二月八日」) ○同志たちは次々と投獄せられた。ほとんど全部、投獄せられた。中国を相手の戦争は継続している。(中略)中国との戦争はいつまでも長びく。たいていの人は、この戦争は無意味だと考えるようになった。(「苦悩の年鑑」)	中日戦争

二、中国の古典（成語や詩句など）

太宰における表現	収録作品	原典の中国古典
水至りて渠成る	「葉」	至時別作経画、水到渠成、不須預慮。（蘇軾「答秦太虚書」）
虎の威を借る	「虚構の春」	虎不知獣畏己而走也、以為畏狐也。（「戦国策」楚策）
同じ穴の狢	「新ハムレット」	古与今如一丘之狢。（「漢書」楊惲伝）
巧言令色	「創生記」、「もの思う葦（その一）」	巧言令色鮮矣仁。（「論語」学而）
五十歩百歩	「二十世紀旗手」「女の決闘」	以五十歩笑百歩、則何如。（「孟子」梁恵王上）
犬馬の労	「HUMAN LOST」	臣光智謀浅短、犬馬歯耋、誠恐一旦顛撲、無以報称。（「漢書」孔光伝）
桃李言わざれども	「HUMAN LOST」、「懶惰の歌留多」	桃李不言、下自成蹊。（「史記」李将軍列伝）
沐雨櫛風	「HUMAN LOST」、「津軽」	沐甚雨、櫛疾風。（「荘子」天下）
大器晩成	「懶惰の歌留多」	大方無隅、大器晩成。（「老子」同異）
修身、斉家、治国、平天下。	「懶惰の歌留多」	物格而後知至、知至而後意誠、意誠而後心正、心正而後身修、身修而後家斉、家斉而後国治、国治而後天下平。（「大学」）
佳人薄命	「懶惰の歌留多」	自昔佳人多薄命、対古来、一片傷心月。（辛棄疾「賀新郎・送杜叔高」）
懐玉有罪	「懶惰の歌留多」、「女の決闘」	匹夫無罪、懐璧其罪。（「春秋左氏伝」桓公十年）
下民しいたげ易く、上天あざむき難し。	「懶惰の歌留多」	下民易虐、上天難欺。（孟昶「頒令箴」）
在野遺賢	「愛と美について」	野無遺賢、萬邦咸寧。（「書経」大禹謨）
風の音に鶴唳	「火の鳥」、「禁酒の心」	聞風声鶴唳、皆以為王師已至。（「晋書」列伝第四十九）

意馬心猿	「火の鳥」、「パンドラの匣」	心猿不定、意馬四馳。（魏伯陽「周易参同契」）
厚顔無恥	「皮膚と心」	巧言如簧、顔之厚矣。（「詩経」小雅）
三十にして立つ	「兄たち」	吾十有五、而志於学。三十而立、四十不惑。（「論語」為政）
衣錦還郷	「善蔵を思う」	富貴不帰故郷、如衣錦夜行、誰知之者。（「史記」項羽本紀）
馬耳東風	「善蔵を思う」、「家庭の幸福」、「人間失格」、「「地球図」序」	世人聞此皆掉頭、有如東風射馬耳。（李白「答王十二寒夜独酌有懐」）
一挙手一投足	「一燈」、「不審庵」、「義理」	庸詎知有力者不哀其窮、而忘一挙手一投足之労而転之清波乎。（韓癒「応科目時与人書」）
一毛に於いて差異はあっても、九牛に於いては、リアルである。	「ろまん燈籠」	若九牛亡一毛、与蝼蟻何以異。（司馬遷「報任少卿書」）
友あり遠方より来る。また楽しからずや。	「正義と微笑」、「朝」	有朋自遠方来、不亦楽乎。（「論語」学而）
富貴も淫する能わず。	「帰去来」	富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫。（「孟子」騰文公下）
浩然之気	「禁酒の心」	我善養吾浩然之気。（「孟子」公孫丑上）
南方の強、北方の強。	「黄村先生言行録」	南方之強与、北方之強与、抑而強与。（「中庸」）
太原の一男子自ら顧るに庸且つ鄙たりと雖も。	「花吹雪」	太原一男子、自顧庸且鄙。（白居易「長慶二年七月自中書舎人出守杭州路次藍渓作」）
惻隠の心	「花吹雪」	無惻隠之心、非人也。（「孟子」公孫丑上）
何れの処か酒を忘れ難き。天涯旧情を話す。青雲倶に達せず、白髪逓に相驚く。	「津軽」	何処難忘酒、天涯話旧情。青雲倶不達、白髪递相驚。二十年前別、三千里外行。此時無一盞、何以平生叙。（白居易「何処難忘酒七首」）

二十年前に別れ、三千里外に行く。此時一盞無くんば、何を以てか平生を叙せん。		
人生足別離	「「グッド・バイ」作者の言葉」	花発多風雨、人生足別離。（于武陵「勧酒」）
酒無量不及乱。	「津軽」	唯酒無量、不及乱。（「論語」郷党）
臥薪嘗胆	「カチカチ山」	越王勾践反国、乃苦身焦思、置胆於坐、坐臥即仰胆、飲食亦嘗胆也。（「史記」越世家）
刻舟求剣	「舌切雀」	楚人有渉江者、其剣自舟中墜於水、急劇遽契其舟曰、是吾剣之所以墜。舟止、従其所契者入水求之。舟已行矣、而剣不行、求剣若此、不亦惑乎。（「呂氏春秋」察今）
君子豹変	「パンドラの匣」	小人革面、君子豹変。（「易経」革卦）
暴虎馮河	「未帰還の友に」	暴虎馮河、死而無悔者、吾不与也。（「論語」述而）
虎視眈々	「チャンス」	虎視眈々、其欲逐逐。（「易経」頤卦）
糟糠の妻	「人間失格」	臣聞貧賤之知不可忘、糟糠之妻不下堂。（「後漢書」宋弘伝）
酒池肉林	「人間失格」	行賞賜、酒池肉林。（「漢書」張騫伝）
背水の陣	「グッド・バイ」	信乃使万人先行、出、背水陳。（「史記」淮陰侯列伝）
将を射んと欲せば馬を射よ。	「もの思う葦（その一）」	射人先射馬、擒賊先擒王。（杜甫「前出塞」）
匹夫の勇	「困惑の辯」	此匹夫之勇、敵一人者也。（「孟子」梁恵王下）
烏合の衆	「如是我聞」	帰発突騎以轔烏合之衆、如摧枯折腐耳。（「後漢書」耿弇伝）
孔子於郷党恂恂如也似不能言者	「自著を語る」	孔子於郷党、恂恂如也、似不能言者。（「論語」郷党）
子曰、郷原徳之賊也	「自著を語る」	子曰、郷原徳之賊也。　（「論語」陽貨）

附表 4：岡田正之編『新定漢文読本』[184]における中国物

一、中国の作品

作品	作者又は典拠	所収
「偶成」	朱熹	第 1 巻　47 頁
「慎所與処者」	「孔子家語」	第 1 巻　82～83 頁
「人行有長短」	「世範」	第 1 巻　84 頁
「勧学文」	朱熹	第 1 巻　92 頁
「憫農」	李紳	第 2 巻　9 頁
「蠶婦」	無名氏	第 2 巻　9 頁
「望芦廬山瀑布」	李白	第 3 巻　71 頁
「山行」	杜牧	第 3 巻　75 頁
「論語鈔」	「論語」	第 4 巻　30～31 頁
「伯夷頌」	韓愈	第 4 巻　37～39 頁
「貧交行」	杜甫	第 4 巻　46 頁
「蘇台覧古」	李白	第 4 巻　48～49 頁
「越中懐古」	李白	第 4 巻　49 頁
「楓橋夜泊」	張継	第 4 巻　49 頁
「早發白帝城」	李白	第 4 巻　65 頁
「読孟嘗君傳」	王安石	第 4 巻　69～70 頁
「雑説」	韓愈	第 4 巻　72～73 頁
「留侯論」	蘇軾	第 4 巻　84～88 頁
「大風歌」	漢高祖	第 4 巻　100 頁
「題烏江亭」	杜牧	第 4 巻　100～101 頁
「虞美人草」	曾鞏	第 4 巻　101～102 頁
「岳武穆廟」	孫嘉淦	第 4 巻　120～122 頁
「夜遊孤山記」	邵長蘅	第 4 巻　122～125 頁
「山園小梅」	林逋	第 4 巻　125～126 頁

[184] 太宰治の中学（旧制青森中学校）時代に使った漢文教科書である。開成館　初版 1911 年 12 月。

「左忠毅公逸事」	方苞	第 4 巻　130～133 頁
「教条示龍場諸生」	王守仁	第 4 巻　133～139 頁
「桃花源記」	陶淵明	第 4 巻　148～150 頁
「愛蓮説」	周敦頤	第 4 巻　150～151 頁
「大学鈔」	「大学」	第 5 巻　9～10 頁
「孟子鈔」	「孟子」	第 5 巻　10～11 頁
「論語鈔」	「論語」	第 5 巻　12～13 頁
「中庸鈔」	「中庸」	第 5 巻　14 頁
「出師表」	諸葛亮	第 5 巻　29～33 頁
「蜀相」	杜甫	第 5 巻　33～34 頁
「弔古戦場文」	李華	第 5 巻　34～37 頁
「范文正公文集序」	蘇軾	第 5 巻　39～43 頁
「岳陽楼記」	范仲淹	第 5 巻　44～46 頁
「登岳陽楼」	杜甫	第 5 巻　46～47 頁
「臨洞庭贈張丞相」	孟浩然	第 5 巻　47 頁
「遊洞庭湖」	李白	第 5 巻　47 頁
「黄鶴楼送孟浩然之広陵」	李白	第 5 巻　48 頁
「黄州快哉亭記」	蘇轍	第 5 巻　48～51 頁
「漁翁」	柳宗元	第 5 巻　52 頁
「前赤壁賦」	蘇軾	第 5 巻　56～59 頁
「後赤壁賦」	蘇軾	第 5 巻　59～61 頁
「赤壁」	龍仁夫	第 5 巻　62 頁
「記承天寺夜游」	蘇軾	第 5 巻　62～63 頁
「為兄軾下獄上書」	蘇轍	第 5 巻　63～67 頁
「獄中寄子由二首」	蘇軾	第 5 巻　67～68 頁
「祭十二郎文」	韓愈	第 5 巻　68～74 頁
「陳情表」	李密	第 5 巻　74～77 頁
「燕詩示劉叟」	白居易	第 5 巻　77～78 頁
「瀧岡阡表」	欧陽修	第 5 巻　79～85 頁

「春望」	杜甫	第 5 巻　95 頁
「詩話」	司馬光	第 5 巻　96 頁
「詩文書画」	蘇軾	第 5 巻　96～97 頁
「張中丞傳後序」	韓愈	第 5 巻　97～103 頁
「聞笛」	張巡	第 5 巻　103～104 頁
「論語鈔」	「論語」	第 5 巻　104～105 頁
「孟子鈔」	「孟子」	第 5 巻　105～108 頁
「撫州顔魯公祠堂記」	曾鞏	第 5 巻　109～113 頁
「過平原作」	文天祥	第 5 巻　113～115 頁
「段太尉逸事状」	柳宗元	第 5 巻　115～121 頁
「柳子厚墓誌銘」	韓愈	第 5 巻　121～127 頁
「始得西山宴游記」	柳宗元	第 5 巻　127～128 頁
「鈷鉧潭記」	柳宗元	第 5 巻　129～130 頁
「帰去来辞」	陶淵明	第 5 巻　130～132 頁
「書洛陽名園記後」	李格非	第 5 巻　134～135 頁
「王彦章画像記」	欧陽修	第 5 巻　135～140 頁
「豊楽亭記」	欧陽修	第 5 巻　140～142 頁
「孟子鈔」	「孟子」	第 5 巻　143～144 頁
「朋党論」	欧陽修	第 5 巻　145～148 頁
「上高宗封事」	胡銓	第 5 巻　149～154 頁
「送石昌言為北使引」	蘇洵	第 5 巻　156～158 頁
「送元二使安西」	王維	第 5 巻　158～159 頁
「感憤」	陸游	第 5 巻　159 頁
「正気歌」	文天祥	第 5 巻　168～170 頁

二、中国の人物や典故

人物や典故	典拠	所収
伯兪悲泣	「説苑」	第 1 巻　24 頁
季札守信	「蒙求集注」	第 1 巻　34 頁
孟母断機	「新序」	第 1 巻　50～51 頁
司馬光仁智	「宋名臣言行録」	第 1 巻　51～52 頁
狐假虎威	「戦国策」	第 1 巻　60 頁
蛍雪之功		第 1 巻　98 頁
陶侃運甓	「日記故事大全」	第 1 巻　99 頁
大樹将軍	「後漢書」	第 1 巻　104～105 頁
読書百遍義自見・三余	「魏略」	第 2 巻　11 頁
黍離麦秀	「淮南子」	第 2 巻　44～45 頁
塞翁馬	「淮南子」	第 2 巻　45 頁
矛盾	「尸子」	第 2 巻　84 頁
鷸蚌之争	「戦国策」	第 2 巻　84 頁
杞憂	「列子」	第 2 巻　108 頁
守株	「韓非子」	第 2 巻　108 頁
唐太宗之治	「十八史略」	第 3 巻　7～8 頁
古稀	杜甫	第 3 巻　22 頁
春秋高	「新序」	第 3 巻　22 頁
春秋富	「史記」	第 3 巻　22 頁
矍鑠	「後漢書」	第 3 巻　23 頁
巨擘	「孟子」	第 3 巻　23 頁
耶律楚材	「十八史略」	第 3 巻　30～31 頁
廉希憲	「十八史略」	第 3 巻　31～32 頁
燕雀安知鴻鵠之志哉	「十八史略」	第 3 巻　59 頁
破竹之勢	「十八史略」	第 3 巻　59～60 頁
天授・多多益辨	「十八史略」	第 3 巻　60 頁
登竜門	「後漢書」	第 3 巻　115 頁

破天荒	「事類全書」	第 3 巻　115 頁
和氏之璧	「韓非子」	第 3 巻　115～116 頁
呉下阿蒙・刮目相待	「十八史略」	第 4 巻　11 頁
出一頭地	「宋史」	第 4 巻　11 頁
孔子	「十八史略」	第 4 巻　24～29 頁
伯夷・叔斉	「史記」	第 4 巻　35～37 頁
管鮑之交	「史記」	第 4 巻　44～45 頁
呉越之争	「十八史略」	第 4 巻　46～48 頁
陶朱・猗頓	「十八史略」	第 4 巻　50～51 頁
龍断	「孟子」	第 4 巻　53 頁
守銭虜	「後漢書」	第 4 巻　53 頁
奇貨可居	「十八史略」	第 4 巻　53 頁
無信不立	「論語」	第 4 巻　54 頁
蘇秦約従	「十八史略」	第 4 巻　65～67 頁
孟嘗君	「十八史略」	第 4 巻　68～69 頁
先従隗始	「十八史略」	第 4 巻　70～72 頁
田単復斉	「十八史略」	第 4 巻　73～74 頁
毛遂定従	「十八史略」	第 4 巻　75～77 頁
三年不蜚不鳴	「十八史略」	第 4 巻　77～78 頁
問鼎之軽重	「左傳」	第 4 巻　78 頁
藺相如及廉頗	「十八史略」	第 4 巻　78～80 頁
大勇	「孟子」	第 4 巻　82 頁
孺子可教	「史記」	第 4 巻　82～84 頁
鴻門之会	「史記」	第 4 巻　88～97 頁
項羽戦死	「十八史略」	第 4 巻　98～100 頁
岳飛	「宋名臣言行録別集」・「宋史」・「行実編年」	第 4 巻　116～120 頁
五十歩百歩	「孟子」	第 4 巻　142～143 頁
成徳達材	「孟子」	第 4 巻　143 頁

一日暴之、十日寒之。	「孟子」	第 4 巻　143 頁
易地皆然	「孟子」	第 4 巻　143 頁
陶淵明	「通鑑綱目」	第 4 巻　147～148 頁
牛刀割鶏	「論語」	第 4 巻　156 頁
報本反始	「礼記」	第 4 巻　156 頁
量入為出	「礼記」	第 4 巻　156 頁
篳路藍縷	「左傳」	第 4 巻　156 頁
劉備及諸葛亮	「十八史略」	第 5 巻　21～29 頁
避三舎	「左傳」	第 5 巻　37 頁
宋襄之仁	「十八史略」	第 5 巻　38 頁
背水之陣	「十八史略」	第 5 巻　38～39 頁
遼東豕	「十八史略」	第 5 巻　39 頁
赤壁之戦	「十八史略」	第 5 巻　52～54 頁
倚門之望	「戦国策」	第 5 巻　87 頁
菽水之歓	「礼記」	第 5 巻　87 頁
風樹之嘆	「韓詩外傳」	第 5 巻　88 頁
箕裘之業	「礼記」	第 5 巻　88 頁
天宝之乱	「十八史略」	第 5 巻　88～94 頁
漱石枕流	「世説」	第 5 巻　133 頁
空谷足音	「荘子」	第 5 巻　133 頁
朝三暮四	「荘子」	第 5 巻　133 頁
文天祥	「十八史略」・「紀事本末」	第 5 巻　159～167 頁

三、中国の格言

格言	典拠	所収
人之行、莫大於孝。	「孝経」	第 1 巻　28 頁
事父母能竭其力、事君能致其身。	「論語」	第 1 巻　28 頁

君子不重則不威。	「論語」	第 1 巻　60 頁
無友不如己者。	「論語」	第 1 巻　83 頁
益者三友、損者三友。	「論語」	第 1 巻　83 頁
過則勿憚改。	「論語」	第 1 巻　90 頁
過而不改是謂過矣。	「論語」	第 1 巻　91 頁
見善則遷有過則改。	「周易」	第 1 巻　91 頁
仁者必有勇。勇者不必有仁。	「論語」	第 1 巻　104 頁
人常咬得菜根、則百事可做。	「小学」	第 1 巻　109 頁
士志於道、而恥悪衣悪食者、未足與議也。	「論語」	第 1 巻　109 頁
倉廩実、則知礼節、衣食足、則知栄辱。	「管子」	第 2 巻　9 頁
見義不為、無勇也。	「論語」	第 2 巻　38 頁
生亦我所欲也、義亦我所欲也。二者不可得兼、舎生而取義者也。	「孟子」	第 2 巻　38 頁
疾風知勁草。	後漢光武帝	第 2 巻　50 頁
寧可玉砕、何能瓦全。	元景皓	第 2 巻　50 頁
為人臣者、主爾忘身、国爾忘家、公爾忘私。	賈誼	第 2 巻　66 頁
奉君忘身、殉国忘家。	「中論」	第 2 巻　66 頁
道理貫心肝、忠義填骨髄。	蘇軾	第 2 巻　66 頁
可以託六尺之孤、可以寄百里之命。臨大節而不可奪也。	「論語」	第 2 巻　91 頁
歳寒然後知松柏之後凋也。	「論語」	第 2 巻　91 頁
陽気発処、金石亦透。精神一到、何事不成。	朱熹	第 2 巻　105 頁
胆欲大、而心欲小。	孫思邈	第 3 巻　63 頁
大丈夫当雄飛、安能雌伏。	趙温	第 3 巻　63 頁

不入虎穴、不得虎子。	班超	第 3 巻　63 頁
人有不為也、而後可以有為。	「孟子」	第 3 巻　94 頁
無為其所不為、無欲其所不欲。	「孟子」	第 3 巻　94 頁
仁者無敵。	「孟子」	第 3 巻　122 頁
君子有不戦、戦必勝矣。	「孟子」	第 3 巻　122 頁
天時不如地利、地利不如人和。	「孟子」	第 3 巻　122 頁
始如処女、敵人開戸。後如脱兎、敵不及拒。	「孫子」	第 4 巻　6 頁
百戦百勝、非善之善者也。不戦而屈人之兵、善之善者也。	「孫子」	第 4 巻　6 頁
用兵之法、無恃其不来、恃吾有以待之。無恃其不攻、恃吾有所不可攻。	「孫子」	第 4 巻　7 頁
小不忍則乱大謀。	「論語」	第 4 巻　88 頁
破山中賊易、破心中賊難。	王守仁	第 4 巻　139 頁
業精於勤、荒於嬉。行成於思、毀於随。	韓愈	第 4 巻　139 頁
凡為人子之礼、冬温而夏清、昏定而晨省。	「礼記」	第 5 巻　20 頁
身体髪膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顕父母、孝之終也。	「孝経」	第 5 巻　21 頁
君子事親孝。故忠可移於君。	「孝経」	第 5 巻　21 頁

参考文献一覧

日本の書籍（年代順）

三宅元信『明丘瓊山故事必読成語考集注』巻上　1791 年 9 月。

山崎昇『鼇頭韻学圓機活法』巻 4　1882 年。

巌谷小波『日本昔噺』第 18 編『浦島太郎』　博文館　1896 年 2 月。

田島志一『真美大観』第 16 巻　日本真美協会　1907 年 7 月。

釈清潭『寒山詩新釈』　国光社　1907 年 10 月。

井土霊山『ポケット寒山詩』二松堂　1911 年 4 月。

高梨晩霞編『岡田氏新定漢文読本詳解 1～5 合巻』　集文館　1912 年 6 月。

鈴木敏也『雨月物語新釈』　冨山房　1916 年 1 月。

岡田正之編『新定漢文読本』第 4 巻　開成館　1916 年 12 月。

毛利湛然『寒山詩評釈』　禅世界社　1917 年 1 月。

柿村重松注『本朝文粋』　下冊　内外出版　1922 年 4 月。

『国訳漢文大成』経子史部　第 20 巻『呂氏春秋』　国民文庫刊行会　1924 年 12 月。

『支那文学大観』第 12 巻『聊斎志異』　支那文学大観刊行会　1926 年 3 月。

『世界地理風俗大系』全 25 巻　新光社　1928 年 9 月～1931 年 12 月。

鈴木敏也『新注雨月物語評釈』　精文館書店　1929 年 7 月。

田中貢太郎訳・公田連太郎注『聊斎志異』　北隆堂　1929 年 11 月。

松井等『東洋史概説』　共立社　1930 年 4 月。

井伏鱒二『夜ふけと梅の花』　新潮社　1930 年 4 月。

吉野作造『対支問題』　日本評論社　1930 年 12 月。

『日本画大成』第 15 巻　東方書院　1932 年 7 月。

『世界歴史大系』全 25 巻　平凡社　1933 年 10 月～1936 年 9 月。

松元竹二『支那・朝鮮・台湾神話伝説集』 誠文堂　1934 年 4 月

文部省『日本国宝全集』第 60 輯　日本国宝全集刊行会　1934 年 5 月。

松井等『東洋史要釈』　共立社　1934 年 6 月。

太田悌蔵『寒山詩』　岩波書店　1934 年 10 月。

北條民雄『いのちの初夜』　創元社　1936 年 12 月。

『大魯迅全集』全 7 巻　改造社　1937 年 2 月～1937 年 8 月。

周佛海著・犬養健訳『三民主義解説』　岩波書店　1939 年 6 月。
河野密『孫文の生涯と国民革命』　日本放送出版協会　1940 年 2 月。
小田嶽夫『魯迅伝』　筑摩書房　1941 年 3 月。
『大東亜文学』第 1 号　日本電報通信社　1944 年 11 月。
『大東亜文学』第 2 号　日本電報通信社　1944 年 12 月。
竹内好『魯迅』　日本評論社　1944 年 12 月。
奥野健男『太宰治論』　近代生活社　1956 年 2 月。
『池大雅画譜』第 1 帙　中央公論美術出版　1957 年 2 月。
『池大雅画譜』第 3 帙　中央公論美術出版　1958 年 4 月。
『日野葦平選集』第 1 巻　創元社　1958 年 5 月。
『池大雅画譜』第 5 帙　中央公論美術出版　1959 年 5 月。
『新釈漢文大系』第 1 巻『論語』　明治書院　1960 年 5 月。
延原大川『平訳寒山詩』　明徳出版社　1961 年 10 月。
『新釈漢文大系』第 4 巻『孟子』　明治書院　1962 年 6 月。
『新釈漢文大系』第 19 巻『唐詩選』　明治書院　1964 年 3 月。
『日本古典文学大系』第 96 巻『近世随想集』　岩波書店　1965 年 9 月。
『新釈漢文大系』第 7 巻『老子・荘子（上）』　明治書院　1966 年 10 月。
『新釈漢文大系』第 8 巻『荘子（下）』　明治書院　1967 年 3 月。
『新釈漢文大系』第 2 巻『大学・中庸』　明治書院　1967 年 4 月。
『新釈漢文大系』第 20 巻『十八史略（上）』　明治書院　1967 年 7 月。
『新釈漢文大系』第 34 巻『楚辞』　明治書院　1970 年 9 月。
『新釈漢文大系』第 30 巻『春秋左氏伝（一）』　明治書院　1971 年 10 月。
『鴎外全集』第 16 巻　岩波書店　1973 年 2 月。
『水墨美術大系』全 17 冊　講談社　1973 年 3 月～1977 年 7 月。
『新釈漢文大系』第 39 巻『史記（二）本紀下』　明治書院　1973 年 4 月。
『全釈漢文大系』第 33 巻『山海経・列仙伝』　集英社　1975 年 10 月。
『新釈漢文大系』第 70 巻『唐宋八大家文読本（一）』　明治書院　1976 年 3 月。
宗政五十緒校注『近世畸人伝・続近世畸人伝』　平凡社　1976 年 3 月。
鈴木由次郎注『周易参同契』　明徳出版社　1976 年 7 月。
『和刻本類書集成』第 3 輯　汲古書院　1977 年 2 月。

『鑑賞日本古典文学』第 23 巻『中世説話集　古今著聞集・発心集・神道集』　角川書店 1977 年 5 月。
『逍遥選集』第 3 巻　第一書房　1977 年 6 月。
『全釈漢文大系』第 24 巻『戦国策（中）』　集英社　1977 年 7 月。
桂英澄『太宰治研究Ⅱその回想』　筑摩書房　1978 年 6 月。
『新釈漢文大系』第 86 巻『史記（六）世家（中）』　明治書院　1979 年 10 月。
『東洋学文献センター叢刊』第 34 輯『小説月報（1920－1931）：総目録』　東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター　1980 年 3 月。
『太宰治必携』　学燈社　1980 年 9 月。
実藤恵秀『中国留学生史談』　第一書房　1981 年 5 月。
小林昇『中国・日本における歴史観と隠逸思想』　早稲田大学出版部　1983 年 1 月。
『日本昔話通観』第 26 巻　同朋舎　1983 年 7 月。
松枝茂夫・和田武司『中国の詩人　陶淵明』　集英社　1983 年 9 月。
『中国の古典』第 31 巻『唐宋八家文（下）』　学習研究社　1983 年 12 月。
渡部芳紀『太宰治　心の王者』　洋々社　1984 年 5 月。
『中国の古典』第 24 巻『文選下』　学習研究社　1985 年 1 月。
『新釈漢文大系』第 26 巻『書経（下）』　明治書院　1985 年 4 月。
『新釈漢文大系』第 51 巻『墨子』　明治書院　1987 年 6 月。
『新釈漢文大系』第 23 巻『易経（上）』　明治書院　1987 年 7 月。
『百物語怪談集成』　国書刊行会　1987 年 7 月。
文庫版『太宰治全集』全 10 巻　筑摩書房　1988 年 8 月～1989 年 6 月。
『太宰治全集』全 12 巻＋別巻　筑摩書房　1989 年 6 月～1992 年 4 月。
『文学報国』　不二出版　1990 年 12 月。
相馬正一『増補若き日の太宰治』　津軽書房　1991 年 5 月。
『新釈漢文大系』第 43 巻『管子（中）』　明治書院　1991 年 5 月。
『新編名宝日本の美術』第 27 巻　小学館　1991 年 12 月。
『新釈漢文大系』第 24 巻『易経（中）』　明治書院　1993 年 12 月。
『芥川龍之介全集』第 1 巻　岩波書店　1995 年 11 月。
『芥川龍之介全集』第 6 巻　岩波書店　1996 年 4 月。
『新釈漢文大系』第 90 巻『史記（十）列伝（三）』　明治書院　1996 年 6 月。

『井伏鱒二全集』第 1 巻　筑摩書房　1996 年 11 月。
津島美知子『回想の太宰治』　人文書院　1997 年 8 月。
『芥川龍之介全集』第 21 巻　岩波書店　1997 年 11 月。
野原一夫『太宰治　生涯と文学』　筑摩書房　1998 年 5 月。
『太宰治全集』全 13 巻　筑摩書房　1998 年 5 月～1999 年 5 月。
杉野要吉『淪陥下北京一九三七－四五―交争する中国文学と日本文学』　三元社　2000 年 6 月。
『新釈漢文大系』第 112 巻『詩経（下）』　明治書院　2000 年 7 月。
『新釈漢文大系』第 81 巻『文選（賦篇）下』　明治書院　2001 年 7 月。
吉川忠夫注『後漢書（三）列伝（一）』　岩波書店　2002 年 5 月。
九頭見和夫『太宰治と外国文学―翻案小説の「原典」へのアプローチ』　和泉書院　2004 年 3 月。
『新釈漢文大系』第 91 巻『史記（十一）列伝（四）』　明治書院　2004 年 6 月。
志村有弘・渡部芳紀編『太宰治大事典』　勉誠出版　2005 年 1 月。
康東元『日本近・現代文学の中国語訳総覧』　勉誠出版　2006 年 1 月。
『中国古典小説選』第 6 巻　『広異記・玄怪録・宣室志他』　明治書院　2008 年 1 月。
邱雅芬『芥川龍之介の中国－神話と現実－』　花書院　2010 年 3 月
井波律子訳『世説新語』第 4 巻　平凡社　2014 年 5 月。

中国の書籍（年代順）

班固『漢書』（本論文では、中華書局　1962 年 6 月、に拠った。）
房玄齢『晋書』（本論文では、中華書局　1974 年 11 月、に拠った。）
閭丘胤編『寒山詩』（本論文では、項楚『寒山詩注』　中華書局　2000 年 3 月、に拠った。）
李昉編『太平広記』（本論文では、上海古籍出版社　1990 年 12 月、に拠った。）
呉楚材編『古文観止』（本論文では、宋晶如注『古文観止』　世界書局　1936 年 7 月、に拠った。）
呉省蘭編『藝海珠塵』（本論文では、厳一萍選輯『百部叢書集成』35『藝海珠塵』　芸文印書館　1968 年、に拠った。）
唐圭璋編『全宋詞』（本論文では、中華書局　1965 年 6 月、に拠った。）
『訳叢』第 1 巻第 1 期～第 6 巻第 4 期　中日文化協会　1941 年 2 月～1944 年 6 月。

『“東方雑誌”総目：一九〇四年三月－一九四八年十二月』　生活・読書・新知三聯書店 1957 年 12 月。
『章克標文集（下)』　上海社会科学院出版社　2003 年 1 月。
王向遠『日本文学漢訳史』　寧夏人民出版社　2007 年 10 月。

雑誌論文（年代順）

平野謙「混濁と希薄　作家精神の在りやう　文芸時評」　『都新聞』　1940 年 10 月 31 日。
鬼生田貞雄「作家と自覚　文芸時評」　『文芸首都』　1940 年 12 月。
高見順「反俗と通俗　文芸時評」　『文芸春秋』　1940 年 12 月。
岩上順一「太宰治の一面」　『三田文学』　1941 年 2 月。
近藤春雄「中国の龍宮譚―唐代小説を中心に―」　『愛知県立女子短期大学紀要』第 2 号　1951 年 11 月。
竹内好の「太宰治のこと」　『太宰治全集月報』第 3 号　筑摩書房　1957 年 12 月。
菊田義孝「「竹青」についての思い出」　『太宰治研究』第 1 巻　審美社　1962 年 10 月。
大塚繁樹「薛偉と太宰治」　『比較文学)』　第 6 巻　1963 年 11 月。
大塚繁樹「太宰治の「竹青」と中国の文献との関連」　『愛媛大学紀要（人文科学)』　第 9 巻　1963 年 12 月。
大塚繁樹「太宰治作「惜別」と中国古典」　『愛媛大学紀要（人文科学)』　第 10 巻　1964 年 12 月。
村松定孝「太宰治と中国文学―「清貧譚」と「竹青」について」　『比較文学年誌』　第 5 号　1969 年 3 月。
鈴木二三雄「太宰治と中国文学（一）―「魚服記」について―」　『フェリス女学院大学紀要』　第 4 巻　1969 年 3 月。
鈴木二三雄「太宰治と中国文学(二)―「清貧譚」と「竹青」」　『立正大学国語国文』第 7 号　1969 年 3 月。
小野正文「太宰治の思い出」　『国文学解釈と鑑賞』第 34 巻第 5 号　1969 年 5 月。
大野正博「聊斎志異「黄英」の研究―太宰治「清貧譚」との比較による作意の考察」　『東洋学』　第 25 巻　1971 年 5 月。
大野正博「聊斎志異「竹青」について―太宰治「竹青」との比較」　『東洋学』　第 29

巻　1973 年 6 月。
杉浦明平「日本の隠者、中国の隠者」　『国文学解釈と教材の研究』第 19 巻第 14 号　1974 年 12 月。
鳥居邦朗「水のモチーフ－「魚服記」を視座として」　『国文学解釈と教材の研究』　第 24 巻第 9 号　1979 年 9 月。
五十嵐康夫「太宰治『惜別』成立論―さねとう・けいしゅう氏の著作を中心に―」　『日本近代文学会会報』第 51 号　1980 年 3 月。
浅田高明「『惜別』小論（下）」　『日本医事新報』第 2928 号　1980 年 6 月。
松木道子の「太宰治『惜別』における魯迅受容のあり方」　『国語国文研究と教育』　第 9 号　1981 年 1 月。
千葉正昭「太宰治と魯迅―『惜別』を中心として」　『国文学解釈と鑑賞』　第 48 巻第 9 号　1983 年 6 月。
相場正一「幻の漢訳「竹青」について」　『上越教育大学国語研究』第 4 号　1990 年 2 月。
松島芳昭「『清貧譚』―聖と俗の狭間で」　『解釈学』第 5 号　1991 年 6 月。
古田島洋介「赤い糸の伝説」　『明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化学科』第 1 号　1993 年 3 月。
古田島洋介「赤い糸の伝説（続）」　『明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化学科』　第 2 号　1994 年 3 月。
古田島洋介「江戸時代における赤縄故事」　『明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化学科』　第 3 号　1995 年 3 月。
古田島洋介「明治以後の「赤い糸」」　『明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化学科』　第 4 号　1996 年 3 月。
祝振媛「太宰治と中国―太宰の『竹青』」　『解釈と鑑賞』第 63 巻第 6 号　1998 年 6 月。
榎本重男「太宰治の『清貧譚』考―『聊斎志異』の『黄英』と比較して」　『人文社会科学研究』　第 40 号　2000 年 3 月。
青木京子「太宰治と絵画」　『京都語文』第 7 号　2001 年 5 月。
藤原耕作「太宰治文学と中国―「清貧譚」と「黄英」」　『序説Ⅱ』　第 10 号　2006 年 1 月。
大澤理子「“淪陥期”上海における日中文学の“交流”史試論―章克標と『現代日本小説

選』―太平出版印刷公司・太平書局出版目録（単行本)」　『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第 9 号　2006 年 4 月。
王浄華「『清貧譚』と『竹青』について」　『国語の研究』　第 32 巻　2006 年 11 月。
井原あや「「あなた」と別れるということ―太宰治「きりぎりす」をめぐって―」　『国文学　言語と文芸』第 124 号　2008 年 3 月。
張能泉「中国現代文壇対谷崎潤一郎的翻訳与接受」　『日本学論壇』第 4 期　2007 年 11 月。
宋炳辉「二十世紀上半期亜洲国家文学在中国的訳介史述略」
(http://www.zwwhgx.com/content.asp?id=2352)

博士論文

金京淑「太宰治における時代と文学―中期を中心に」　東京外国語大学　2010 年。